こ-12-6

ゼロから始める魔法の書Ⅵ

―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける
Illustration しずまよしのり

ゼロから始める魔法の書Ⅵ
―詠月の魔女〈上〉―
虎走かける

電撃文庫
DENGEKI BUNKO

詠月の魔女

アルバスとの再会が、新たな波乱を呼ぶ――

ゼロと獣の傭兵の旅の物語は、
始まりの地〈ウェニアス王国〉へ！

電撃文庫

ゼロから始める魔法の書Ⅵ
—詠月の魔女〈上〉—

ゼロと獣の傭兵の旅の物語は、始まりの地〈ウェニアス王国〉へ——

“魔女”と“教会”を戦争へと導こうとする謎の組織〈不完全なる数字〉を追うゼロたち。一行は、ゼロの故郷である〈弓月の森〉を訪れるのだが——“十三番”の名前を口にした瞬間、闇に放り出されてしまう……。

十三番の操る“強制召喚”によりゼロたちが導かれた場所、それは魔法国家へと変貌を遂げたウェニアス王国だった！国家主席魔法使いとなった詠月の魔女・アルバスとの邂逅を果たす一行だったが、国とアルバスを取り巻く環境はどこか不穏な空気に包まれていて……。

電撃文庫
MAGAZINE
電撃文庫が贈る
最強エンタテインメントマガジン！
偶数月10日発売
最新情報はこちら！ http://dengekibunko.jp/

9784048659130

1920193005707

ISBN978-4-04-865913-0
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体570円
※消費税が別に加算されます

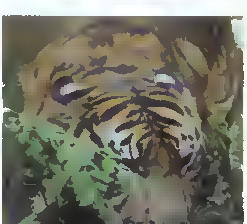
STORY

"魔女"と"教会"を戦争へと導こうとする謎の組織〈不完全なる数字(セストウム)〉を追うゼロたち。一行は、ゼロの故郷である〈弓月の森〉を訪れるのだが——

"十三番"の名前を口にした瞬間、闇に放り出されてしまう・・。

十三番の操る"強制召喚"によりゼロたちが導かれた場所、それは魔法国家へと変貌を遂げたウェニアス王国だった!

国家主席魔法使いとなった詠月の魔女・アルバスとの邂逅を果たす一行だったが、国とアルバスを取り巻く環境はどこか不穏な空気に包まれていて・・。



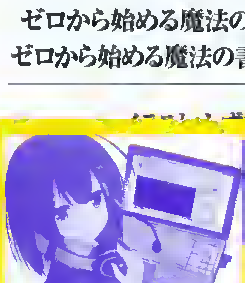
虎走(こばしり)かける

寅年の射手座。東京の下町育ち。一人焼肉や一人遊園地を平気でこなす真性のボッチだが、友達がいないわけではないと思いたい年頃。六巻で一巻の舞台に戻ってきたので、著者近影も1巻のときの虎。

【電撃文庫作品】

ゼロから始める魔法の書
ゼロから始める魔法の書Ⅱ ―アクディオスの聖女〈上〉―
ゼロから始める魔法の書Ⅲ ―アクディオスの聖女〈下〉―
ゼロから始める魔法の書Ⅳ ―黒竜島の魔姫―
ゼロから始める魔法の書Ⅴ ―楽園の墓守―
ゼロから始める魔法の書Ⅵ ―詠月の魔女〈上〉―

オススメ新作に注目！



第22回電撃小説大賞、最終選考作！
"ニコ生"な青春を描く異色作！
彼女と俺とみんなの放送
著○高峰自由　イラスト○cuon

第21回電撃小説大賞　大賞　受賞者が贈る
新感覚の異世界ファンタジー！
この大陸で、フィジカは
凄い薬師だった
著○鳴見すた　イラスト○アマガイタロー

彼女の正体は　←くじら!?
え!?　ビューって潮を吹く　あれ!?
くじらな彼女に俺の青春が
ぶち壊されそうになっています
著○鏡貴　イラスト○あめとゆき

こ-12-6

ゼロから始める魔法の書VI
―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける

電撃文庫

ゼロから始める魔法の書Ⅵ
―詠月の魔女〈上〉―

ゼロと獣の傭兵の旅の物語は、始まりの地〈ウェニアス王国〉へ――

“魔女”と“教会”を戦争へと導こうとする謎の組織〈不完全なる数字〉を追うゼロたち。一行は、ゼロの故郷である〈弓月の森〉を訪れるのだが――“十三番”の名前を口にした瞬間、闇に放り出されてしまう……。

十三番の操る“強制召喚”によりゼロたちが導かれた場所、それは魔法国家へと変貌を遂げたウェニアス王国だった！国家主席魔法使いとなった詠月の魔女・アルバスとの邂逅を果たす一行だったが、国とアルバスを取り巻く環境はどこか不穏な空気に包まれていて……。

9784048659130

1920193005707

ISBN978-4-04-865913-0
C0193 ¥570E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

定価: 本体570円
※消費税が別に加算されます

虎走(こばし)かける

寅年の射手座。東京の下町育ち。一人焼肉や一人遊園地を平気でこなす真性のボッチだが、友達がいないわけではないと思いたい年頃。六巻で一巻の舞台に戻ってきたので、著者近影も1巻のときの虎。

【電撃文庫作品】

ゼロから始める魔法の書
ゼロから始める魔法の書Ⅱ ―アクディオスの聖女〈上〉―
ゼロから始める魔法の書Ⅲ ―アクディオスの聖女〈下〉―
ゼロから始める魔法の書Ⅳ ―黒竜島の魔姫―
ゼロから始める魔法の書Ⅴ ―楽園の墓守―
ゼロから始める魔法の書Ⅵ ―詠月の魔女〈上〉―

イラスト：しずまよしのり

埼玉県在住。主人公が獣人という一風変わった作品なので最初、傭兵を描くのにてこずりましたがさすがに慣れてきました。ゼロと傭兵のこれからの物語を楽しみにしつつイラストでより魅力のある作品に出来たらと思います！

ゼロから始める魔法の書Ⅵ

―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける

電撃文庫

3094

DENGEKI BUNKO

ゼロから始める魔法の書 VI

―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける
Illustration
しずまよしのり

「ああ、ついに我輩の野望がここに成就した…
なんと暖かく、柔らかで、理想らしい寝床だ。
我輩、一生ここで暮らしたい」

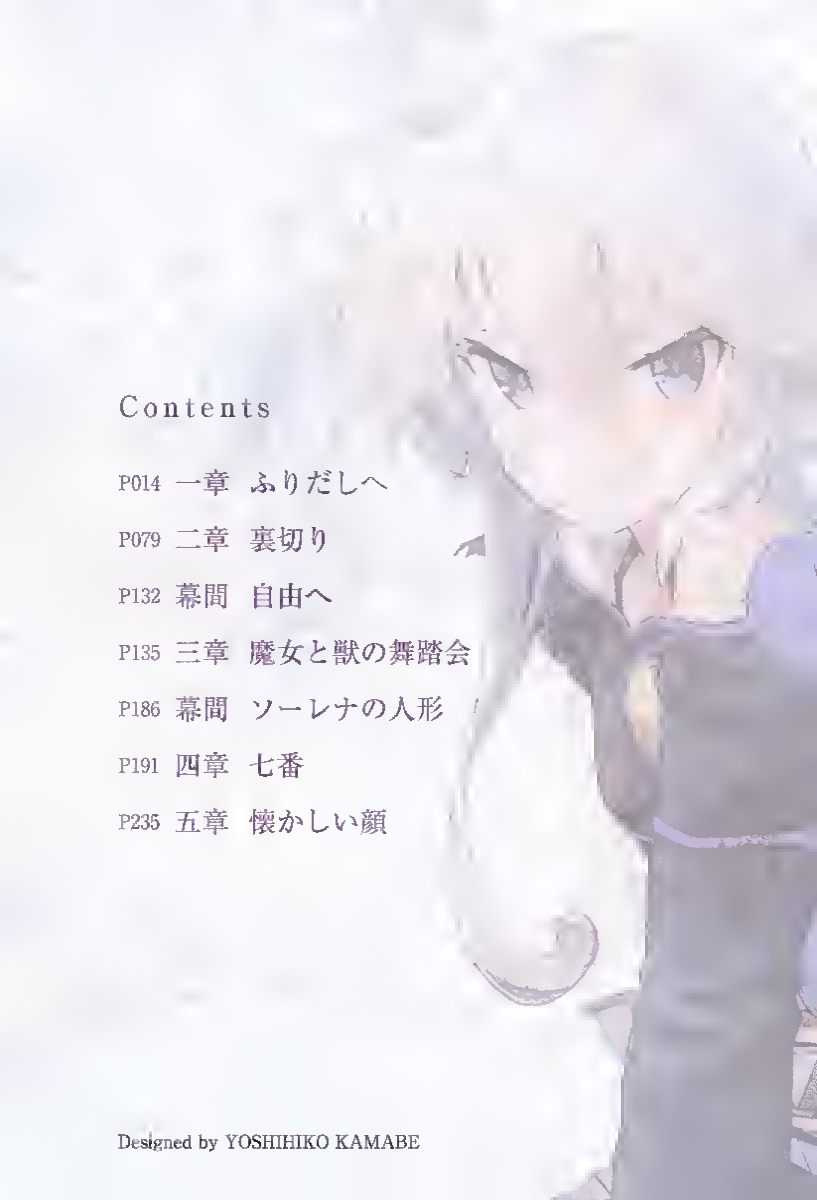
「うむ、なかなか壮観だ」
「……すげえな……」

舞踏会が行われる、大広間への扉が開かれる。
その瞬間、眩しいほどの光が一気に襲いかかってきた。
――そして、注がれる視線、視線、また視線。
どうやら、これが今のアルバスの世界らしい。

「でしょ？　僕も初めて演説したときは足が震えたし、正直今も結構我慢してる」

「――ねえ、おばあちゃん。もしおばあちゃんなら……」

――本当に、嫌な事ばかりだ。
こんなに頑張っているのに。
必死に頑張っているのに、
傭兵も、ゼロも、ホルテムも――
誰も優しくしてくれない。



Contents

P014 一章　ふりだしへ

P079 二章　裏切り

P132 幕間　自由へ

P135 三章　魔女と獣の舞踏会

P186 幕間　ソーレナの人形

P191 四章　七番

P235 五章　懐かしい顔

Designed by YOSHIHIKO KAMABE

ゼロから始める魔法の書 VI

―詠月の魔女〈上〉―

「ほんとに、嫌な事ばっかりなんだ。もう限界なんてとっくに超えてるのに、問題は次から次へとって感じでさ」

柔らかな金髪を指先で弄びながら、アルバスはテーブルにだらしなく頬を押しつけ、力なくため息を吐いた。

場所は、今は亡き、アルバスの祖母の家――悪意ある者を拒み、救いを求める者を導く魔女の森にひっそりとたたずむ〝偉大なるソーレナ〟の隠れ家である。

ソーレナが魔術を用いて作り上げたこの家は、すべてがねじれた木や、バカバカしいほど巨大な蔦や、永遠に枯れない花などで構築されている。

アルバスが突っ伏しているテーブルは無数の蔦が絡み合ってできたものだし、腰を下ろしている椅子は不自然に折れ曲がった木の幹だ。

アルバスはこの場所が好きだった。

物心ついた頃からこの家で育ってきたし、ここには幸せだった頃の思い出が詰まっている。

この場に漂う空気は清涼で、穏やかで、生前のソーレナの気配さえ感じられた。

だから何か嫌な事が起こると、アルバスはいつもこの家に逃げ込んで、思い出の中のソーレナに語りかけた。

厳しく、聡明で、誰よりも優しかった大切なおばあちゃん――もし生きていてくれたら、一体何を言ってくれるだろうと想像を巡らせると、少しだけ元気になれる気がするからだ。

――けれども。

「なんか、もう疲れちゃった。最近では僕が陛下を毒殺したんだって言う奴まで出てきてさ。魔女が国を乗っ取ろうとしてるって……乗っ取るってなんだよ。共存しようって決めたのに」

「ひどい話だねぇ」

返事が、あった。

独り言のようなアルバスの呟きに、優しげな声で。

「お前はむしろ、王を守ろうとしていたのに。王が毒殺されたって言うなら、犯人はむしろ、魔女との共存を拒む人間の仕業だろうよ」

声を上げたのは、揺り椅子に座らせた古ぼけた人形だ。とんがり帽子と長いローブを身につけたそれは、アルバスが幼い頃に祖母が――ソーレナがくれたものである。

無論、そのときの人形は、動いたり喋ったりはしなかったが――。

「大丈夫だよ。心配しなくても、お前の味方だってたくさんいる。お前は賢い子だから、ちゃんと敵と味方を見分けることができるだろう？」

うん、と頷き、アルバスは人形に視線を投げる。

そうすると、ささくれていた心が少しだけ落ち着くような気がした。この人形だけはアルバスを責めないし、叱らないし、仕事をしろと急かしもしない。

――と。

「お嬢さん！　ここにいるんでしょう？　まずいですよ、仕事をほっぽりだして！　陛下が身罷られて、ただでさえ大騒ぎなんですから！」

家の外からアルバスを呼ぶ声が聞こえてきた。

アルバスは頬を膨らませて顔を顰め、椅子から渋々立ち上がる。

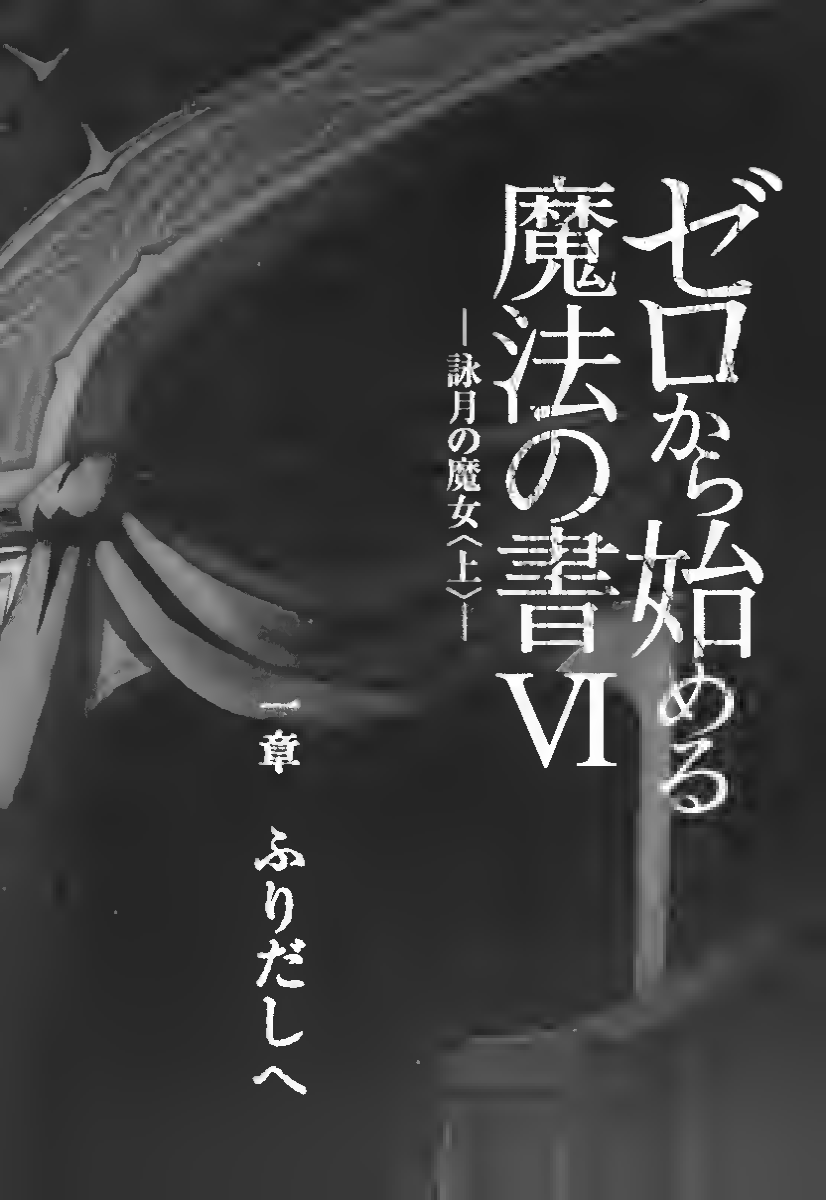
「どうせまた、下らない会議だとか、謁見だとか、苦情だとか、そういうのだろ。僕じゃなくてもいい仕事ばっかり。全部ホルデムがやればいいのに……」

「無理にでも、少しくらい休んだ方がいいんじゃないのかい？　働き詰めじゃないか」

人形の優しい言葉に、アルバスは微笑む。

「ありがと。けど、行かなきゃ。僕、偉い人だから。またくるね――おばあちゃん」

いつでもおいで、と返す人形の表情にも、心なしか笑みが浮かんでいるようだった。



ゼロから始める魔法の書 VI

―詠月の魔女〈上〉―

一章　ふりだしへ

1

さて、少しばかり状況をおさらいしよう。

おさらいでもしなきゃやってられん。――それほど最悪な状況だった。

始まりはウェニアス王国で起こった、魔女と国との内乱だ。

魔女狩りの戦力としてウェニアス王国に入国した俺はゼロと出会い、人間に戻してもらう事を条件にその護衛を引き受けた。

それが「ウェニアス王国から流出した魔法の情報を集める」に切り替わり、今では〈不完全なる数字〉とかいうふざけた連中を追っている。

そう――問題は〈不完全なる数字〉だ。

クレイオン共和国で聖女による魔法事件を引き起こし、黒竜島を魔法の実験台にし、楽園の港ルートラで教会の権威を貶めるよう暗躍した、はた迷惑な連中だ。

その長である〝あの方〟の情報を求めて、十三番――過去に〝あの方〟と呼ばれていたゼロの実兄――を締め上げるつもりだった俺達は、しかしようやくたどり着いた〈弓月の森〉で盛大なハズレを引く事なる。

つまるところ、〝わざわざ出向いたのに留守だった〟って状況だ。弟子を連れて〈弓月の森〉

の穴ぐらに戻ったはずの十三番の姿はそこになく、状況はさらに悪い方へと転がった。
「十三番」
と、ゼロがその名を口にした瞬間だった。
〝強制召喚〟――すなわち十三番お得意の魔術が発動し、俺達はせっかくたどり着いた〈弓月の森〉から、不本意な形でどこか別の場所に引っ張り出された。
そして現在。
俺の主観で言わせてもらえば、こっからが一番最悪だ。
「なんで……なんでなんでなんで――！」
一体誰が、どういう意図で――なんの嫌がらせで！
「なんでここにエブルボアが出るんだよあぁあぁ!?」
強制召喚の影響でクラクラする頭を振りつつ、どうにか顔を上げたその瞬間、
その1、俺より巨大で。
その2、手のつけられない激怒状態で。
その3、しかも俺の存在に気づいている。
という三拍子揃ったエブルボアが突っ込んでくる事に気づき、俺は死を意識した。

咄嗟に、どこかにいるはずのゼロの姿を探す。その姿が見つからないと、続いてリーリと、ついでに神父の姿を探した。

これを幸いと言っていいのかは微妙だが、目の届く範囲には誰もいない。

そして誰も守る必要がない状況なら、興奮状態のエブルボアを前にして、俺が優先すべきはただひとつ。

無傷で逃げ切る。それだけだ。

とは言え、すでに眼前に迫っているエブルボアの突進を避けるのは不可能だと判断した俺は、〝あえて盛大にぶっ飛ばされる〟事にした。

頭をかばう形で腕を組んで体を丸め、衝突の瞬間に地面を蹴って後方に飛び、突進による衝撃を緩和する。それでも正面からエブルボアの突撃を食らえば全身の骨が軋むが、その程度で死ぬほど獣堕ちはやわじゃない。

吹っ飛ばされた俺は盛大に地面を転がり、すぐさま立ち上がって体勢を立て直した。

エブルボアの方は勢い余って巨木に突っ込み、頭をぶつけてふらついている。

これ幸いと、この場を離脱しようとしたそのときだ。

「傭兵！」

俺を呼ぶ声が聞こえた。

視線を向けると、かなり遠くの木の陰に、見慣れた黒の外套が見えた。

「魔女!?　お前そこで何やって――!」
「神父とネズミの意識が戻らん！　我輩が二人の魂を呼び戻す間、その突進生肉を引きつけておけ！」
「引きつけておけって……お前そんな簡単に……ッ」
できるかよ、と文句を言いたいところだったが、確かにゼロは神父とリーリを抱えていて身動きがとれない様子だった。
強制召喚ってのは存外危険な魔術で、魔法の素養を持たない奴が召喚されると、そのまま死ぬ可能性が高いらしい。
実際、俺が初めて強制召喚されたときも、ゼロの介助がなけりゃ死んでたところだ。
その経験があるからか、俺は多少ふらついた程度で、問題なく動けてる。
しかし、だからと言って、だ。
「これを俺一人でどうにかするのかよ……！」
致し方ないとはいえ、悪態や舌打ちの一つも出るってもんだ。
だが、エブルボアの目標がゼロに向いたらおしまいだ。逃げられないなら、殺るしかない。
覚悟を決めて、俺は隠れていた木の陰から飛び出し、正面からその巨体と向き合った。
「おらかかってこい巨大生肉！　解体して一番美味いところだけ切り取ってやる！」
エブルボアの血走った目が俺を捉えた。

鼻息荒く、木々をなぎ倒しながら突っ込んできたエブルボアの鼻先に、俺は鞄から引っ張り出した爆薬を投げつけた。威力はほとんど期待できない目くらまし用のものだが、音と光は野生動物に対して有効だ。驚いたエブルボアは悲鳴をあげて大きく仰け反り、柔らかい腹――つまりは弱点をさらけ出す。

俺は一気に踏み込んでエブルボアの腹の下に潜り込み、剣を根元まで突き刺した。そのまま渾身の力を込めて剣を振り抜き、腹を縦にかっ捌くと、大量の血と内蔵がエブルボアの腹からこぼれ落ちてくる。

数歩よろけたその巨体は、若木をなぎ倒しながらどうと倒れ、数度痙攣してから完全に動かなくなった。

完全に死んだのを確認し、俺はようやく肩の力を抜く。

「まあ、竜とやり合った事を思えば、でかい猪くらいどうって事ねぇやな」

「見事だ、傭兵。よもや一人で、しかもやすやすとこの巨大猪を屠るとは……我輩、改めて君に惚れ直したぞ」

パチパチと手を叩きながら、ゼロがいかにも感心した様子で俺に歩み寄ってくる。

「お褒めにあずかり光栄なこったな。――あいつらはもう大丈夫なのか？」

「うむ、先ほど意識を取り戻した。さすがは獣堕ちといったところか、ネズミのはすでにケロリとしている。神父は目を覚ました瞬間、胃の中身をぶちまけていたがな」

「それを聞いて俺も気分がよくなった」
「私はいまだに最悪の気分ですがね」
嗤った俺の背後に、悪意と殺意の滲む気配がひたと貼りつく。
肩ごしに気配の方に視線を投げると、顔色は悪いながらもしゃんとして立つ神父と、それを心配そうに見上げているリーリの姿があった。
「なんだよ、普通に元気じゃねえか」
「神父は苦痛に対して耐性があるのだ。普通の人間ならば立ち上がれまい。――しかし、召喚された先が森の只中とはな」
「っつーか、十三番はどこにいるんだよ。あいつが俺達を召喚したんだろ？」
「状況からするとそう考えるのが妥当なのだが……妙だな。どこにも十三番の気配がない」
「気配がないって……強制召喚ってのは、人を〝呼び出す〟んじゃなくて〝好きな場所に移動させる〟魔術だったのか……？」
「いや、我輩が知る限りでは〝呼び出す〟魔術だ。術者のもとに呼び寄せる事しかできない」
だとしたら、術者である十三番がこの場にいないはずないんだが……。
「と言うか、私達は先程まで〈弓月の森〉の洞窟にいたはずでは……？　先程から強制召喚がどうのと言っていますが、これも魔術の類なのですか？　そもそも、ここは一体……？」
神父からしてみれば、わけの分からない事だらけだろう。が、それを一から順に丁寧に説明

してやれるほど、俺達も状況を理解しているわけじゃない。

「山、おっきいねえ」

と、リーリがあんぐりと口を開けて首を反らし、感嘆の息とともに呟いた。

山？　と聞き返してぐるりと首を巡らせば、なるほど確かに、壁のようにそびえる巨大な山脈が俺達の視界を塞いでいる。

巨大猪のエブルボアに、旅人の進路を阻む山脈か――。

「覚えのある風景だな、傭兵よ」

と、ゼロがどこか懐かしげに呟いた。

「まあ……こりゃ間違えようもねえよなあ」

俺も同じく、懐かしい気持ちで答える。

俺とゼロはこの風景を見た事があった。

もっと言うなら、この国で出会い、護衛として契約した。

頭の中に、随分昔に読んだ地図の端書が浮かんでくる。

――ウェニアス王国地図　改訂版

商人はフォーミカムの大市へ。世界各国の珍しい品が揃います。

王都プラスタでは、毎週女神の祭日に芸人が広場で芸を披露！

名物：エブルボア（王国固有種の超大型猪）の丸焼き。肉汁たっぷりの柔らかい肉質です。
注意！　森に野生のエブルボアが生息。狩猟禁止。遠回りでも必ず街道を移動する事。

やれやれと、俺は空を見上げた。
「ウェニアス王国――どうやら、振り出しに戻されたらしい」

2

「つまり、こういう事ですか？」
分かる範囲で状況を説明すると、理解できているのかいないのか、神父は眉間に深く皺をきざんで聞き返した。
「我々は大陸南東の〈弓月の森〉から、大陸中心にあるウェニアス王国まで一瞬で移動してきた。それも、十三番なる魔術師の力によって。――にも関わらずその十三番の姿はなく、その目的も分からない、と」
「ざっくりと言うとそうなるな」
「ざっくりとしすぎでしょう……！　どうするんですかこれから！」
知らねえよ、と切り捨てたい気持ちもあったが、〝どうにか〟はする必要がある。

「とりあえず、十三番を追うのが正解だよな？」

そもそもの目的は、十三番を締め上げて〈不完全なる数字〉との繋がりの有無を確認し、情報を吐かせる事だ。

意見を求めてゼロを見ると、ゼロは「うーむ」と難しげに唸った。

「十三番の気配を探ってみたが、どうもかなり慎重に身を隠しているようだ。ウェニアスにいる事は間違いないようだが、この我輩でさえはっきりとした居場所が特定できない」

「わざわざ魔術まで使って呼び出しといて雲隠れだぁ？　心底わけ分かんねぇなあの男」

「十三番の事だ、何か考えがあっての事だろう。しかし見つけられないのでは、その考えを聞く事もできん。どうにかして探し出さねばならないが――」

「とすると……だ」

結論は見えている。

俺が呟くと、ゼロが察して「他にあるまい」と同意した。

リーリが不思議そうに俺とゼロを見比べて、「なに？　なに？　何か決まったの？」と必死に話についてこようとしている。

「坊主のところに戻るのが得策だろうな。あいつなら、十三番にも連絡をつけられるはずだ」

「坊主……というと……？」

怪訝そうに神父が問う。

その嫌そうな表情を見る限り、すでにある程度の予想はついているらしいが、せっかくなので俺が直々にとどめを刺してやるとしよう。

「ウェニアス王国主席魔法使い――詠月の魔女アルバス様のところだよ」

「……それは、暗に私に暗殺しろと言ってるんですか？」

「なわけねぇだろうが！　あのガキが死んだら大変な事になるんだぞ！」

「でかい口で吠えないでください、冗談です。いくら私でも、教会からの命令もなく動いたりはしませんよ」

お前が言うと冗談にならねぇんだよ、殺人神父。

さらに言うなら、冗談で済まねぇくらい深刻な話なんだぞ。

ウェニアス王国には魔法を封じる結界が張ってあり、アルバスが許可を出した者だけが魔法を使えるようになっている。

だからこそ国に所属する魔法使いは、その数も名前も素性もきちんと確認できるし、もし誰かが魔法を使って悪事を働けば、そいつから魔法を取り上げる事もできるわけだ。

アルバスはその結界を維持するために常に魔力を割いている状態で、アルバスこそが結界の要と言えるだろう。

そのアルバスが死ねば、ウェニアス王国は再び魔法に対する抑止力を失う事になる。

その結果どうなるかは言わずもがなだ。

「しかし、よりによってそんな諸悪の根源のような者のところに行くはめになるとは……神は私に試練をお与えになるのがお好きなようだ」

心底不愉快そうに肩を落とす神父を指差して、ゼロが嬉しそうに俺を見た。

「見ろ、傭兵。この魔女のところに赴くのを嫌がる感じ――まるで会ったばかりの君のようではないか」

「一緒にするんじゃねえよ！」

「一緒にしないでいただきたい！」

「わー、息ピッタリ」

リーリが感心したように言うと、神父が杖の先で小気味よくリーリを叩いた。――俺を殴る時は全力だが、リーリに対しては手加減が見える辺り、神父のなかでは一応リーリも「女子供」の扱いに入っているらしい。

っつっても、手を出してる時点で「人間扱い」ではないんだろうが……。

「まあ、せいぜい教会の敵の情報を探らせてもらうとしますよ。人間との共存を掲げているのですから、無論、手厚く歓迎していただけるのでしょうからね」

「坊主は差別とか迫害とかを憎んでるからな。お前が下手な事しなきゃ、投獄される事もねえだろうよ」

たぶんな――とは心の中だけでつけ足しておく。

俺は荷物から【魔女の手紙】を引っ張り出し、形ばかりの報告を書き込んだ。

現在ウェニアス王国。城へ向かう。

「君の手紙は相変わらずそっけないな……」

「最近は坊主からの返事も似たような感じだぞ」

最初の頃、アルバスから届く手紙は鬱陶しいくらいの長文だったが、ここ最近は報告への返信すらほとんどない。

「君がそっけないから、いじけたのではないか？」

「そんな、ガキじゃねえんだから……」

「しかし大人でもない」

そう言われると、確かにそうだ。俺だって「坊主」と呼んでガキ扱いをしている。

だが、ガキと言ってもアルバスはウェニアス王国の主席魔法使いだ。俺の手紙の内容くらいで、どうこう言うような事もないだろう。

そう自分を納得させ、俺はくるくると手紙を丸めて荷物の奥に突っ込んだ。

「山、登るの？」

リーリが不安そうに首を傾げる。

「いや、エブルボアがいたって事は、ここはもうウェニアス国内だ。山を登ったら国から出ちまうし、そもそもウェニアス王国に入国するのに山越えなんぞするのは、入国許可が下りなかったお尋ね者くらいのもんだろう」

お尋ね者でさえ、山脈を迂回して別の道を選ぶだろう。

ウェニアスを囲む山は、登山向きとは言い難い。切り立っているし、石だらけだし、標高もかなりある。入念な準備をして山越えに挑んでも、死ぬ可能性の方が高いくらいだ。

だからこそウェニアス王国は中立国家でいられるし、魔女を公認した〝魔法国家〟になっても教会騎士団に攻め落とされずにいられる。

もしウェニアス王国が坑道を塞いじまったら、軍隊を山越えさせるなんぞ不可能だからだ。

山を越えた頃には、兵の半分が死んでるだろう。

だが、ウェニアス近辺の地理に疎いリーリには理解できないようで、「でも」とか「けど」とか「分かんない」とか言っている。

地図を見せて説明してやってもいいんだが、あいにく今は地図もない。

神父が未だに具合の悪そうな顔色で、軽く空気の匂いを嗅いだ。

「ここがどこであれ、長居するのは得策ではないでしょう。血の臭いを嗅ぎつけて、獣が集まってくる。日のあるうちに街道を見つけたいところですが、どちらに進むのが正解なのか……」

「そうさなぁ……まあ、山沿いに歩けば最悪でも数日で街道にたどり着けるだろうが」

「数日ですか……食料はこれの肉をいくらか持っていけますが、手持ちの水が心もとない。どこかで川を見つけなければ」
「我輩が占いで大体の道を決めよう。方向を決めるくらいならばわけもない」
と、リーリがくいくいと俺のズボンを引っ張った。
「なんだ？　どうかしたか？」
今忙しいんだが、という気持ちを込めてその小さな体を見下ろすと、リーリの小さな指が東の方を指さした。
「一番近いの、こっちだって」
「……はん？」
「あの、大きな道。で、人がいっぱいいるとこ……すぐ近くだって、みんなが言ってる」
「みんなって……」
俺はリーリからさらに視線を下にずらして、地面を見る。
そこには数匹のネズミが集まっており、そいつらは俺の視線に怯えて飛び上がると、チョロチョロと走り去っていった。
そうか、こいつはネズミの言葉が分かるんだったな。
そしてネズミは世界中どこにでもいる。
道を聞く相手には困らないっつーわけだ。

「……まさか、ネズミの言う事を信じるわけじゃありませんよね……？」
神父が心底嫌そうな顔をして、眼帯越しにリーリを睨む。
するとリーリはむっと頬を膨らませ、だが何も言い返せずに俺の足にしがみついた。
そんなリーリの頭を、ゼロの手がぽんと叩く。
「我輩は信じるぞ。むしろ疑いの余地もない」
「俺も乗った。おいチビ、案内しろ」
「リーリ、チビじゃない」
「チビじゃねえか」
「なんで！　お兄ちゃん、前はちゃんと名前で呼んでたのに……！」
「面倒になったし、チビの方が呼びやすい」
「ううー……！」
俺の答えに、リーリは細い尻尾でばしばしと地面を叩き、全身で不満を表明した。
そんな俺達のやりとりに、神父が「冗談でしょう」空を仰いだが、ついてくるのが嫌なら好きにすりゃいい。
俺とゼロとリーリが問答無用で歩き出すと、渋々といった風に神父も後からついてくる。
「どうせついてくるなら、最初から文句言うんじゃねえよ」
とささやかに嫌味を言うと、杖での殴打といういつもどおりの返事が返ってきて、その場は

ひとしきり和やかな笑いに包まれる事となった。

――果たして。

リーリの案内に従って歩いてみると、日が暮れる前に街道の始まり――すなわち、山脈をぶち抜いてウェニアス国内外を繋ぐ坑道へとたどり着いた。

〝坑道〟と呼んではいるが、その道幅は馬車が五～六台並んでも余裕があり、天井も見上げるほどの高さがある。

坑道の内部には露店や宿屋が連なっている事を考えると、道と言うより一つの町に近い。そしてそれらの店は坑道の外にも溢れ出し、今も様々な露店が精力的に客を呼び込んでいた。

門番はいるが門はなく、すでに日が暮れているというのに、今も人や馬車がひっきりなしに出入りしている。

「着いたようだな」

とゼロが呟き、

「そのようだな」

と俺が頷き、

「道、おっきいねぇ」

とリーリがあんぐりと口を開けて、感嘆の息を吐く。こいつは何を見てもこう言うな……。
ちなみに神父からは舌打ちという形で敗北表明があった。
だがその直後に、
「……妙ですね」
と眉をひそめる。
「何がよ」
「私の耳が確かなら、あそこに人が集まっている場所があるでしょう」
神父は、山脈にぽっかりと口を開けている坑道を指差した。
坑道のすぐ脇には横に長い小屋があり、そこに旅人が列をなしている。
何かと思ってよくよく観察してみると、小屋の壁には横長の窓口があり、揃いの帽子を被った役人らしき連中が横並びに座っているのが見えた。
「会話を聞く限り、あれは入国審査の窓口です。そして、審査を通った旅人が坑道に入っていく。——つまりここは、ウェニアス王国を囲む山脈の外側という事になる」
「馬鹿言うな。エブルボアは山脈の外にはいねぇはずだぞ」
「いや——どうやらそうとも限らないようだぞ、傭兵。見ろ、看板だ」
街道に突き立てられている看板に、注意を引くような赤い文字で注意事項が書いてある。

注意！
街道を外れると、警戒用のエブルボアに襲われます。
出入国の際は、国家魔法使いによる無料の護衛をご利用ください。

「……なんだありゃ。あんなのあったか？」
「少なくとも、我輩達が旅立ったときにはなかったな」
国家魔法使いよる護衛とあるが、その看板の近くで待機している揃いのローブ姿がその魔法使いだろう。十人程度の旅人につき、魔法使いを一人、護衛として派遣しているらしい。
「警戒用のエブルボア――って事は……つまり、なんだ？　他国からの侵略対策で、国内のエブルボアをとっ捕まえて、わざわざ国外の森に放してるって事か？」
でしょうね、と答えたのは神父だ。
「魔女の公認などしたら、近隣国家の教会信者が黙っていない。ルートラの大聖堂でちらと聞いた話によると、少し前に坑道の爆破騒ぎもあったようです」
「そりゃ穏やかじゃねえなぁ」
ルートラ大聖堂は、楽園の海を抱く海運国家テルゼムにある大聖堂だ。
大陸の主要な都市に建造されている七大聖堂のうちの一つで、それらの大聖堂には、世界中に散らばる信者や聖職者からの報告で常に最新の情報が入ってくるという。

と言っても、ウェニアス王国からルートラ大聖堂までは、どんなに急いでも二月はかかる。まずウェニアス王国からクレイオン共和国に入国し、クレイオン共和国の港町イデアベルナから海路でテルゼムへ入るのが最短の行程だが、大体の連中が「旅のついでに大聖堂に立ち寄って情報を置いていく」だけなので、遠方への情報の到着はもう少し遅くなる。

とすると、俺達がイデアベルナで船に乗った直後くらいに、坑道の爆破騒ぎが起こったんだろう。俺達がクレイオン共和国をうろついている間にそんな事件が起これば、すぐに耳に入ったはずだ。

「で、ウェニアス王国の方は警戒を強めて、エブルボアを国外の森に放したのか。確かにあんなのが森をうろついてちゃ隠密行動もしづらいだろうし、ちょとちゃそっとの軍隊じゃまともに野営もできねぇだろうが……ちと物騒すぎやしねぇか」

「で、あるからこその護衛なのだろう。魔法使いが護衛につけば、巨大猪ごとき美味そうな肉の塊でしかない。――しかし、これではっきりしたな。ここはウェニアス王国の外側だ」

「リーリ、知ってた。山の向こうに行かないとダメだって。けどお兄ちゃん、信じなかった」

「あーはいはい悪かった、悪かったよ」

投げやりに謝罪すると、リーリは不満そうに唸り、手近な石やら小枝やらを拾って投げつけてくる。

そんなリーリの頭を、ゼロがわしわしと撫で回した。

「お手柄だぞネズミの。君のおかげで、今夜は美味いものをたらふく食って、暖かな湯で体を清め、柔らかなベッドで眠る事ができる」

「えへへ……」

リーリは嬉しそうに目を細め、俺に石を投げつけるのをやめにする。

微笑ましい光景だが、しかしゼロの手つきの無遠慮さに、リーリが徐々に居心地悪そうにもがきだした。

だが、ゼロはリーリの体を捕らえたまま離さない。

「あの……ちょっと、くすぐった……や、やだやだ……あぅう……」

「ふふふ、この繊細で滑らかな肌触り……柔らかく、ふかふかとしている。我輩が何を期待しているか分かるか？　君のこの体をよい香りのする石鹸で洗い、よく乾かしたら君は最高の抱き枕になる。傭兵を我輩のベッドにし、君を我輩の抱き枕にする……それでこそ、我輩の最高の寝所が完成――」

「やめろ変態魔女！　嫌がってんだろうが！」

「あぐっ！」

嫌がるリーリの体を抱き寄せ、もぞもぞといやらしい手つきでまさぐるゼロの頭を拳で殴る。

頭を押さえてうずくまったゼロからリーリを取り上げ、その恐るべき魔手から守るために肩に担ぎ上げた。

「没収だ、没収。こいつはしばらく俺が担いで歩く」
「ああ！　わ、我輩の抱き枕が！　我輩の特等席に……！」
「こいつはお前の抱き枕じゃねえし、俺の肩もお前の特等席じゃねえよ！」
「ひどいぞ、傭兵！　我輩よりも、若い娘の方がいいのか？　我輩の滑らかな肌に飽き、ネズミのふかふかな毛並みを求めると言うのか……！」
「そういう話してるんじゃねえだろうが！　いちいち人聞きが悪いんだよお前はよぉ！」
「お、お兄ちゃん……そうだったの……？」
「違う！　なんで〝信じてたのに、ひどい〟みたいな顔で俺を見るんだお前は！　俺はお前をかばってだなぁ……！」
「馬鹿馬鹿しいやり取りでお忙しいところ、申しわけありませんが――」
わざとらしく咳払いをした神父の声に、俺達は全員動きを止める。
振り向くと、心底呆れ果てた様子の神父が気だるげに立っていた。その背後に、見るからに力自慢の下働きといった風体の男が一人。
「宿が決まりましたよ。獣堕ち二匹と、魔女と、神父――問題なく泊めていただけるそうです。あなた達の姿を見て、多少難色を示し始めてはいますがね」

3

「最近は獣堕ちの客も多くてな。ほら、ウェニアスだと魔女が優遇されるだろ？　で、力のある魔女は獣堕ちを人間に戻せるってんで、全国から集まってきてて……」

神父が見つけてきた宿――と言うか、客引きが神父に声をかけたらしいが――は、坑道の入口から少し入った場所にあった。

下男は言葉通り獣堕ちに慣れているらしく、俺達を案内する道中も気さくに話しかけてきて、リーリの事などは「こんなかわいい獣堕ちってのもいるんだなぁ」と感心するほどだった。

俺達がウェニアス王国を旅立ってほぼ一年――以前も「魔女を殺す戦力」として獣堕ちは受け入れられていたが、今はそれよりもっと気さくな空気を感じる。

「お客さんも、そういう目的で？　それとも、魔女の下僕志願かい？」

「……魔女の下僕？」

鼻の頭に皺を寄せて聞き返し、俺はちらとゼロを見る。

しかしゼロは大量に抱えた鹿の串焼きを食べるのに忙しく、下男の話など聞いてもいない。

「獣堕ちってのは、魔女にとって役に立つんだろ？　前は獣堕ちの首を集めてたが、血や爪なんかでも代用が利くってんで、今は生きた獣堕ちが欲しがられてる」

「はあーん。なるほど……」
「まあ、人間になれるっつっても、順番待ちも長いからな。今更人間になったって、生き方が分からねぇってのも多いだろう。人間に戻るより、獣堕ちのまま雇ってもらいたいって奴も多い。――俺みたいに仕事を見つけられる奴だって少ないだろうしな」
ぎょっとして、俺は下男を凝視した。
にっと歯を見せて笑い、下男は「すっかり人間だろう？」と俺を見上げる。
「こう見えて、最近までは熊だったんだ。体も今よりずっとでかかったし、力もあった」
「信じられねぇな……どんな気分なんだ？　人間に戻るってのは」
「〝戻る〟って言うより、〝なる〟って感じだなぁ。まだ人間の体に慣れなくて、鏡を見るとぎょっとする。〝うわ、誰だこいつ〟ってな。昔の調子で重い荷物を持ち上げようとして、ぴくりとも動かなくて落ち込んだりな。――こう言うとみんな変な顔するけどよ、今じゃ熊だった頃が懐かしい」
「……獣堕ちに戻りてぇのか？」
「どうかねえ。分からねえな……熊だった頃は、普通の人間になれりゃいい事ずくめだと思ってたが、そういうわけでもねぇなとは思う。だが、熊だった頃は食人衝動も強く出てたし……お客さんも聞いた事あるだろ？〝人間に憧れる獣堕ちほど、早く獣に堕ちる〟って」
「聞いたこたぁあるが、眉唾だろ？」

男は肩を竦めて「どうだろうな」と曖昧に笑った。

「とにかく、獣堕ちのままでいたら俺は完全に狂ってただろうよ。聞いた話だと、狂った獣堕ちを人間に戻してもダメなんだそうだ。体が戻っても魂が獣のままで、逆に長く生きられないんだと。――それに、人間に戻っていい事もあった」

ほら、と笑って、下男は進行方向に顎をしゃくってみせる。

太陽の光が届かない坑道を照らしているのは、軒を連ねる店が掲げる色とりどりのランタンだ。店一軒につき、必ず一つランタンを掲げるべしという決まりがあるらしい。

そのなかの、赤いランタンを掲げた小さな宿屋の入口で、女がこちらに手を振っていた。

「女房だ。――お客さんも獣堕ちなら分かると思うが、これがどんだけ嬉しいか」

「のろけるつもりならクビリ殺すぞ」

静かに本心からの思いを口にすると、下男は背中を反らして豪快に笑った。――俺の脅しに動じないあたり、なるほど獣堕ち〝らしさ〟を感じる。

「――いいではないか、のろけくらい」

と、鹿の肉を食べ終えたゼロが、横からふと口を挟んだ。

「君には女房はいないかもしれないが、他ならぬ我輩がいる。そうだろう、傭兵？」

「……どうだろうな、チビ？」

ゼロの問いに答えずに、肩に担いだリーリに流す。

「え!?　リーリ!?」
急に俺に話を振られて、リーリは俺の肩で飛び上がってうろたえた。
「あの、え、あの……えと……！　わ、分かんない……」
すると、神父が杖の先で軽くリーリの頭を小突く。
「そこは真面目に答えなくていいんですよ。知るか馬鹿とでも言っておけば十分です」
「誰が馬鹿だ！」
「そろそろ馬鹿の自覚が芽生える頃だと思ったんですが……思った以上に学習能力がない」
「仲がいいのは構わねえんだが……そろそろ部屋に案内しても？」
宿にはとっくに到着してるんだがなと言わんばかりに、下男が呆れたような声で言う。
すると神父が今までの流れをしれっと無視して、
「私は一人部屋です」
とさっさと宿に入っていった。
「我輩は傭兵と同室だ」
「え！　あの、じゃ、リーリは……えと……物置きとか……」
「馬鹿、お前も俺らと同室でいいんだよ」
俺の言葉に、リーリは耳と尻尾をピンと立ててオロオロと視線をさまよわせた。
「けど、リーリ、あの……危ないし……お兄ちゃんは大丈夫だけど、お姉ちゃんは……」

どうやら疫病の心配をしているらしい。
ネズミのリーリは疫病を媒介する。昔、そのせいで村の子供達や自分の両親を殺しちまった事を、今でもずっと気にしている。
リーリがついてくるようになってからは野宿や厩での寝泊りばかりで、まともな宿に泊まった事は一度もないが——狭い部屋で長時間一緒にいる事が心配なんだろう。
俺の肩の上で不安そうに表情を曇らせるリーリに、ゼロは穏やかに笑いかけた。
「心配するな。君のそれは、明確な悪意を持って噛みつかない限り影響はない。少しの唾液で問題が起こるのならば、君が何年も義理の両親と——あの無力な人間達とともに暮らせたわけがない。君がどれほど気をつけていたとしてもだ」
「……そう……なの……？」
「何より、我輩は稀代の魔女だ。君の力で殺されるほどやわではない。こう見えて、我輩は傭兵より強いのだ」
明らかに、リーリが安堵するのが分かった。
半ば無理やりついてきたリーリだが、だからこそ俺達を傷つけないように気を張っていたんだろう。
っつーわけで、俺達は三人で同室という形に落ち着いた。

宿屋は洞窟をくり抜いたアリの巣形式で、入口の印象より随分広い。
剝き出しの土壁を、赤や青のランタンが照らしているせいで、全体的にどこか奇妙な色合いだった。
リーリはチョロチョロと部屋を駆け回ってあれこれと物色し、いくつかのクッションを抱えて部屋の隅に走っていく。
「……何してんだ、お前」
「ベッド作ってる」
「そこにあるだろうが」
幸いな事に、部屋にはベッドが二つあった。どうせゼロは無理やりにでも俺のベッドに入ってくるわけだから、残ったベッドは必然的にリーリに割り当てられる。
そう説明するとリーリはキラキラと目を輝かせてベッドに登ろうとし――やめた。
「……リーリ、汚い」
「あん？」
「ん」
リーリが両手を突き出してみせると、確かにその手は汚れている。
さっきゼロが「石鹸で洗いたい」とか言っていたが、白い毛並みも土やホコリを吸っていくらか黒ずんでいるようだった。

ふと視線を感じて横を見ると、ゼロがじっとりとした目で俺を見ている。
「……なんだ、そのいつになくアレな目は」
「いやなに、ネズミの程度で〝汚い〟と言うのなら、今の君はさながら汚物の塊だと思ってな」
「ちったぁ表現を選んでいただけませんかねぇ!? 汚物っておま……本当に傷つくぞ俺は！」
「しかし、その乾いた血泥にまみれた有様は、なんと言うか、そう……〝黒の死――〟」
「だあぁぁもぉお！ いい加減にやめろよ、そのあだ名いじるの！ 由来は結構悲惨な話なんだぞ!?」
俺が爪を出して怒りに吠えると、ゼロは「怒るな怒るな」と悪びれる様子もなく笑う。
だが確かに、エブルボアの血を頭から被ってからこっち、軽く拭っただけで一度も水で洗っていない。乾いた血は黒ずんで固まっているし、それに張りついた虫やら葉っぱやらでかなり悲惨な状態だろう。
「……風呂か」
「うむ。さしもの我輩も、今の君に抱かれて眠るのは少しばかり抵抗がある」
そのとき、部屋をノックする音が響いた。
戸を開けると、俺達を案内した下男が顔を出す。
「湯の用意ができたぜ、旦那。それと、風呂桶も――必要だろ？」
さすが元獣堕ちだ。素晴らしく気が利いている。

俺が巨大な木桶を受け取ろうとすると、下男は顔を顰めてさっとそれを引っ込めた。
「これはご婦人方用。あんたは洗い場で水洗いだ」
「なんで俺だけ」
「……逆に聞くが、あんたあの二人と一緒に体洗う気なのか？」
冷静に指摘されて、俺は静かに部屋を出た。
危ないところだった。平気でゼロとリーリの前で脱ぐところだった。
どうも、最近ゼロの価値観に毒されつつある。
「そもそもその汚れ、血だろ？　まず水で落とさねぇと、毛並みに染みつくぞ」
「まったくおっしゃる通りで……今更だが、よく俺達に部屋を貸す気になったな。普通、返り血で汚れてる獣堕ちを見た時点で回れ右だろ」
「そこが生存戦略ってやつよ。他の宿が嫌がる客なら、多少割高でも泊まってくれるだろ？　言ってみりゃ、この宿は獣堕ち御用達なのさ」
「お前も元は獣堕ちだしな」
その通り、と下男は笑う。
「店の連中は知ってるのか？　お前が元は獣堕ちだって」
「ああ、話してある。おかげで俺の賃金は、他の連中よりいくらか安い」
「元獣堕ちなら、安い金でも喜んで働くだろうって？　ご立派な生存戦略だこったな」

「ひねくれた事言うなよ。雇ってもらえるだけありがたいんだ。文句は言えねぇさ――実際、獣堕ちの常識が染みついてて、ずれた失敗しちまうからな」

「例えば？」

「裸で客の前に出るとか、初対面の女の臭いをかぐとか」

俺は吹き出した。

だが、よくよく考えれば笑えない。俺も普通にやらかしそうだ。

「それでも、まあどうにかやってる。牙と爪と毛皮がないってだけで丸裸になった気分だが、これが普通なんだと思えるようになってきた」

「……なあ。人間に戻るってのは……どうやるんだ？　魔女が呪文を唱えるのを、ただ聞いてりゃそれでいいのか？」

「その質問、俺が元獣堕ちだって知るとみんなしてくるな」

楽しそうに笑って、男は心臓の辺りを指さした。

「一度死ぬのさ。――獣堕ちとしての自分を殺すんだ。そうすっと、人間としての自分が生まれてくる」

「もったいぶった言い方するじゃねえか」

「かなり〝そのまま〟話してるつもりだぜ。実際、俺が獣堕ちだったときの最後の言葉は〝騙したな魔女ども〟だ――本気で殺されると思った」

ゼロが当然のように「戻せる」とか言ってたから簡単なもんだと思ってたんだが……想像していたより危険なものらしい。

だが、それでもこいつは、確かに人間として今、ここにいる。

俺の夢は、いつか人間になって、田舎で酒場を開く事だ。

かわいい女房がいて、うるさいガキがいて、毎日にぎやかに、平凡に、穏やかに暮らせれば最高だと思っている。

この男はまさに俺の理想像だ。

そのはずなのに、俺が今この男に対して抱いている感情は、妬みや憧れとは少し違う。

これは疑問だ。

本当に後悔していないのか。獣の姿に戻りたいと思った事はないのか。

獣の強さを捨てるだけの価値が、人間としての生活に存在するのか。

――他ならぬ我輩がいる。

ゼロの挑むような、からかうような笑顔がちらついた。

――そうだろう、傭兵？

「何ぼっとしてんだ？　ほら、石鹸。洗ったら、その辺にある布で適当に拭いてくれ。どうせ近々捨てる予定の布だから遠慮はいらねぇよ」

それだけ言い残して、下男は洗い場から立ち去ろうとする。

その後ろ姿を、俺ははっとして呼び止めた。

「おい、これ」

布でくるんで腰に提げてあった肉の塊を、下男に投げ渡す。森で殺したエブルボアから切り取ってきた、一番美味い部分の肉だ。

「晩飯にはそいつを使ってくれ。余った分は、お前と女房で食っていいぞ」

「いいのか？　ありがてぇ！　女房が厨房担当なんだ。夜は楽しみにしててくれ」

嬉しそうに破顔した下男を見送って、俺はやれやれと肩を落とした。

洗い場を見わたすと、元は宿泊客の馬を洗うための場所らしく、馬用の手入れ用品が棚に積み重なっている。部屋の隅の巨大な木桶には、料理や掃除で余ったと思しき雑用水が貯めてある。他に水が見当たらないところを見ると、これで洗えって事らしい。

「まあ、これで十分だよな……」

服を脱いで冷水を頭から被ると、固まりかけた血が溶け出して床に広がり、まるで俺が出血しているようだった。

「――毛と泡の怪物だな。傭兵」

冷水で全身の血を洗い流していると、やけに懐かしい台詞とともにふらりとゼロが現れた。

さっきまで部屋で湯を浴びていたんだろう、その髪はしっとりと濡れていて、俺が使っているのとは違う、質のいい石鹸の香りが漂ってくる。

「初めて君と眠った宿屋を思い出す。――あの時のように、背中を手伝ってやろうか？」

「やめとけ。あの時と違って冷水だ」

「なぁに、我輩がその気になれば、その冷水を熱湯に変える事など造作もない」

「火傷するだろうが！　それより、チビを洗ってやるんじゃなかったのか？」

「洗ったとも。それはもう丹念に。おかげで我輩の理想の手触りに仕上がった。もう少し撫で回していたかったが、モグラのようにベッドに潜り込んでしまってな」

「そりゃご愁傷様だこったな……」

「そうなのだ。せっかくあの素晴らしい手触りを堪能しようと思ったのに……」

「お前がじゃねえよ、チビがだよ」

俺が冷たく言い放つと、ゼロは不満げに唇を尖らせた。

またネズミのの肩を持つのか、やはり若い娘がいいのか、とかなんとか文句を言うが、それがただの戯言である事くらいはそろそろ分かるようになってきた。

――一年、か。

長い付き合い、と言うにはまだ短い。

だが、出会ったばかりとも言いがたい。

「……で？　何か用か？　それとも、例のごとく俺の風呂を覗きにきたわけか？」

言いながら、俺は再度冷水を被って全身から泡を洗い流した。流れる水には、もう血の濁りは混ざっていない。

「随分な言い方ではないか。我輩がいないと、毛並みを乾かすのが大変だろう？　いじらしくも湯浴みの手伝いにきてやった絶世の美女を、君はもっと歓迎すべきだと思うがな」

そう言って、ゼロはパキンと軽やかに指を鳴らした。

すると水浸しだった俺の毛並みが、一瞬で完璧に乾く。

「……助かる」

「どういたしまして、だ」

くすくすと、楽しげにゼロが肩を揺らした。

「せっかくだ、櫛も通してやろう」

「いらねぇよ。整えたところで、どうせすぐ汚れるし絡まるんだ。つーかお前、マジで何しにきたんだよ」

「君と愛を育みに――と言っても信じてはくれなさそうだな。あえて理由をでっち上げるとす

れば、神父が言っていた坑道の爆破騒動について少々情報を仕入れてきた」
「へぇ？　何か面白い話でも？」
「あまり面白くはないな。その爆破騒動の首謀者だが……ウェニアス王国と国境を接する小国の貴族で、熱心な教会信者だそうだ。盗賊を雇って坑道を崩落させ、憎き魔法国家への道を閉ざしてしまおうと考えたようだが、立ち並ぶ商店の一部を破壊するに留まり、実行犯は捕えられた。ウェニアス王国は当然強く抗議をしたが、当の貴族は〝言いがかりだ〟と答え、逆にウェニアス王国を卑劣な嘘つき呼ばわりする始末だという」
「なるほど……そいつは……あちゃぁ……って感じだな」
俺が顔をしかめて言うと、「まったくそんな感じなのだ」とゼロは頷く。
「ちなみにだが、我輩達をここに案内した下男――爆破の現場に居合わせ、娘をかばった結果、この宿に雇い入れられる事になったらしい。咄嗟に〝俺ならかすり傷にもならん〟と思っての行動らしいが、すでに人間になっていた男は十日ほど生死の境をさまよったそうだ」
人間の体がこんなに脆いと思わなかった――と下男は苦笑いしたという。
「一般市民に被害が出た事で、周辺国家との関係が劇的に悪化した。ウェニアス国内では教会に対する不信が高まり、近隣諸国では再び〝ウェニアス王国がきな臭い〟という噂が流れている。坑道の入口に、魔法使いによる護衛の文言があっただろう？」
「ああ、エブルボア対策のな」

「あれはエブルボア対策ではなく、〝雇われ盗賊〟対策だそうだ。ウェニアス王国へ続く街道で旅人を襲えば、懸賞金を出すという熱心な教会信者が多いらしい」

「そいつはまた……」

「あちゃあ、という感じだろう？」

ゼロが俺の口調を真似して笑う。

ウェニアス王国への入口は、山脈の東西南北に穿たれた坑道だ。

周囲はぐるりと他国に囲まれているわけだから、ウェニアスに入国しようと思ったら、必ずどこかの近隣国家を通過する必要がある。

そして現状、ウェニアス王国を目指す連中ってのは、教会信者の目から見たら胡散臭い連中ばかりだろう。

魔法使い志望の奴や、下僕志願の獣堕ち——そんな連中が自国の領土を通過するのも我慢できないって連中は、ウェニアス王国に続く坑道や街道を壊せばいい、と考え始めるわけだ。

「自国の商人がウェニアスに行けなくなったら、困るのは自分達だって分かってるだろうに。それでも我慢できねぇもんかねぇ」

「ああ、極めて度し難いな。しかし〝嫌悪〟という感情は、人間の持つ感情の中でもひどく制御が難しい。君とて、我慢できないほど嫌いなものの一つや二つはあるだろう？」

「殺人神父以外にか？」

俺の軽口に、ゼロは楽しげに吹き出した。
そのときだ。
「――なんだ？　外が騒がしいな」
ざわめきと不穏な空気を感じ取り、俺は耳を立てて宿の外に意識を向けた。
誰かを探しているような雰囲気だった。怒鳴り声がここまで聞こえてくるんだから、かなりの剣幕と勢いだろう。
「少々よくない雰囲気だな。傭兵、惜しいが服を着た方がいい」
「惜しいってなんだ、惜しいって！」
「君が望むのならば説明するが――」
俺は腕を振ってゼロの戯言を打ち切り、脱ぎ捨ててあった服を身につけた。
いくら体を洗っても、結局血まみれの服を着るんじゃあ意味がなかった気もするが、服を洗濯している暇はなさそうだ。
俺が装備を身につけている間にも、騒がしさはどんどん近づいてくる。
そして、ついに喧噪の元凶はこの宿に到着したようだった。
「我々は警戒用のエブルボアを殺した者を探している！　全身に返り血を浴びた獣堕ちがこの宿に入ったと報告を受けた！　該当する者は即刻出頭せよ！」
高らかに罪人を呼ばわる声に、俺はゼロと顔を見合わせ、直後に「あちゃあ」と頭を抱えた。

「今の声が我輩の幻聴でなければ……あれは君の事だな」
「エブルボアを殺したのが俺の幻覚じゃないなら……あれは俺の事だな」
確かに、坑道前の看板には「警戒用のエブルボア」と書いてあった。
それが殺されたとありゃ、そりゃ騒ぎにもなるわな。
「しかし、ちと気づくのが早すぎねぇか？」
「数を管理する仕組みができているのかもしれん。どうする？　逃げるか？」
「部屋に戻って、チビと神父に状況を伝えてか？　――あいにく、その時間はなさそうだぜ」
ちょっと待ってくれ、と慌てる下男の声が聞こえるが、荒々しい足音はまっすぐにこちらに近づいてくる。
入口付近に立っていたゼロがひょいと廊下の様子をうかがって、
「ほう、これは面白い」
と表情を輝かせた。
それから俺に駆け寄ってきて、「珍しいものが見られるぞ」と隣に並ぶ。
――うすうすと、感じてはいる。
この臭いに、この気配。
「――いたぞ！　獣堕ちだ！」
「確かに、服に返り血がついてるな」

「おい、抵抗はするなよ。いくらお前が獣堕ちでも、こっちは三人いるんだからな」
どやどやと洗い場に押し入ってきた巨漢三人――いや、〝三匹〟と言った方が適切か？
「すーっげぇ……全部獣堕ちだ」
「見たところ、牛に、犬に、あれはトカゲか？　爬虫類を〝獣の戦士〟と呼ぶのは少々抵抗があるな」
きらりと目を輝かせたゼロを軽く小突いてから、俺は無抵抗の意思表示として両手を頭の後ろで組んだ。ゼロも俺にならって頭の後ろで手を組んで、「これでいいのか？」と俺を見る。
すると三人は拍子抜けした表情で、「抵抗されなかった時ってどうすんだ？」とか、「縛った方がいいんだよな」とか、なんとも素人臭い事を言い合っている。
こりゃ、あれだな。獣堕ちを警備兵として導入したはいいが、まだ試験段階で教育が行き届いてないって感じだな。
そこで、ゼロがわざとらしい咳払いで三匹の注意を自分に向けさせた。
「こう考えれば分かりやすいのではないか？　我輩達は抵抗し、君達はそれを制圧した。我輩達は今、君達によって拘束されている――さあ、次はどうする？」
「そりゃ、取り調べだよ。エブルボアを殺した目的とか、賊の規模とか」
「隊長のところに連行すりゃいいんだ、つまり」
そうしよう、そうしよう――とでも言うような軽い乗りで、連行される運びになった。

本当にこいつらに警備を任せておいて大丈夫なのか不安にすらなる。
溜息を吐きつつ、俺はちらと三匹の背後――廊下の方に視線を投げた。
そこに、神父が気配を殺して立っている。その気になれば、間抜け三匹の首を一瞬で落とせる位置だ。
リーリもその足元に張りついて、いつでもネズミの大群をけしかける構えだ。
だが、俺は黙って首を左右に振る。
ここはウェニアス王国で、アルバスはお偉いさんだ。ここで下手に騒いで人死にを出すより、行くところまで行ってアルバスの介入を待つのが得策だろう。

4

神父とリーリを宿屋に置いて、俺とゼロだけが連行される流れになった。
宿屋の下男がエブルボアの肉を手に複雑そうな顔をしていたが、「言わなきゃばれねぇ、こっそり食っとけ」と身振りで伝える。
どうせこうなっちまったら、俺達は宿にゃ戻れんだろう。
獣堕ちどもの隊長とやらは、坑道の入口――国の外側だ――にいるらしい。
俺達がまったく抵抗の意思を見せなかったおかげで、縄やら鎖やら首輪やらといった屈辱

的な扱いはされずに済んだ。
　おかげでゼロも機嫌を損ねる事なく、ちょっとした散歩という雰囲気で歩いている――だけならよかったんだが、トカゲの鱗に興味を示したり、牛の角を触りたがったりと、落ち着きない事この上ない。
　何より腹が立つのは、俺達を連行する立場である三匹が、完全にゼロの美貌に当てられてデレデレになっている事だ。
「お嬢さん、本当に魔女なのか？　じゃあ俺、下僕に志願しようかな……」
「いやほんと、あの隊長にこき使われるより、美人な魔女の下僕やってた方がいいよなあ」
などと、聞いてる俺の方が情けなくなってくる。
「君達の隊長というのは、そんなにも恐ろしい男なのか？」
「恐ろしいなんてもんじゃねえよ！　獣堕ちのくせに、すげー剣術が上手いんだ。力で押し切ろうとしてもダメなんだよ」
　ゼロの問いに、牛が鼻息を荒くして答えた。
　確かに、獣堕ちってのはまともな教育を受けてないから、剣と言えばぶん回す程度の事しかできない。
　それでも並の人間相手なら力技で押し切れるが、力が同等の獣堕ちが剣術を使えるとなると、そっちの方に軍配が上がるだろう。

「しかも、主席魔法使い様直属の下僕でよ。下手に反抗すると、不穏分子としてチクられる。そうなったらおしまいだ」

全身の毛を逆立たせた垂れ耳の犬に、ゼロが「おしまいとは？」と聞き返す。

「人間に戻されるんだよ！」

「……いや、いい事じゃねえか」

思わず俺が呟くと、「いいわけあるか！」と二匹が同時に俺を怒鳴る。

「人間に戻るって事はなあ、戦えなくなるって事だぞ！　戦う事しか脳がねぇ俺達にとって、そりゃほとんど死刑宣告だ！　野垂れ死にだ！」

確かに、戦う以外に脳がなさそうな連中だ。俺は料理の腕があるから「酒場をやる」って夢があるが、こいつらには見る夢もないってわけだ。

「それに、順番を待つ間は家畜小屋行きだ。人間に戻される前に、下手すりゃそこで死んじまう……」

「家畜小屋？　ってのは――」

「おい、着いたぞ。おしゃべりは終わりだ」

坑道を出て少し歩いた辺りで、トカゲが足を止めた。

その視線の先に、派手な刺繍入りのマントを纏った騎士の後ろ姿がある。尖った耳に、長い鼻、ふさふさとした尻尾――後ろ姿だが、間違いなく獣堕ちだ。

あの派手なのが隊長か……？

しかし、なんだ……どうもあの後ろ姿、どっかで見た事がある気がする。

「――隊長！　エブルボアを殺した獣堕ちを見つけました！」

トカゲが声を張り上げて報告すると、騎士はピンと耳を立てて俺達に振り向いた。

あ、と俺は声を上げる。

「……犬面？」

「俺は狼だっつってんだろうが！　どこのどいつだふざけやが――！」

思わず呟くと、真っ白な毛並みの狼が牙を剝いて大げさに吠えた。だが俺を視界に収めた瞬間、ありとあらゆる動きを止めて、バクンと大きく顎を落とす。

「あ――あぁあぁ、兄貴ぃ!?　そそ、それに、泥闇の……！　なんか似てる臭いがすると思ったら……まさか本人だったのかよ……！」

ようやく、俺は状況を理解した。

まともに剣が扱える狼の獣堕ちで、主席魔法使いの直属の下僕と言えば――だ。

「あーあーあー！　主席魔法使いの直属の下僕って、坊主の下僕の事か！　って事は、そりゃお前の事だよなあ」

こいつは元は人間で、〝偉大なるソーレナ〟の魔術で獣堕ちになったっていう特種例だ。そもそもの生まれは貴族で、国の正規騎士をしていた経験から、基礎から剣術を学んでる。

しかし、こいつが恐ろしくて強い獣堕ちなんて印象はこれっぽっちもなかったんだが……。

「んだよ兄貴その目はよ……」

「いや、はったりだけでよく頑張ってんなーと思ってな」

「はったりじゃねぇ実力だ！　あんた俺が何度脳筋馬鹿どもの反乱鎮圧したと思ってんだ！」

「お前がぁ？　にわか魔女を俺にけしかけようとして、逆に殺されかけてたお前がぁ？　うちの魔女に全身の毛ぇ抜かれて震えてたお前がぁ？」

「おいちょっとやめろマジで！　部下の前でそういうのほんとやめろほんと！」

犬面が必死の形相で黙らせようとしてくるので、俺はなけなしの優しさを発揮して口を閉ざしてやる事にする。

そんな俺達のやり取りを見て、くっくとゼロが肩を揺らした。

「随分部下に恐れられているようではないか。――久しいな、犬の」

「だから俺は犬じゃなくて……いや、そんな事より、なんだってあんたらがここに？」

「なんでって、お前の部下に連行されてきたんだがな」

明らかに顔見知りな様子な俺達に困惑を隠せない三匹に、俺は顎をしゃくってみせる。

すると犬面は犬歯を剝き出して――こうすると少し狼っぽいな――部下を睨んだ。

それを、ゼロが静かに制する。

「睨むのはよせ。我輩達――と言うより傭兵が、だが――エブルボアを殺したのは紛れもない

事実だ。彼らは課せられた仕事をまっとうしている」
　その言葉に、犬面は耳をぺたりと伏せて、情けなく尻尾を垂らす。
「なんだってそんな……って言うか少し前、【魔女の手紙】で〈弓月の森〉に向かうって報告してたじゃねえか！」
「こっちにもいろいろ事情があるんだよ。明日の朝一番で城に向かう予定だったんだ。坊主にも【魔女の手紙】で報告してある。エブルボアに関しては不可抗力だ。連れが動ける状態じゃなかったんでな、殺すしかなかった」
「〝しかなかった〟って……逃げりゃよかったじゃねえか。あいつ一匹捕獲して、生きたまま山脈の外に輸送する苦労も考えてくれよ！」
「んな事考えてる暇なかったっつの。そもそも事情を知らねぇっつの」
　そうかもしれねぇけどよぉ、と犬面が額を押さえて肩を落とす。
　なんだよ、俺が悪いのか？
「それで、犬よ」
「狼」
「――狼よ」
　ご丁寧にわざわざ言い直して、ゼロは犬面を見る。
「君はどういう理由でここに？　君がわっぱの傍にいないのは、我輩、少々違和感がある」

「そりゃ俺だってお嬢さんの近くにいてぇけど、そのお嬢さん直々のご命令なんだよ。クレイオン共和国から貴人を招く予定があるが、近頃物騒だからその護衛につけってさ。特にここ南坑道は、近隣国家との関係が悪化してて危険も多い」

「坑道の爆破騒ぎがあったんだってな」

知ってるのか？　と犬面は驚いたように耳を立てる。

「街道に出る盗賊や、ウェニアス王国に入国しようとする旅人への嫌がらせの通行止めに、言いがかりの監禁拘束――問題は山積みだ。そこで警戒用のエブルボアが死んでたら、そりゃ賊が侵入して爆破事件の再来かって思うじゃねえか」

「恨みがましく繰り返すなよ……だから仕方なかったんだって」

俺の言葉に、犬面は「分かった分かった」と諦めの込もった声で言う。

「まあ、貴人の警護つっても俺が警護してたのは〝身代わり〟で、本物はとっくに入国済みだからいいんだけどな」

実際、身代わりとも知らずに何度か盗賊が襲ってきたらしい。

盗賊から貴人を守る事もできない無能国家という印象を作り上げ、民衆の心がこれ以上魔法国家に傾かないようにという腹積もりだろう。

頑なに魔女を悪だと信じ込んでいる連中は、何がなんでもウェニアス王国の面子を潰し、糾弾する理由を欲しがってるって感じだという。

「とにかく、あんたらが戻ってきたのは朗報だ。お嬢さん、きっと大喜びするぜ。最近イライラが溜まってるから、素直に歓迎する」

ようやく、犬面が少しだけ表情を和らげた。

驚きやら怒りやらの感情が引いたら、やっと再会って気分になってきたらしい。

――まさに、そんな瞬間だった。

坑道の方から大勢の怒号と甲高い悲鳴が響き、入国審査を待っていた旅人達が一斉に剣を抜いたのは。

その数およそ二十と少し――この場にいる人間のほぼ半数と言っても過言じゃない。

そして、

「高潔なる女神の名のもと、悪しき魔女に鉄槌を！　地獄への横穴を塞ぎ、力なき民に神の腕の安寧を！」

誰かが叫ぶと同時に、剣を抜いた連中が誰彼構わず襲いかかる。

またかよ、と叫んだのは犬面だった。

「ここ十五日でもう三度目だぞ！　いい加減にしてくれよほんとによぉ！」

「なんだあいつら」

「見ての通り、魔女を擁するウェニアス憎しで集まってる教会信者だよ」

犬面は吐き捨てた。

「あいつらお偉いさんとこのガキだったりするから、殺すとまずいんだ。だから何度追い返しても襲ってきやがる」

「うわめんどくせぇな……」

早口に言うなり、犬面は控えてた部下に坑道を見てこいと指示を飛ばし、旅人を保護すべく駆けていく。

俺は命知らずにもゼロに襲いかかってきた馬鹿を軽く殴って昏倒させ、さてどうしたもんかと周囲を見回した。

「殺し合いの場面だというのに、珍しく落ち着いているな、傭兵」

「殺し合いの場面じゃねえからな」

基本的には逃走派の俺だが、今回の相手は全員が全員見るからにボンクラだ。武器の扱い方を見る限り剣術の訓練は受けてるようだが、人を殺す気概ってもんがない。

――つまりは、茶番だ。

殺されない事を前提に、殺さない戦いを仕掛けてるお遊戯でしかない。

「適当に暴れて、〝ウェニアス王国に向かうのは危険だ〟って噂を流すのが目的だろうよ。実行犯がお偉いさんの関係者なら、捕まえても身代金で解放するのが暗黙の了解だ。万が一殺したら、ウェニアス王国に〝残酷な国家〟って印象がつくのを分かってて、ああいう連中に暴れさせてるんだよ――まあ、よくある嫌がらせだ」

「はた迷惑な嫌がらせもあったものだな」

「迷惑じゃない嫌がらせがあるなら見てみたいもんだがな。ま、こういうのは俺が参加すると逆に状況が悪くなる。どっちかに一人でも死人が出たら、茶番がその時点でマジになるからな」

殺すのはまずいという制約があるからか、それとも民間人に当たるのを懸念してか、魔法使い連中は防戦と民間人の保護を優先しつつ、相手が疲れるのを待つという感じだった。

魔法使いの一人が〈岩蔵〉で防衛のための壁を作り上げ、その裏で怪我をした奴らを〈癒手〉で癒しつつ、闇雲に突っ込んでくる奴の足を狙って〈鳥追〉を放つ。

魔法使いの連中は襲撃には慣れっこという感じだが、旅人達は突然命の危険に晒された恐怖で震え上がり、あろう事か必死の形相で神に祈り始める始末だった。

「しかしこの乱痴気騒ぎ――我輩、少しばかり不愉快だ。つまり、あれらをすべて生きたまま捕らえれば問題はないのだな？」

「できるのか？」

「愚問だ。――一瞬で済む」

いかにも悪の魔女っぽい冷笑を浮かべて、ゼロは両腕を胸の前まで振り上げた。

それだけで、周囲の森がざわつくのが分かる。何より、地面の下で巨大な蛇でも蠢いてるようなこの感じ――。

「ミーザ・リ・キブ　蠢き捕らえ締め上げろ。捕縛の章・第八頁――〈蔦籠〉！　承認せよ、

我はゼロなり！」

ゼロの詠唱が終わると同時に、地面の下から無数の蔦が空に向かって突き出てきた。視界を埋め尽くす蔦の群れが、凄まじい勢いで、そして恐るべき範囲に及んで、獲物目掛けて伸びていく。

それはあっという間に二十数人の暴れ狂う馬鹿どもに絡みつき、次の瞬間には全員が地面や木の幹に縛りつけられていた。

ゼロが呪文を詠唱してから、すべてが終わるまで数秒しか経っていない。

この〈蔦籠〉って魔法は前にも何度か見た事があるが――。

「すげぇな……本当に一瞬じゃねえか」

「〈蔦籠〉が第八頁の高位魔法に属しているのは伊達ではないぞ、傭兵。術者の力にもよるが、我輩ならば千の軍勢が相手だろうと一瞬でこうだ」

ゼロが不敵に言うと、呆気に取られて沈黙していた周囲の連中が一斉に歓声を上げた。

「見た？　ちょっと見た？　今の！　魔法よ！　あれが魔法なのよ！」

「なんて凄まじい……あの数の賊を一瞬で……！　しかも誰も傷つけず！」

「ほら、ね？　言ったでしょ？　あたし絶対に魔法使いになるんだから！　お説教ばっかりの教会なんてうんざり！」

恐怖から一転しての興奮状態で、旅人達は勢い込んで立ち上がり、自分達を襲った連中を

次々に攻撃し始める。

慌てて犬面が止めに入ったが、あちこちで石を投げたり、唾を吐いたり、罵声を浴びせたりと、まるで公開処刑の見世物状態だ。

完全に自業自得だが、加減を知らない人間が私刑を始めると高い確率で人が死ぬ。

早い段階で止めた方がいいんだが――。

「――何をしているのです！」

坑道の中から、見計らったように適任が現れた。

両目の眼帯に、派手な翠髪の神官服――〈女神の浄火〉の裁定官。

「全員下がりなさい！　私刑は教会によって禁じられている事を、知らないわけではないはずです！」

凛とした怒声が、興奮状態だった連中の頭に冷水をぶっかけた。手にした石を次々と地面に落とし、自分は何もしてないとばかりにさっと数歩後ろに下がる。

すると地面に縛りつけられている連中が勢いを取り戻し、「そうだそうだ」と声を上げた。

「さすが、魔女の巣窟に入国しようとする連中だ！　全員心根が腐り果てている！　ウェニアスの魔女どもは王を弑逆し、その王位を簒奪した！　血で穢れた国に足を踏み入れた瞬間貴様らの魂は呪われ、来世には惨めな獣としての日々が待ち受け――あぐっ！」

一際でかい声で喚いた男を、神父が杖の先で鋭く叩いた。

「黙りなさい恥さらし。そもそもウェニアス王国に足を踏み入れた者が呪われるのなら、その地で教会を守っている聖職者はどうなるのです？　考える頭もないくせに、神聖なる神の名を大義名分に、自分本位の愚行を犯さないでいただきたい」

味方かと思った神父にピシャリと撥ねつけられて、男は真っ赤になって黙り込む。

たぶん、こいつが例の権力者の息子なんだろう。よく見れば上等な服を着ているし、剣の装飾も無駄に凝っている。

「おい神父。坑道の方はどうなってる？」

俺が声をかけると、神父は「どうもこうも」と苛立たしげに顔を顰めた。

「突然剣を持った連中が暴れ始めたと思ったら、力加減も知らないような獣堕ちどもが乱入してきてあわや大惨事ですよ」

「まさか殺してねぇだろうな……」

「本人に聞いてみては？」

神父が杖で背後を指した。すると例の犬面の部下三人組が、ぐるぐるに縛り上げた賊どもを引きずりながら姿を現す。――一応、全員五体満足だ。

口々に「ネズミ、ネズミが……ネズミ……」と悪夢にうなされたように繰り返しているが、何があったかは推して知るべしだろう。

でかい獣堕ちが揃いも揃って、後からチョロチョロと追いかけてきたリーリに飛び上がる勢

いでビビってる。

「馬鹿がどれだけ揃ったところで、大した戦力にはならないという典型ですね……部下がこれでは長もたかが知れている。何より、たかだか数十人の民衆を冷静にさせるのに手こずるようでは、人の上に立つ器ではないという証拠でしょう」

さすが神父だ。出てきた瞬間休む間もなく、全力で喧嘩を売りに行くとは恐れ入る。

遠まわしに正面から罵倒された犬面は、当然犬歯を剝き出して神父に唸った。

「随分口の悪い神父がいたもんだな……教会信者の連中が馬鹿やらかした状況で、どうやったらそんなに偉そうな口がきけるほど面の皮が厚くなれるんだ？」

「よすのだ二人とも！　せっかく乱痴気騒ぎが収まったというのに、これ以上我輩に手間をかけさせるようなら二人まとめて極めて恥ずかしい格好に縛り上げるぞ」

どんな格好で縛り上げる気だ、こいつ。想像するだけで恐ろしすぎる。

が、その恐怖に思いを巡らせたのは俺だけで、犬面の方は「けどよ」とゼロに言い募る。

「っつか、大体なんなんだよこの神父！　兄貴達の知り合いなのか？」

「いやまあ……知り合いってーか……まあ……連れだな」

「連れぇ!?」

犬面が素っ頓狂な声を上げて聞き返し、

「だ、だってそいつ神父じゃねえか！」

とすでに分かりきった事を叫ぶ。
気持ちは分かるぞ、犬面。逆の立場なら俺も同じ反応をしてるだろう。
って言うか今でも「なんで俺はこいつと一緒に行動してるんだ」と心底思ってる。
「それだけではないぞ。なんと〈女神の浄火〉の裁定官だ」
「さ、裁定……って……は……はぁあぁ!?　あんたら気でも違ったのか!?」
「いかにも、そうだ。常軌を逸しているからこそ、我輩は魔女なのだ」
犬面は何も言えなくなってがっくりと肩を落とし、額を押さえて俯いた。
すると自然に視線が下がり、その視界に飛び込んできた存在に犬面は目を瞬いた。
「ってーか……さっきから気になってたんだけどよ。その小さいの……獣堕ちか？」
犬面が指さしたのは、さっきから手持ち無沙汰に立ち尽くしているリーリだ。
突然注目された事に驚いて、リーリはぱっと神父の足の後ろに隠れ——ようとしたが、さっと避けられてべしゃりと転けた。
しかしすぐに立ち上がり、泣くまいときゅっと口元を引き締めて犬面を見た。
「……リーリ」
そんなリーリのささやかな自己紹介を受けて、犬面はなぜかひどくぎこちない動きで、ぎしぎしと俺を見た。
「……なあ兄貴……これは……あれだよな。その……かどわかしとか、そういう事案じゃ……」

「なんでお前らはすぐに俺をそういう扱いにしたがるんだ？　俺がいつ、どこで、誰を力ずくでものにしたってんだ？　あ？　魔女と毎晩同じベッドで寝たところで、なんの興奮もしなくなった無害なぬいぐるみのようなこの俺が！」

「兄貴それ、自分で言ってて悲しくならねぇ……？」

「男として無害すぎるという自覚はあったのだな……」

「私はてっきり毎晩事に及んでいるのかと……」

犬面とゼロと神父が、それぞれ勝手極まりない感想を口にする。そして神父、てめぇの感想が一番下世話だぞ。今すぐ聖職者の看板を下ろせ！

「そもそも、お前騙されてるぞ犬面狼。そいつはチビだが普通に強い。油断させるのも込みでそいつの戦闘力なんだよ！　って言うかこいつはこう見えて十七だ！　割と大人だ！」

「え!?　こ、これでお嬢さんより年上なのかよ……！」

犬面がしゃがみこんで、まじまじとリーリの顔を見る。リーリはその視線に耐え切れなくなり、しばらくオロオロした挙句、結局俺の足の後ろに駆け込んできた。

「嫌われたな」

とゼロにからかわれ、犬面が心外そうな表情で鼻面を撫でる。

「しかしなぁ……神父と行動してるなんて報告なかったじゃねえか。っつーか、兄貴の報告内容、大雑把すぎてちっとも伝わってこねぇんだよ」

「獣堕ちの俺が字を書ける事を褒めてもらいてぇもんだがな」
「まあ……兄貴と泥闇の連れなら大丈夫なんだろうが……」
「あ、あのー」
力なく耳を伏せた犬面の背中に、誰かがおずおずと声をかけた。部下の獣堕ち三人衆だ。揃いも揃った間抜け面で、「俺達は何をすれば？」と指示を仰ぐ。
途端に犬面は隊長らしい表情に戻り、怒声に近い口調で指示を出す。
「決まってんだろうが！　暴れた連中全員ふんじばって、プラスタへの連行手配！　それが済んだら馬車の用意だ！　客人を城までお連れする！」
「了解しました！　隊長殿！」
犬面の命令に威勢よく答えて、犬と牛とトカゲが全員同じ方向に走っていく。
作業を分担するって発想はないらしい。
「大丈夫なのか……？　あいつら」
「はっきり言って、大丈夫じゃねえな。――だがまあ、あんなんでもあいつらが獣堕ちである以上、雇っておいた方が治安上いいんだ」
「治安だぁ？」
「ウェニアス王国が魔法国家になった途端、獣堕ちの首を国に売ろうとする連中が増えたんだよ。そうすっと、物騒な連中が王都に出入りして治安が悪くなるだろ？　だからお嬢さんが

〝国家魔法使いは獣堕ちの首を買わない〟って布告を出したんだが……今度は獣堕ちがウェニアスに集まるわけだ」

「そりゃそうだわな」

獣堕ちの天敵は、首を狙ってくる魔女と盗賊だ。もしそいつらに襲われる心配がないんなら、遠方からわざわざウェニアスに移り住む理由は十分にある。

「堕落の象徴が集まってくるよりは、盗賊が出入りする方がマシに思えますがね」

神父の嫌味に、犬面は苦々しげに同意する。

「まあ、早い話そういう事だ。戦争状態でもない国に獣堕ちが集まったところで、野盗化するのは目に見えてる。――だから、獣堕ちを雇う事にした」

なるほど。国のあちこちで好き勝手暴れられるくらいなら、いっそ組織に組み込んで管理しようってわけだ。

「それが、魔女の下僕志願ってわけか？」

「古きを知って新しきをってな。もともと獣堕ちってのは魔女が作ったんだ。だからお嬢さんと俺や、泥闇と兄貴みたいに、魔女と獣堕ちで組んだ方が都合がいい事は多い。これが想像以上に上手くいってな。獣堕ちを警備として使うようになってから、盗賊の数は劇的に減った。まあ、問題がないわけじゃないんだが……」

意気揚々と話していた犬面が、ふと言葉を濁した。

問題？　と俺が問い返す前に、神父がさらりと指摘する。
「獣堕ちによる、手のつけられない犯罪の増加――ですか」
犬面は不機嫌そうに鼻の頭に皺を寄せた。
「馬鹿は馬鹿で鬱陶しいが、察しがよすぎるってのもムカつくな」
「褒め言葉と受け取っておきましょう。つい最近も、獣堕ちによって村がひとつ滅ぼされたと聞きました。並の魔法使いでは鎮圧できず、主席魔法使いが乗り出す事態になったと。犯罪の〝数〟が減っても、その〝質〟が深刻化しているのでしょう。まあ、獣堕ちの数が増えればそうなる事くらい、考えるまでもなかったと思いますがね」
「あのよぉ、兄貴の連れだっつうから大目に見てるが、国内で問題起こしてんのは教会関係者も一緒なんだぞ。ウェニアス国内には大小合わせて二百七十三の教会施設があるが、そこの連中が連日連夜、ありもしない陰謀説を国民に吹き込んで暴動を煽ってるんだ。武器を集めて信者に配る神父もいるし、禁じられた魔女狩りと火炙りを激奨する神父も多い。共存に向けて舵を切ってるこの国で、それがどれだけ迷惑か――考えるまでもねぇと思うがなぁ」
おーおー、言うじゃねえか犬面狼。
こいつはよっぽど教会に対して、腹に据えかねてると見える。
が、神父は神父だ。犬面がどんなに吠えたところで、ほんの少しも揺らぎはしない。
「その件に関して私から引き出せる感想が、〝素晴らしい〟以外にあると思いますか？」

犬面は返す言葉を失い、あんぐりと口を開けて固まった。それからすべてを諦めたように額を押さえ、「だから嫌いなんだよ教会の連中って」と嘆きの込もった声を上げる。
「本当に大丈夫なのかよこいつ。お嬢さんとこに連れてってよぉ」
「そう心配せずとも、この神父は意外と情に厚い男だぞ。心優しく、繊細でいて純真。我輩、傭兵と似ているとすら――」
「それ以上寝言を言うようでしたら即刻この場で処刑しますよ」
「それについては手を貸すぞ神父」
俺と神父が同時に得物に手をやると、ゼロはこの期に及んで「ほらな」と笑った。

日が暮れちまってから馬車を出すのも馬鹿らしいので、出発は翌朝という事に決まった。
犬面が宿を用意すると言ってきたが、すでに部屋を取ってある事を伝えると、翌朝坑道の出口で落ち合う事で話が着いた。
「ああそうだ。神父様の服だが――どっかで別のを調達しといてくれ。知っての通りの情勢だ。俺が神父を城に連れてったなんて噂が立つと、またいらん憶測を呼ぶからな」
という犬面の要請を、神父は無言の首肯で受け入れた。
そもそも情報収集を主な任務としている神父にとっちゃ、身を隠すために農民の服を着るくらいどうという事もない。

宿に戻ると、元獣堕ちの下男が俺達を出迎えた。
「釈放されたのか？　残念だな。エブルボアの肉、独り占めできるかと思ったのに」
と気さくに笑った男の腕には、血の滲んだ布がぐるぐるに巻いてある。
「さっきの襲撃か？」
「ああ。連中、俺がもと獣堕ちって知ってたみたいでな。わざわざ狙ってきやがった」
非力な人間の手を見つめる男の目は、やはり少し、獣堕ちだった頃に未練を残しているように見える。
「なあ、神父様。こうして人間になってもさ、俺は堕落の象徴のままなのかねぇ……？　連中は、俺が〝魔女の外法で周りを騙してる〟って。どんな風に姿を変えても、化物は化物のままだってよ……だとしたら――」
「あなたは妻を守るため、押し入ってきた連中の前に真っ先に飛び出していきました。だから私はあなたを守った」
男はきょとんとして神父を見た。
「へ？　あの……」
「裁定官が〝化物〟を守って神器を振るう事はない、という事です」
言うだけ言って、神父はさっさと部屋に引き上げていった。
ゼロはその後ろ姿をにやにやと見送り、

「やはり我輩、あれが結構嫌いじゃないぞ。なあ、傭兵？」
なぜか同意を求めて俺を見る。
俺はわしわしと顎の毛を撫で、
「どうだろうな、チビ」
と足元のリーリに話題を受け流した。
「え!?　リーリ!?」
案の定、突然話を振られたリーリは飛び上がり、おろおろと視線をさまよわせる。
それから何かを思い出し、
「えと、あの……し、知るかばか！」
と言った。

二章　裏切り

1

よく調練された軍用馬は、獣堕ちが乗る馬車でも怯えずに引いてくれる。
犬面との再会を果たした翌朝、俺達は忍耐強い二頭の栗毛のおかげで、坑道から馬車で王都プラスタを目指して出発する事ができた。
徒歩だと相当な日数がかかるが、馬車ならせいぜい三日だろう。
リーリは生まれて初めて乗る馬車に落ち着きなく窓の外を眺め、神父はいつものように馬車の隅っこで膝を立てて座っている。
犬面の要請で平服を着ているせいで、たまたま乗り合わせた巡礼中の盲人という感じだ。
ゼロはと言えば当然のごとく俺の足の間に腰を下ろし、「昨日洗ったばかりでふかふかだ」とこの上なく満足そうだった。
「しかしまあ、この人数を乗せられるほどの馬車をひょいと用意できるとはな——随分な出世じゃねえか」
「俺はもともと城に仕えてたから、〝もとに戻った〟って感じだけどな。って言うか、獣堕ちは基本的にでかいから、必然的にこういう設備が必要になってくるんだ。この馬車もそもそも俺らの所有だから、特別金を出してるってわけじゃない」

「獣堕ち用の設備が整ってるのか？」
傭兵として各地を転々として長いが、獣堕ちは人間様の設備を間借りさせて頂くだけで、獣堕ちのために何かが用意されている事はほとんどない。
例外として、獣堕ちを閉じ込めておくために猛獣用の檻があったりするが、基本的には家畜と同じ扱いだ。
「魔女の技術ってのは、大したもんじゃなくても国外にも高く売れるんだよ。主に薬だな。教会には睨まれるが、おかげで国庫はそこそこ潤ってる」
「したたかなもんじゃねえか。その分だなら、坊主も元気にやってそうだな」
無条件の肯定を想定しての言葉だった。
だが犬面は一瞬言い淀み、「まあ」と微妙に言葉を濁す。
「……何かあったのか？」
「お嬢さんから話があると思うが……まあ、いろいろと芳しくない。近隣国家や教会だけでも手を焼いてるってのに、最近じゃ魔法使いのなかにも、お嬢さんのやり方が気に入らないって連中が出始めてるんだ。お嬢さんは魔法の〈許可〉にかなり慎重で、なかなか〈許可〉を与えられない見習い連中は鬱憤をためてる」
「わっぱとて、それは想定の範囲内だろう。むしろ、不満が出ない方がおかしい」
「そりゃそうなんだが……どっかの魔術師が、そういう連中を集めて何か企んでるらしいんだ」

「おいおい、また内乱かぁ？　今度は魔女同士で？」
「まだ具体的に動きがあるわけじゃないんだが、お嬢さんがピリピリしててな。その魔術師ってのは、一度見れば二度と顔を忘れないほどの美男だって話なんだが……どう探しても見つからねぇんだ」
「情報が坊主の耳に入ってるなら、そりゃ随分でかい勢力になってるはずだぞ」
だからピリピリしてるんじゃねえか、と犬面はペタリと耳を伏せた。
「しかし、なるほど。これで、〈弓月の森〉に戻ったはずの十三番が穴ぐらにいなかった理由が分かった。わっぱの窮地を察し、ウェニアスに戻ったのだろう」
ゼロが十三番の名前を出した瞬間、犬面の表情が険しくなった。
あまりに露骨に表情を変えたので、こっちが若干面食らう。
「あ、いや悪い……そうか、あんたらはまだ知らねぇんだよな。確かに十三番はウェニアスに戻ってる。だが面倒な事になっててな。実は――」
そのとき、突然馬が大きく揺れ、馬のけたたましい嘶きと同時に停車した。
「なんだ!?　また襲撃か！」
咄嗟に剣を握って馬車の外に飛び出し、俺はその光景に一瞬目を疑った。
「なん……ッだこりゃ……」
木だ。

無数の木の枝が異常な長さに伸び、絡み合い、街道を塞ぐ壁を作り上げている。
そしてその枝に絡め取られて、馬と御者の体が頭上高くに浮いていた。
客車と馬を繋いでいた縄は引きちぎれ、完全に身動きが取れなくなっている。
「これは……魔法……だよな……？」
「いや、【ゼロの書】の魔法ではない」
俺に続いて馬車から降りたゼロが、この光景を見て唇に笑みを刻む。――わくわくしているような表情だった。だが、苦々しそうでもある。そんな複雑な表情だ。
「どうやら、サナレの他にも独自の魔法を使える者が現れたようだな……！　この段階に至るまでもう少し時間がかかると思っていたが、我輩が楽観的すぎたらしい」
「へぇ、光栄だな。泥闇の魔女にそう言ってもらえるなんて」
ぞくりとするような、甘ったるくて低い声に、俺は尻尾の毛を逆立てて声の方に振り向いた。
声をかけられるまで、その気配に気づけなかった――だが気づいてみれば、嗅覚を奪うほど濃厚な、甘ったるい香りが辺りに漂っている。
「けど、自分で魔法を作ったわけじゃないんだ。【ゼロの書】の魔法をもとに、私にとって使いやすいように改変しただけでね。それだって、十三番がいなければできなかった」
妖艶としか表現のしようがない、迫力のある美女だった。
腰まで伸ばした豊かな赤毛は燃えるようで、広い肩幅や長い脚は、見る者を圧倒する威厳さ

え感じさせる。
　爪の先から頭のてっぺんまで一分の隙も見当たらず、服の上からでも適度に引き締まった筋肉が見えるようだった。極めつけに、全身を包むゆったりとしたローブを大げさなほどに押し上げている、質量過剰な胸の膨らみ――。
「こいつは……大物だな……」
「どこを見て言っているのだ、君は……」
　俺がごくりと喉を鳴らすと、ゼロが珍しく俺に冷ややかな視線を送る。
　いや別に胸を見て言ったわけじゃねぇぞ。ほんとだぞ。
「そこの魔女――今、十三番と言ったか？　ではこの襲撃は、十三番の命によるものか」
「襲撃――って、随分と乱暴な物言いをするね。こちらとしては、怪我人を出さないように最大限の注意を払ったつもりなのだけど」
「十三番の命によるものか――と、我輩は聞いている」
　ゼロが質問を繰り返すと、女は困ったように眉尻を下げた。
「びっくりするほど、十三番に聞いていた通りの性格なんだな。別に、命令されてやってるわけじゃない。ただ十三番があなたに会いたがってるから、私があなたを連れて行けば、あの顰めっ面も少しはマシになるかと思ってね。素直についてきてくれると、非常に助かるのだけど……どうだろう？　協力してもらえるかな？」

派手な化粧顔で、女はにっこりとゼロに微笑みかけた。
ゼロもフードを脱いで素顔をさらし、穏やかな笑みでこれに答える。
「あいにくわっぱと先約があるのでな。そちらを済ませてからだと十三番にお伝え願おう。順番は守らねばなるまい？　――それとも」
ゼロは俺と、犬面と、神父と、リーリを順繰りに見回した。
「力ずくで連れていくか？」
「あぁ……困ったな。そういう話になっちゃうの？　女の子に力ずくなんて品性に欠ける事、想像もした事ないよ。それに私、血とかダメだしね。こう見えて、鶏を殺すのにも半泣きだ。――と言うか、戦う必要なんてないと思うのだけど。あなた達も興味があるんじゃないかな」
一拍、女はもったいつけた間をおいた。
「〈不完全なる数字〉の話」
俺はゼロに目配せした。
優先順位を変えるだけの価値が、確かにこの招待にはありそうだ。
だが、次の瞬間。
「詠唱〈炎縛〉！　目標を樹木に――放て！」

甲高い声が森に響くと同時に、無数の炎の蛇が宙を駆け、不気味に蠢く木の枝に絡みついた。
生木は黒い煙を上げて燃え上がり、枝に捕らえられていた馬と御者が地面に落ちる。
その黒煙が風で吹き散らされると、小柄な金髪のガキが姿を現した。
「傭兵！　ゼロ！　無事でよかった……！」
と破顔一笑する様子はいじらしいような気もするが、その背後に騎士と魔法使いの入り混じる部隊が展開されているのを見ると、そう穏やかな気持ちにもなっていられない。
「わっぱも立派になったものだな」
「つーかなんでここにいるんだあいつは。国のお偉いさんだろう」
俺とゼロが呟くと、その会話を聞き拾ったアルバスは露骨に顔を顰めた。
「せっかく格好よく登場したんだから、もう少し嬉しそうにしてよ！　危ないところを助けてあげたんだよ、僕は！」
「いや、別に危なかなかったが……」
「格下の魔女相手に、我輩が遅れを取るわけもあるまい」
俺とゼロが揃って言うと、アルバスは「相変わらずすぎてムカつく」と憤慨する。
それから女をぎろりと睨み、
「十三番の手下、か――ゼロと傭兵が戻ってきたら動きがあると思ったけど、案の定だったね。けど二人は僕の大事な仲間なんだ！　お前達なんかに渡さない！」

女は長い睫を静かに伏せて、口の中で何か呟いた。
俺の聴覚が確かなら、「馬鹿な子だな」と言っている。
苦々しさというよりは、憐れみの込もった口調だ。
それから、
「うーん。こんなに人が増えたんじゃ、ゼロだけ招待するのは社交的に失礼に当たるなあ。残念だけど、今日のところはお暇しよう」
と明るい調子で言う。
だがアルバスはそれを許さなかった。
「逃がすもんか……！　十三番の居場所を吐かせてやる！　総員詠唱！　目標、赤毛の魔女！」
「おい！　馬鹿ちょっと待――」
待てと言い終わる前に、アルバスの背後に控えている魔法使い達が一斉に〈鳥追〉を放った。
だがそれが女に到達する事なく、他の魔法に弾かれ空中で霧散する。
「これは――」
アルバスが息をのみ、女は得意げに微笑む。
と同時に。
「下がれナナ！　時を待てと命じたはずだ！」
男の怒声が辺りに響いた。

聞いた事のある声だった。
姿を探すと、森の奥――木の枝の上に立つ黒いローブ姿があった。
その手にある特徴的な杖を見れば、顔を見なくても誰だか分かる。
「十三番……!?」
叫んで、赤毛の女が目を見開いて十三番に振り返る。
「こ、この馬鹿！　なんでノコノコ出てきたんだ！」
「決まっているだろう。お前を失うわけにはいかない」
……は？　なんだ、お前らそういう関係なのか？
師匠と弟子で？　ただれてるな、おい。
などと、俺が下種で無粋な妄想に忙しく頭を働かせている間にも、事態はより深刻な方へと転がっていく。
「全員一点集中！　十三番を殺せ!!」
と、アルバスが叫んだ。
背後に控えた魔法使いの連中が、一斉に詠唱を始める。
おいちょっと待て。これは一体、何がどうなってこうなってるんだ？
十三番は、今後アルバスの助けになる事を決めたんじゃなかったのか？
アルバスは十三番を許し――許してはいないまでも許容して――その力を利用する決意を固

めたんじゃなかったのか？

それがどうして、十三番を殺そうとするんだ。

俺達が国を離れていた間に何かが起きたのは間違いなさそうだった。【魔女の手紙】でやりとりをしていたはずなのに、俺は何一つそれを知らない。

「ちょ、ちょっと待て坊主！　お前なんで――」

「よさないかこの――痴れ者どもがぁ!!」

俺が何か言うよりもはるかに有効なゼロの怒号が空気を震わせ、十三番に襲いかかろうとしていた魔法使い達の動きが止まる。

アルバスまでもが硬直して、場は一瞬で静寂を取り戻した。

十三番だけがゼロの気迫に動じず、これを好機とばかりに長いローブを翻して俺達に背を向ける。

「――私を探せ、ゼロ。そのときにすべてを話す。引くぞナナ！」

「そんなに怒らないでよ。せっかく役に立とうとしたのにさ……じゃあまたね、ゼロ」

十三番と謎の魔女は、そんな会話を残して闇に溶けるように消えていった。魔女の方は、投げキスの置き土産つきとくる。

あ、とアルバスが声を上げる。

それから眉を吊り上げて、掴みかからんばかりの勢いでゼロに詰め寄った。

「な……なんで邪魔するんだよ！　もう少しで殺せそうだったのに！」
「穏やかではないな、わっぱ。あれは我輩の唯一の同胞にして最後の同門――殺すと言うのならばそれなりの理由が必要だ」
「理由なんて……そんなん見れば分かるだろ!?　十三番が裏切ったんだ……あいつがまた、ウエニアスをめちゃくちゃにしようとしてるんだよ！」

2

「【魔女の手紙】で二人が戻ってきてるって知って、急いで準備して迎えにきたんだ。十三番が何か企んでるなら、ゼロが狙われるのは間違いないから……」
この状況で、神父とリーリ――特に神父の方だが――をアルバスに引き合わせるのは話がややこしくなりすぎると踏んで、一旦俺達だけでアルバスの馬車に乗り込む事にした。
神父がごねるかと思ったが、こういう場面で意外なほどすんなり身を引くのは、唯一神父の美点と言っていいだろう。
馬車が走り出してしばらくして、アルバスはぽつぽつと国の状況について話し始めた。
近隣国家との関係がどうのとか、教会がどうのというのは、概ね犬面から聞いた話と同じだが、ひとつだけ耳を疑う話があった。

「十三番が、ウェニアスの王子を連れてって……どこかに閉じ込めてるんだ」
「はぁ!?　さらわれたって事か？」
「そうじゃないよ。出て行ったのは王子の意思」
「なんだそりゃ。ウェニアスの王子が、十三番と駆け落ちでもしたって事か？」
「君って時々本当に頭悪いよね……」
憐れむような目で見られ、久々にこのガキの頭に拳の一撃をくれてやりたくなる。
「――一年前、十三番がこの国を出たときか」
ゼロの言葉に、うん、とアルバスは頷いた。
そう言えば、十三番が火炙りの茶番を演じ、こっそりとウェニアス王国から〈弓月の森〉へ旅立つとき、何人か弟子を連れていた。そのなかに、王子も混ざっていたわけだ。
「魔法国家になった事で、ウェニアスは大勢を敵に回した。王族は教会信者に暗殺される可能性が高い……だから殿下まで暗殺されないように、安全な場所に隠れてるべきだって、十三番は言ったんだ。確かにそうだと思ったし、僕もそのときは十三番を信じた。それで、最近陛下が毒殺されて……」
アルバスはすぐさま十三番に連絡を取り、王子の帰還を求めたが、十三番は「まだ安全ではない」と言ってそれを拒否した。
「他の王位継承者は？」

「陛下が身罷って三日のうちに、全員原因不明の死を遂げたよ。笑えない事に、陛下もろとも僕が暗殺したって噂されてる」

俺は頭を抱えた。

やられたな、とゼロも深く息を吐く。

「坑道を襲撃した賊どもが〝魔女が王を弑逆し、王位を簒奪した〟などとのたまっていたが、そういう事か。どうあっても、君を悪者に仕立てあげたいと見える」

王のいない国は均衡を失い、「魔法使いが王を殺して国をのっとった」という悪評が流れ、教会派と魔女派で再び国内に亀裂が走り、国外からもさまざまな圧力がかけられている。

おまけに、新たな魔術師の集団がよからぬ事を企んでいるという。

「けど、ちゃんと一人で対処できる。殿下さえ取り戻せれば……そのためには、十三番を倒さなきゃいけないんだ！」

「十三番を殺しちまったら、肝心の王子の居場所が分からなくなるだろうが」

「殺す気でかかったって、どうせ十三番は死なないよ。手加減なんてできる相手じゃないんだ」

「あー……まあ、そりゃそうだわな……」

確かに、十三番が死ぬ姿はまったく想像がつかないし、即死でさえなければ魔法でどうにか延命もできるだろう。

とすれば、殺す気でかかるのが一番だ。

「あの……ゼロ」
「うん？」
「さっきは怒鳴ってごめん。十三番を見たら頭に血が上って……【魔女の手紙】で十三番について話さなかったのは僕なのに」
「我輩は気にしない」
ゼロが優しく微笑むと、アルバスはようやく少し肩の力を抜いた。
けどよ、と俺が口を開くと、アルバスの金色の目が俺を見る。
「なんでそんな大事な事黙ってたんだよ。っつーか、後半なんかほとんど〝了解、引き続き調査の続行を望む〟で終わってたよな」
「それはよーへいのせいじゃんか！」
むっと唇を引き結び、アルバスが責めるように俺を見る。
するとゼロが俺を見て、「やはり君が冷たいからだ」とからかった。
なんだよ、俺のせいなのか？
俺が鼻の頭に皺を寄せると、ふいにアルバスが小さく吹き出した。
「二人とも、相変わらずだなあ。なんかその……うん、戻ってきてくれて嬉しいよ。やっぱりちょっと心細かったし……ゼロが手伝ってくれれば、きっと十三番もすぐに捕まえられる」
「――十三番は、我輩に〝私を探せ〟と言った。すべてを話すと。いずれにせよ、十三番を追

う必要があるだろう」

やった、とアルバスが大げさに喜んで、ゼロの首に抱きついた。

「落ち着けわっぱ。我輩は十三番を殺す事を了承したわけではないぞ。その真意を測ると言っているのだ」

「分かってるよ。けど、どうせ結果は同じだもん」

アルバスはゼロに抱きついたまま笑顔で言う。十三番の裏切りを確信し、その死を願ってやまないという感じだった。

それから、「そうだ！」と大きく体を離す。

まったくせわしないガキだ。

「もうすぐウェニアス王国が魔法国家になって一年でしょ？　それで、国の記念日としてお祭りを開く予定なんだ。陛下が崩御した直後にお祭りなんて不謹慎だって言う連中もいるけど、誰よりも陛下がこのお祭りを楽しみにしてくれてたから、絶対にやるつもり。お城では舞踏会もやるんだよ。国内外の偉い人を集めてさ！　ゼロとよーへいも参加してよ！」

俺とゼロは目を見開き、顔を見合わせた。

「武闘会……とはなかなか激しい祭りを催すものだな。国一番のつわものを決めるのか？」

「そのありがちな勘違いはわざとか？　それともマジか？」

聞くと、ゼロは「違ったか」と顔を顰める。どうやらわりとマジらしい。

「戦うんじゃなくて、踊るんだよ。なんかヒラヒラした服とか着て、男と女が」
俺が雑に説明すると、ゼロはますます不思議そうに首をかしげた。
「何のために？」
「知らねぇけど、楽しいんじゃねえのか？」
「よく分からないな……」
ゼロが眉をひそめると、アルバスは勢い込んで俺達に身を乗り出す。
「だからこそじゃん！　見るだけでもいいからさ。二人がいれば僕も楽しいし、ね！」
「二人が……って、お前まさか俺まで参加させようとしてるんじゃねえだろうな」
「あたりまえじゃん。獣堕ちを警備に立たせるから、ホルデムだって参加するし」
「正気かお前!?　んな事したら客が悲鳴を上げて逃げ出すぞ！」
「大丈夫だよ！　その事はちゃんと招待状に書いてあるし、それが嫌な人は招待に応じないだけだし」
そう単純な話でもないと思うんだが、アルバスのなかではもう俺とゼロが舞踏会に参加する事が決定しちまったらしく、鼻歌交じりに「楽しみだなあ」などと言っている。
王都に向かう道中、休憩の時間にネズミと神父が連れにいる事を伝えたが、アルバスはさして気にしたふうもなく、むしろ歓迎しているようだった。
「僕は教会と対立する気はないんだ。国内でも共存できたらって思うんだけど……」

そう簡単にはいかないねと、困り顔で言うアルバスは理知的な魔女らしく、一国の魔法使いを束ねるに相応しい落ち着きさえ見て取れる。
神父の方も「どうも」と言ったきり余計な口をきく事はなく、神父と魔女の邂逅は怖れていたよりも穏やかに進んだ。

そうこうするうちに、馬車は王都プラスタへと到着する。
大勢の人々でごった返す街中に、相変わらず露店や芸人がひしめいており、さまざまな色で染め抜いた布が民家や店に飾られている。
町を満たすのは祭りの気配で、それは週に一度やってくる女神の祭日よりもずっといきいきとして華やかだ。
リーリはその様に目を輝かせ、城にいたるとやはり口をぽかんと開けて「おっきいねぇ」とため息を吐いた。
アルバスが馬車を降りるなり、大勢の弟子や役人がその小さな体を取り囲み、あれこれと指示を仰いでいる。
アルバスは明らかに迷惑そうな顔をしていたが、ちらと俺達の姿を確認すると、苦笑いとともに「仕事しなきゃ。僕、偉い人だから」と言った。
「部屋を用意させるから、くつろいでて。晩餐でまた会おう。聞きたい話いっぱいあるんだ」

そうして、俺達四人全員に、それぞれ個室が与えられる運びになった。
ゼロは当然のごとくすぐに俺の部屋にやってきたが、リーリまでもが豪奢な部屋に恐れをなして俺の頭の上に逃げてくるという事態は想定外だ。
「リーリ、汚い……あ、歩けない……」
と、俺の頭にしがみついて涙目で震える姿は実に憐れで、下ろすのも残酷な気がしたのでそのままにさせておく。
しかし、こいつは夜寝る時どうするつもりなんだ……？
「しばらく見ぬ間に、変わったものだな」
出窓に腰掛けて外の景色を眺めながら、ゼロが不意にそんな事を言った。
「坊主の話か？」
「それもある。だが、もっとすべてだ。魔女が公認され、獣堕ちが増え、国王が崩御し――この国は刻々と変化している」
「この国だけじゃねえぞ。国が一つ大きく動けば、周りの国にも影響は出る」
「――例えば、坑道の襲撃のような……か？」
ゼロの表情は苦い。
ウェニアス王国に対する、近隣国家の悪意。その結果の襲撃――その延長線上にあるのは戦

争だと、世俗に疎くとも賢いゼロには分かっている。
今にもまた「我輩のせいだ」とでも言い出しそうな雰囲気に、俺が顔を顰めると、ゼロは「そんな恐ろしい顔をするな」と笑った。
「〝強制召喚〟という他者の思惑によってではあるが、我輩達は戦争の火種くすぶるウェニアス王国に戻ってきた。我輩は、これを偶然とは思わない。我輩達の力でこの火種を消し去れるのなら、少しばかり面倒でも骨を折るつもりだ」
「骨を折るってのは、つまり十三番探しか？」
「当座の目的はそれだ。王子を奪還し、即位させ、その命を守る方法を考える。内乱を企んでいるという魔術師も見つけよう」
「〈不完全なる数字〉はどうすんだよ」
「並行して、そちらの調査も進めればいい」
「そりゃ全身複雑骨折って感じだな……」
げんなりとして肩を落とした俺とは逆に、ゼロはあくまで前向きだ。
「そうでもない。我輩達の馬車を襲ったナナとかいう魔女は、〈不完全なる数字〉についての情報を持っていると言っていた。王子奪還のついでに、その情報をいただけばいい」
「そう上手くいくもんかねえ……」
「上手くいかなければその時だ。どちらにせよ、十三番を追うという我輩達の目的に変更はな

い――そうだろう？」

そりゃそうなんだけどよ、と俺は耳を伏せた。

「大体、戦争なんざ起こる時は起こるんだ。国の偉い奴の気まぐれ一つで、明日にでもな。俺らがあーだこーだしたところで骨折り損でしかねぇと思うと、サナレを殺せりゃ満足な俺としては心底めんどくせぇ」

「相変わらず、君は自分中心で冷酷だな」

「お兄ちゃん、優しいよ？」

リーリが、不思議そうにゼロに言う。

俺は頭の上のリーリをがっしと掴むと、そのままぽいとベッドに投げ捨てた。

柔かく、ふかふかで、絹張りのベッドに全身で突っ込んでしまったリーリは、恐怖と緊張に全身の毛を逆立て、弾かれるようにベッドから飛び出して、その勢いのまま部屋の外まで逃げていってしまった。

「相変わらずの照れ屋だな」

「照れてんじゃねえよ！　俺は血も涙もない傭兵なんだ！　優しいなんてのは褒め言葉でも何でもなくて、〝簡単に殺されそう〟って事になるんだよ！」

俺がイライラと尻尾を揺らして言い返すと、ゼロは前触れもなくその尻尾をわっしと掴んだ。

悲鳴を上げて飛びのきそうになるのを、気合を総動員してどうにか耐える。

「優しいという事は、すなわち強さだ、傭兵よ。普通に生まれた育った人間ですら容易に心を歪ませるというのに、君は獣堕ちでありながら、他者に情けをかけられるだけの人間性を保持している。我輩と出会う前からそうだった。優しいという言葉はつまり、君のその強さへの賞賛に他ならないと思わないか？」

などと、上から目線で説教くさい事を言ってくるゼロから、俺は無言で尻尾を取り返す。

「……チビを探してくる。あの調子じゃ、厩の隅で飼い葉に埋もれてそうだからな」

ゼロを置いて部屋を出て、リーリを探すためにぶらぶらと城の中を歩いた。

すぐに見つけられるかと思ったが、先日ゼロによって丸洗いされたばかりで体臭が薄くなっているリーリの臭いを追うのは難しい。

おまけに、城には俺達以外の獣堕ちが相当な数うろついているらしく、あちこちから強い獣の臭いがしてまったく見当がつかなかった。

「犬なら見つけられるんだろうが……」

「だから俺は狼だって！」

廊下の向こうから鋭く吼える声が飛んできて、俺はぎょっとして振り向いた。

すると長い廊下の一番端に、白い狼が立っているのが見える。

歩いていたら偶然俺の呟きが耳に飛び込んできて、思わず怒鳴ってしまったという感じだった。犬面は鼻の頭に皺を寄せ、駆け足で俺に近づいてくる。

「正直なところ、犬と狼って何が違うんだ……？」
「ぜんっぜん違うだろうが！　狼は頭がよくて誇り高いが、犬は家畜で人間に従う」
「じゃあ、魔女の下僕やってるお前は犬って事になるしゃねえか」
「違う！　狼は家族を大事にするんだ。だから俺は自分の意思でお嬢さんを守ってんだよ。ソーレナを守れなかった分、お嬢さんは絶対に守りきるって決めたんだ」
「ご立派な心がけだこったな。――ところでチビを見なかったか？　俺と一緒にきたネズミの獣堕ちなんだが」
「リーリちゃん？　見かけなかったけどな」
リーリ……ちゃん？
なんだその呼び方は。てめぇいつの間にあいつとそんなに仲よくなったんだ。
「なんだよその目は……」
「忠告しとくが、あのチビに下手な事すると返り討ちにあうだけだからな」
「どういう意味だ！　俺の事を色情狂みたいに思ってるなら大きな誤解だぞそれは！」
元々城の正規騎士であるこいつが城を追われ、ソーレナの下僕になったいきさつを思い出せば誤解でもなんでもないと思うが……まあいい。今はリーリ探しだ。
「チビが絹張りのベッドや毛足の長い絨毯にビビッて逃げ出しちまったんだ。つうか、どうにかなんねぇのかあの部屋。俺としてはああいう部屋より。何を壊しても問題ないような部屋

の方が助かるんだが」

「そりゃ俺も一応そう言ったけどよ。お嬢さんが一番いい部屋に泊めるって言って聞かねぇんだよ。でないと外聞が悪いからって」

「外聞？」

「魔女を差別せず、普通の人間として公平に――ってのがウェニアス王国の方針だ。それが、お嬢さんの客人を――しかも魔女と獣堕ちの二人組みを召使用の部屋に泊めたら、どんな風に噂が広まるかはおして知るべしって感じだろ？」

俺は耳と尻尾をへたらせ、肩を落として納得した。

それに合わせるように、犬面の耳と尻尾も力なくしおれる。

「今回の舞踏会も、公平さを強く民に知らしめるための手段って面もあるんだ。けどよ、世の中はその公平ってのが気に入らない連中だらけだ」

魔女を平等に扱うと言えば教会信者が顔を顰めるし、獣堕ちの出入りの制限をなくせば力のない人間が怯えて近づかなくなる。

平等を徹底すれば、虐げられていた連中は喜ぶが、優遇されていた連中は損をする。世の中にはそれを受け入れられない奴の方が多い。

それでも自分はすべての民に公平だと主張するために、魔女も獣堕ちも参加する舞踏会を開くってんなら、アルバスの決意は本物だろう。

それを、俺達の居心地が悪いからなんて理由で台無しにするわけにはいかない。
「そんじゃあまあ、ますますチビを見つけないとな。あいつをとっ捕まえて無理やりにでも部屋に叩き込まないと、じめっとした地下室の隅の方で誰の目にもつかないように隠れてそうだ」
「そんなに心配しなくても、わりと近くから臭いがするぜ。少なくとも城内だし、地下や外には行ってない」
案内するというので、お言葉に甘えて犬面についていく事にした。
任せておいてもよかったんだが、なんとなくこいつにリーリを任せておくのは危ない気がする。と、正直に口に出して言うと、犬面は「俺はソーレナ一筋だ！」と実にいじらしい台詞を吐いた。
「つかお前、坊主じゃなくて、ソーレナ一筋なんだな」
「そりゃお嬢さんも大事だけどよ、そもそも俺が惚れたのはソーレナだ。当然その孫娘のお嬢さんも大事だが、一筋ってのとはちと違う。ただ、お嬢さんはソーレナにそっくりだからな。最近は大人びてきて、ときどきソーレナが生き返ったような気がしてはっとする」
面に似合わず一途な野郎だな……とはさすがに頭のなかで考えておく。
しばらく歩くと、俺達の部屋のところまで戻ってきた。
「おい、道が違うぞ。チビはここから逃げ出したんだ。臭いをたどるなら、ここから遠ざかる方の臭いを追えよ」

「違わねぇよ。臭いが強い方にきたんだ」
「はあん？」
俺が聞き返すと、犬面は立ち止まった。顔を顰めて、一つの扉を指差す。
「こんなか」
犬面が指差したのは、元々リーリにあてがわれていた居室だった。

部屋に入ると、リーリの姿は見えなかった。
だが部屋の隅にあった衣装箱を開くと、予備として積み上げてあった枕や毛布の隙間に隠れるようにして、リーリがうずくまっているのが見える。
「何やってんだ、お前……」
呆れて言うと、リーリは布に埋もれたまま「隠れてる」と答えた。
それから、
「リーリ、ここ怖い」
と言った。
「じゃなんで自分で戻ってきたんだよ」
「ちがくて……」
リーリは何か言おうと口を開きかけ、ちらと俺の背後――犬面の姿を確認してからふるふる

と首を左右に振った。
「なんでもない」
「お前、なんかこいつをビビらせるような事したのか？」
批難の感情を込めた目で見ると、犬面は誤解だと首を激しく左右に振る。
そしてリーリも「ちがくて」と力なく言うので、何が怖いのかについては、とりあえず追及しない事にした。
が、いつまでも衣装箱の中に入れておくわけにもいかない。
半ば無理やり引っ張り出して、再び俺の部屋に連れていく事にした。
豪華なベッドじゃ寝られないってのは俺も同じ気持ちなので、妥協案として部屋の片隅に麻の布を敷き、即席の寝床を作り上げる。
俺がそこに横たわると、ゼロが当然のような顔をして俺の腕の中にもぐりこんできた。
その状態でゼロが手招きすると、リーリもじりじりと近づいてきて、最終的にゼロの抱き枕と相成った。
「ああ、ついに我輩の野望がここに成就した……なんと暖かく、柔らかで、素晴らしい寝床だ。我輩、一生ここで眠り続けたい」
ゼロがリーリを抱きしめながら、もぞもぞと俺の腕の中で丸くなる。
リーリはしばらくキイキイと暴れていたが、気がつくと晩餐の時間まで二人揃って熟睡し

ていた。

そして夜。

あんなに楽しみにしてたってのに、アルバスは晩餐の席に姿を現さなかった。

犬面が「会議が長引くから先に食っててくれってさ」という伝言を運んできて、すぐに忙しそうに去っていったあたり、本当に忙しいんだろう。

「慌しい事この上ないな。食事すらまともにできぬとは」

「ま、お偉いさんなんだからしょうがねえさ」

食事は豪勢で、味も見事なもんだったが、旅の話を聞かせる対象であるアルバスがいないせいで、いまひとつ会話ははずまなかった。

神父も「情報を聞き出すべき相手が来ないのでは話になりません」とかなんとか言って早々に席を立っちまうし、リーリも居心地悪げにもぞもぞしている。

ゼロはそんなリーリにあれを食えこれを食えと食べ物をせっせと与え、「脂肪が増える事で抱き心地が増すのだ」といつも通りだ。

そしてふと俺を見て、

「君ももう少し脂肪をつけてもいいのだぞ。弾力のある筋肉も素晴らしいが、たっぷりと脂肪をつけた動物の柔らかさも我輩は嫌いではない」

と言う。
俺はぶよぶよに脂肪のついた自分の姿を想像し、そのあまりのだらしなさにげんなりとして食事を早々に切り上げた。

3

「というわけで、舞踏会の衣装合わせをしてもらわにゃならん」
翌朝。
相変わらずアルバスは忙しいらしく、朝食の席にも顔を出す事はなかった。
十三番について話したかったんだが、忙しいんじゃどうしようもない。俺達だけで勝手に十三番を探すかという流れになり、食事の席を立ちかけたとき、犬面が思い出したように妙な事を切り出した。
「衣装合わせって……いつもの格好じゃダメなのかよ」
「ダメに決まってんだろうが！　国内外の有力者を招待して開く舞踏会だぞ！」
「んな大事な場に俺達みたいなのを参加させようってのがそもそもの間違いだと思うが……大体、舞踏会なんてキラキラした場所に着ていける服なんて持ってねぇよ」
「と、思うじゃん？」

俺の言葉に、犬面はにたりと口角を吊り上げた。
「こんな事もあろうかと、お嬢さんが事前に泥闇と兄貴の服を仕立てさせておいたのさ！　製作期間およそ百日！　舞踏会の開催が決まったその日に〝ひょっとして、二人が戻ってくるかもしれないから〟って即座に発注をかけたお嬢さんの機転に怖れおののき涙しろ！」
高らかな宣言とともに、部屋の外に控えていた召使が服を捧げ持ってしずしずと入ってくる。
黒と紫の布地に宝石をちりばめたドレスはゼロ用だろう。だがまさか、あの見るからに窮屈そうな瑠璃色の一揃いは俺のじゃねえだろうな……？
「きっちり測って仕立てたわけじゃないから、まだ仮縫いなんだ。体に合わせてから本縫いするが、まあ三日もありゃどうにかなるだろう。神父様とリーリちゃんは予定外だが、神父様は既製品が着られるし、リーリちゃんは子供用の服をちと仕立て直せばいけそうだしな」
ぺらぺらと立て板に水でまくし立てる犬面は、いかにも服飾に詳しい色ボケ貴族らしい。
「我輩、動きにくい服は大嫌いだ。このままでいい」
「右に同じ」
俺とゼロが意見を同じにすると、なぜかリーリがぴんと耳と尻尾を立てて俺達を見た。
「え？　え？　いらないの？　なんで？　すごく綺麗なのに？　リーリ、着てるの見たいのに」
「お断りだ！　獣堕ちがあんなの着たって間抜けにしか見えねぇよ！」
俺が怒鳴ると犬面が露骨に嫌そうな顔をして俺を睨んだ。

「それはちょっと聞き捨てならねぇな。俺のこの優雅な着こなしを見てみろよ。純白の毛皮に深紅の上着――天然の毛皮を持って生まれた獣堕ちこそが、最高の洒落者であって羨望の眼差しを一身に集めるべき存在だと思わないか？」

「思わねぇなあ」

「いや一理ある。美しく着飾った傭兵の姿が見られると言うのなら、我輩もそれに付き合うのはやぶさかではないぞ」

「俺はそんな色ボケ狼に少しも共感しねえし、付き合っていただかなくて結構だ」

舌を出して断ると、ゼロが「なんだつまらない」と肩を竦める。

と、リーリがそんなゼロの服をくいくいと引っ張って、耳を貸せと訴えた。

言われるままに身をかがめたゼロに、リーリがひそひそと耳打ちする。

聞こえるかと思ったが、リーリが〝獣堕ちにも聞こえない声量〟を理解しているせいで何を話しているか分からなかった。しかも位置が悪くて唇が読めねぇ。

だというのにゼロはリーリの言葉を理解したらしく、ふむふむと頷いてから、なるほどなるほどと納得し、ちらと俺を見てから犬面に向き直った。

「気が変わった。我輩、その服を着ようではないか」

そうこなくっちゃ、と犬面が器用に指を鳴らす。俺は顎を落としてゼロを見た。

「は……はぁあぁ!?　おいなんだ突然、手のひら返しやがって！　おいチビお前、魔女に何を

吹き込みやがった……！」
「ないしょ」
そう言って、リーリは小さな両手でその口を押さえてみせる。
クソ、女二人はもうダメだ。こうなったら最後の手段に出るしかない。
「なあ神父、お前は反対だよなぁ」
「いえ、私は」
「賛成なのかよ!?」
「人が多く集まれば、それだけ情報も集めやすいですから。舞踏会ならば紛れやすいですし」
派手な事やきらびやかな茶番を嫌う性格だと思っていたが、そう言えば目的のためなら手段を選ばない性格だった。
これで三対一だ。犬面とアルバスを数に入れると五対一で、圧倒的に不利になる。
――だが、だからなんだってんだ？
多数決で競り負けようが、嫌なものは嫌だし、興味ないものは興味ない。
「勝手にしろ！　俺は絶対に着ないからな！」
言い捨てて、俺は足音も荒く一人部屋をあとにした。
大人気ない？
協調性がない？

自意識過剰？

なんと言われても結構だ。恥をかくのは慣れてるし、怯えや嘲笑にも慣れている。

だが、ゼロの前でそういう目線にさらされるのだけはどうしても避けたかった。

これは別に初々しい感情の機微とかじゃなく、ゼロの反応が心配だからだ。

過去に何度か、ゼロは俺の事で激怒して町を吹き飛ばそうとしたり、実際に町中で魔法をぶっぱなしたり、とにかく無茶をやらかした実績がある。仮に舞踏会の席で誰かが俺を嘲笑したら、ゼロがそいつに何をしでかすか分からない。

――なんて。

「これが自意識過剰以外のなんだってんだよなあ……」

廊下の半ばで足を止めて、俺は深く溜息を吐いた。

いつの間にか、ゼロから向けられる冗談じみた好意が当たり前になっている。なんの見返りも理由もなく、ただ好きだと言われる事に対する違和感と抵抗が、俺の中で少しずつ薄れていくのを意識した。

それを、俺は嫌だと思う。――もっと言えば、恐ろしいとすら思ってる。

それを当たり前だと思っていたら、失った時、俺はどうなる？

〝それが当然〟〝裏切られて当たり前〟――そう言って嘯いていられる自信が、気がつくとなくなりかけている。

「クソ……いつからこんな――」

「あれ……よーへいじゃん。一人で何してんの？　ホルデムに衣装合わせの話聞かなかった？」

駆け足で近づいてくる足音が聞こえたかと思うと、聴き慣れた子供の声が耳に飛び込んできて、俺ははっとして顔を上げた。

するとアルバスは俺の目の前で立ち止まり、はあはあと息を弾ませて笑顔を見せる。

「やぁっと仕事が一段落したんだ！　だから、二人の衣装合わせ見に行こうかなって。ゼロのドレス見た？　見たでしょ？　すっごい泥闇の魔女って感じじゃない？　って言うか、衣装合わせもう終わっちゃったの？　えー！　やだやだ僕も見たい！」

俺が何を言う間もなく一気にまくし立てて、アルバスはぐいと俺の腕を引っ張った。

「ねえ、もう一回着て見せてよ！」

「お断りだ！　っつーかまだ一回も着てねぇし、着る気もねえよ！」

ええ、とアルバスが不満げに目を見開いた。

「なんでよぉ！　絶対よーへいに似合うと思って作ったんだよ、あの服！　僕も特別な衣装用意してあるんだ。紺色に染めた絹のローブに、銀糸で細かく刺繍がしてあるの。すっごく高かったけど、陛下が地位のある人間はそれなりの服を着ろって――」

言いかけて、ふとアルバスの表情が曇る。
「……あの、死んじゃう前にね。そう言ってくれたんだ。僕、陛下の事大好きだったんだ。だから倒れたときも頑張って治そうとしたんだけど、治せなくて……」
「毒殺だったんだろ？　即死じゃなかったのか」
「倒れて七日は生き延びたんだ。毒の種類を特定しようとしたけど、ダメで。誰がやったのかも分からなくて……きっと十三番が……」
喋りながら、アルバスの表情はどんどん暗く、重くなっていく。
よくない空気を察して、俺は爪の先で軽くアルバスの額をつついた。
いて、と言って、ぼんやりと虚空を眺めていたアルバスの目が再びしっかりと俺を見る。
「な、何すんだよ……！」
「笑い話がひとつある。昔、王を毒殺した男を探して、百人の使用人が拷問にかけられた。宮廷医は毒物を特定できず、犯人も見つからない。遠方から呼び寄せられたお偉い医者は、遺体を調べてこう言った。〝健康な体のまま穏やかに身罷られた。これは王の寿命です〟ってな」
「……寿命……って……」
「死んだ国王はいくつだったんだ？」
「ろ、六十七歳……」
「思ってた以上にジジイだな……ならいつ死んでもおかしくない。お前ら魔女は長く生きるか

ら、普通の人間の寿命ってのにピンとこないだろうが、五十で死ぬ奴がざらにいるんだぞ」
「けど、陛下以外の王族だってみんな暗殺されたんだ！　陛下だって――」
「そっちの方は暗殺だろうよ。一国の王を殺すってのは、その他大勢の王族を殺すよりよっぽど厄介だぞ。しかも相手が六十七歳じゃ、毒殺するより自然に死ぬのを待った方が確実だし安全だ。しかも、王には偉大なるソーレナの血を引く主席魔法使いがついていて、たちまち毒を治しちまう。そんな状況で毒殺に踏み切る馬鹿がいるか？」
「でも……食事中に倒れて……宮廷医師が毒だって……」
「で、お前はなんでその医者の話を信じたんだ？」
「なんでって……」
「宮廷医師ってのは〝医者〟だろう？　で、お前は守護の章が得意な魔法使いだ。その宮廷医師の立場を危うくしてるのはどこのどいつだ？」
アルバスは目を見開いた。
何か言い返そうと口を開きかけ、しかし思い当たる事があるのか、どんどん不安そうな表情になってくる。
「……嘘ついたって事？　毒だって言えば、僕の立場が悪くなるから……？」
「可能性はあると思うがな。王宮なんてのは、陰謀やら策略やらが飯の数より多い場所だ。実際クレイオン共和国じゃ、守護の章を使う聖女が原因で職にあぶれる医者もいた。お前を陥れ

ようとしてる奴は国内にも多いって、犬面も言ってたがな」
「それは……そうだけど……！　もし毒殺だったら？　悔しいけど、十三番だったら僕を出し抜くくらい簡単だ。痕跡が残らない毒なんて、十三番ならきっと簡単に作れるし……」
「じゃ寿命だったら？　十三番は濡れ衣だぞ。確証もないのに憶測だけで殺すってのは、お前が一番嫌いなやり方じゃなかったか？」
「それは……！」
アルバスの祖母、ソーレナは冤罪で殺された。
民を救うために魔術を使い、その民に〝疫病を広めた〟と誤解されて殺されたのだ。
「ど……毒殺の事は違うかもしれない。けど、十三番が殿下をどこかに閉じ込めてるのは間違いないんだ！　殿下は国の事を思ってた。陛下の崩御を知って、駆けつけないはずないもん」
「俺だって完全にシロとは言ってねぇよ。〈不完全なる数字〉と繋がりもあるみてぇだしな……なんにせよ、とっ捕まえて絞り上げる必要がある。ただ、なんでもかんでも十三番のせいにしてる暇があったら、きちんと敵と味方を見分けろっつってんだ」
ガスガスと爪でアルバスをつつき回すと、アルバスは痛い痛いと文句を言って頭を庇う。
「やめろよ、もー！　そんな爪でガスガスやられたら怪我するだろ！　僕！　偉い人！」
「あーそーへーぇ？　偉いなら偉いなりの分別ってもんを身につけていただきたいもんですがねぇー」

「僕だって一生懸命やってるの！　なんだよ、人の気も知らないで！」
俺の手を乱暴に振り払い、アルバスはいかにもガキっぽく頬を膨らませた。
それから、
「ね……よーへい」
と急に俯いて、妙に気弱な声を出す。
「よーへいは……僕の味方だよね……？」
俯いているアルバスの表情は見えないが、その声は弱々しく頼りなげだ。
――なるほど、確かにまだまだ、見た目通りのガキだ。
人より少しばかり頭がよくて、魔術の知識があって、魔法が使えるだけで、リーリよりもいくつか若い。
「……お前、初対面のときもその質問してなかったか？　そんで勝手に味方って勘違いして、まんまと俺達を隠れ家に案内したよな」
迂闊すぎるぞ、と説教気味に言うと、アルバスはきっと俺を睨みつける。
「だってあのときはゼロが魔法を使ったから、きっと仲間なんだって……！」
「そういう事だ。敵は嘘を吐く。質問なんざなんの意味もねえ。敵か味方かくらい、自分で判断しろ。俺が〝そうだ〟と答えたところで、本当のところはどうか分かりゃしないだろう」
アルバスは白い頬を丸く膨らませて、「お説教なんて聞きたくないんだよ」と吐き捨てる。

俺はそんなアルバスをじっと見下ろし、

「まあ、お前がどうあれ、俺は味方のつもりだがな」

と、できるだけなんて事のないように静かに言った。

敵と味方は自分で見分ける必要がある——それでも、無条件に「味方」だと言ってもらいたい事があるし、言われて安堵する事もある。

アルバスは俺の言葉に、再会して初めて、緊張の取れた自然な笑みを浮かべた。

それから、

「だったらお願い！　あの服着てるとこ見せて！」

とまったく脈絡のない事を言う。

俺はそっと拳をアルバスの顔の位置まで持ち上げ、

「それとこれとは話が別だ！」

とその額を爪の先で弾いた。

4

食い下がるアルバスを無理やり引き剝がし、自室に逃げ込んでしばらくすると、ゼロが両腕に大量の果物を抱えてふらりと戻ってきた。

「なんだそりゃ？」
と聞くと、
「我輩への貢ぎ物だ。衣装合わせの最中に、気がつくと傍に積み上がっていた。我輩に魅せられた召使どもが、頼みもしないのに次々と用意したらしい。まだまだあったのだがすべては持ちきれないので、気に入ったものだけをこうして頂戴してきた」
と平然として答える。
「相変わらず暴力的な美貌を振りまいていらっしゃるようだな」
吐き捨てると、「美しさとはまさに罪だ」とゼロは悪びれる様子もない。
熟れた果実を投げ渡されて、俺は礼も言わずにかじりついた。それは値段の想像がつかないほど甘くて瑞々しく、逆に渋い顔になる。
「お前一人か？　チビはどうした」
「逃げ回っている」
「はん？」
「我輩や君が美しく装うのは大いに賛成のようだが、自分が美しい装いをさせられるのは恐ろしいようだ。神父の寸法を早々に測り終え、次はネズミのの番だと犬が幼子用のドレスを並べたら、全身の毛を逆立てて部屋を飛び出していった」
それを犬面が追いかけ回し、無理やりドレスを選ばせようとしているらしい。

想像して、俺は憐れみと共感を込めて小さく吹き出した。
「見逃してやれよ。ネズミがドレスなんて着てみろ、どんな嘲笑が飛んでくるか分かったもんじゃねえ。俺も同じだ――笑われるだけだよ。表立っては素知らぬ顔で通すかもしれねぇが、裏では間違いなく物笑いだ」
「我輩は笑わない」
「だからお前は例外で――」
「我輩だけでは不満か？」
見下ろすと、ゼロの強い眼差しが俺の目を射すくめた。
慌てて目を逸らし――そればかりか背まで向けて、俺は窓の外を見る。
「だからそういう問題じゃなくてだな……仮に舞踏会で誰かが俺を罵倒したら、お前またブチ切れて暴れるだろうが」
「無論だ。連れを侮辱されて笑って許せるほど、我輩は寛大ではない」
「だからそれが問題なんだよ！　お前が暴れたら坊主が困るだろうが」
「では、我輩が暴れぬように招待客に礼儀を徹底させておく必要があるだろうな。場の調和を保つために無礼と悪意を見逃せとは言わせない」
自分が我慢する――という選択肢はないらしい。
ったく、魔女と獣堕ちが舞踏会なんぞに参加したところで、面倒な事にしかならないとこ

いつだって分かってるはずなのに、なんでいきなり参加するなんて言い出したやら――。
「……チビに何を言われたんだ？」
「うん？」
「興味なさそうだったのに、チビに何か言われて考えを変えただろう」
ああ、それかとゼロは笑った。
「ネズミのの両親の話を聞いた。睦まじい夫婦だったのは君も覚えているだろう？」
「あの、負けん気の強い女房と、お人好しの夫な」
「そう……その二人だ。あの妻は、二人が出会った記念の日に美しく着飾るのだという。夫にだけその姿を見せ、夫はその姿に魅入る。まるで野生動物の求愛行動ではないか。我輩が美しく装えば、きっと君は喜ぶと――そうネズミのは言っていた。我輩はすでに美しいが、君のために着飾るというのは、きっととても楽しい」
ゼロは柔らかく目を細め、まるで愛しいものを見るように俺を見る。
――これに。
俺は一体どう反応すりゃいいんだ？
一体なんて答えりゃいい。
かろうじて口から出たのは「馬鹿野郎」という罵り声で、その声にも覇気がない。
「そ、そんなんで喜ぶわけねぇだろうが……！　たかが服だぞ。なんだっていい」

「いいのだ。君が喜ばなくとも、我輩は君のために美しい服を着よう。この体を宝石で飾ろう。赤い唇になお赤い紅を引き、白い肌に血を通わせる朱を乗せる。想像してみろ、傭兵。その我輩が、君を唯一の友と呼び、誰よりも心を許し、額を寄せ合い談笑する――その姿を見て、人は笑うか？　誰もが君を羨望の目で見るだろう。そしてそのとき、多くの人々がようやく偏見で濁った目をこすり、君という存在の美しさに気づくのだ」

――この、自分自身の美貌に対する自信はどうだ。

そして、それを自信過剰だと笑えないほどの美貌を、ゼロは確かに持っている。

気がつくと、ゼロの両腕が俺の頬に伸びていた。

かがめと言うのでその通りにすると、ゼロは俺の額に自分の額を押しつけてきた。

「君が嫌ならば、他の者にその姿を見せる必要はない。ただ我輩は、我輩のために着飾った君が見たいと思う。わっぱの用意したあの衣装は、きっと君の白い毛皮を映えさせる。――ああ、そう。きっと、人である君の姿にも似合うだろう。あれは〝君に〟似合うのだ。わっぱも立派に魔女という事だな。きちんと君の姿が見えている」

魔女には、獣堕ちの本来の姿が見えるのだという。――つまり、俺の人間の姿が見えている。

俺自身が一度も見た事のないその姿を、ゼロやアルバスが知っているというのは、なんとも妙な感覚だった。

「……なあ、魔女」
「なんだ？　傭兵」
「お前は……どっちが好きなんだ？　化物の俺と……人間の俺と」
ゼロは笑った。押しつけ合った額が小さく揺れて、ゼロの青紫色の目がじっと俺の目を覗き込む。
「君は我輩に、海と波のどちらが好きかと問うのか？　どちらも君だ。ならば我輩はどちらも好きだ。君が獣の戦士だろうと、無力な人間だろうと、毛並みが赤かろうと、黒かろうと、ハゲ頭だろうと、髭面だろうとどうでもいい。君は見た目にこだわりすぎる。どんな姿だろうと君は君だ。――そうだろう？」
そうだろう？　と聞かれたところで、俺にはよく分からない。
一年前、ゼロに「人間に戻りたいのかと」と聞かれたとき、俺はなんの躊躇もなく戻りたいと思った。だがゼロが――俺がどんな姿だろうと気にしない〝誰か〟がいるとしたら？
宿屋の下男の言葉が頭にちらついた。
人間の姿に戻ったとき、違和感に戸惑ったと。今までできた事ができなくなり、戦う力も失う事になる。
それらを犠牲にしてでも俺が欲しかったものを、ひょっとしたらゼロは俺に差し出しているんじゃないのか。

一年前、俺を蝕んでいた食人衝動が気がつけば消えていた。〝人に戻りたいと願うほどに獣に堕ちる〟――それが真実なら、俺は人に戻る事をもう望んでいないって事なのか？

「どうした、傭兵。そんな思いつめた顔をして。愛の告白ならば、聞く用意はいつでもあるぞ」

からかうように笑ったゼロに、俺は顰め面でゆるゆると左右に首を振る。

「見た目がどうでもいいと思うなら、別に俺が何を着てたっていいじゃねえかと思ってな」

「では君は、我輩が全裸でも構わないのか？」

「着るものの話をしてるんであって、着てる事は最低限の大前提だろうが！」

吠えると、ゼロは楽しげに笑った。

体温がするりと離れていって、とん、と胸に人差し指を突き立てられる。

「無論我輩は、君が全裸でもかまわない。だが、時には新鮮な装いの君が見たいと思う。これは我輩のわがままのなかでは、極めて穏やかな方だと思うがな」

「普段、無茶なわがままを言っている自覚はあったんだな……」

「欲望に忠実である事は魔女の美徳だ」

なぜか自慢げなゼロの態度に、俺の方は肩を落とす。

しかしまあ――確かに、たかが服を着るだけだ。

ゼロの前だけでいいなら嘲笑される心配もないだろうし、ついでにアルバスにも見せてやればちったぁ機嫌もよくなるだろう。

ほんの少し窮屈なのを我慢するだけでいいなら、してやってもいいかもしれない。
などと、俺が思い始めたそのときだった。
「恥も外聞もなくいちゃついているところすみませんが、切りがいいところで一旦中断していただけますか？　重要な話がありますので」
そんな言葉とともに、蹴り開けるような勢いで部屋の戸が開き、神父がずかずかと入ってくる。
思わず飛び上がって全身の毛を逆立てた俺には目もくれず、神父は長い脚を組んで手近な椅子に腰を下ろした。
「お、おま……お前まさか……いいい、今の聞いて……！　いつから部屋の外にいたんだ!?」
「〝どっちが好きなんだ〟辺りですかね」
「うをぁあぁやめろ忘れろ聞かなかった事にしろ！　立ち聞きなんて趣味悪いぞてめぇ！　なんでその場で入ってこなかったんだよ！」
「私もあの場で会話を中断させるほど無粋ではありませんから……」
「さすがだ神父。君は気遣いのできる男だな」
「おいこら魔女てめぇ！　なんでそいつを褒めてんだ！　この状況でどうして褒めるって発想が出てくるんだ!?」
恥ずかしすぎて全身から血の汗が滲み出そうだった。

鋭く研いだ爪で喉をかきむしって自害したい。
あるいは神父を殺してすべてをなかった事にしたい。
だが俺のそんな願望などお構いなしに、ゼロも神父も平然としたものだ。
「そう恥ずかしがる事もないだろう。我輩と君の仲ではないか」
「どういう仲だよ！　特にどんな仲でもねぇよ！」
「と言うか、普段からあんなにベタベタしていながら、何を今更という感じなんですが……」
「ベタベタなんざしてねぇ！　断じてしてねぇぞ！」
歩くのが面倒だって言うから抱えて歩いてやったり、同じ寝床で寝たりはしてるが、そっちの方がいろいろ都合がいいからであって、別にいちゃついてるわけじゃねぇ――と思う。いや客観的に見るとかなりアレだが、主観的に言えば〝必要に迫られて〟だ。
あとはゼロのわがままとか……とにかく俺のせいじゃねぇ！
だが神父は俺の必死の主張を一笑に付し、
「そんな事はどうでもいいんです」
と切り捨てた。
ゼロまでそれに乗っかって、
「重要な話とは？」
と平然と話を進めようとする。

こうなってくると、俺だけいつまでも、振り下ろしどころのない拳を握り締めて立ち尽くしているわけにもいかない。

言いたい事はおおいにあるし、なんならリーリよろしく部屋から飛び出しちまいたい気分だが、歯を食いしばってどうにか堪えた。

そして、

「あのアルバスという魔女……あまり慕われてはいないようですね」

という神父の言葉に、食いしばっていた歯も緩む。

は？　と間抜けに聞き返すと、神父は城のあちこちで集めてきたアルバスの悪評を色々と並べ立て始めた。

曰く――。

アルバスは国王を暗殺し、国の乗っ取りを計っている。

十三番が実は死んでいなかった。きっとアルバスと十三番は繋がっていて、一年前の火刑も国王に取り入るための茶番だったに違いない。

魔法の才能のない人間をゴミのように扱っている。

城の内部の者が教会信者だとバレると、見せしめに投獄される。

自分より才能のある者には、魔法の使用を〈許可〉しない。

大勢の獣堕ちを閉じ込めて、魔法の贄としてその皮膚や皮を生きたまま剝いでいる。

などなど、挙げ連ねれば切りがない。

「ただの陰口じゃねえか」

「十三番の火刑が茶番だったのは事実だがな」

「魔女を擁護するつもりはありませんが、悪意を持って見れば、正当な行動も邪悪な行動に見えてくる。つまりこういう悪評が立つほどに、あの魔女は疎まれているという事です。――そして、それはそのまま暗殺の計画へと繋がる」

「――なんだと!?　おい、確かなのかそりゃ！」

「目立ちたくなかったので詳しい計画は聞けませんでしたが、舞踏会の日を狙っているのは間違いなさそうです。外部の人間が城に招かれる唯一の機会ですし、大勢の前で主席魔法使いが暗殺されれば秘匿のしようもない」

俺はゼロと顔を見合わせた。

そうしてアルバスの死が国中――そして世界中に知れ渡れば、かなりまずい事になる。

ウェニアス王国の魔法使いを抑えている結界は消え、その魔法使いを統率する者は誰もいない上に、国王も死んでいるという状況だ。

「――それを、なぜ我輩達に？　わっぱの死は、教会としては望むところだろう」

「分かっていませんね。魔女を倒すのは教会でなければならない。なぜならば、魔女を倒したのちに起こる混乱を抑えられるのは、世界のどこを探しても教会以外にありえないからです。そして教会の見解――すなわち私個人の意見としては、今はまだウェニアスの魔女を倒すべき時ではない」

準備が整っていませんからね、という神父の言葉に、いかにもそうだとゼロは頷く。

「ならば我輩達でどうにかせねばなるまい。首謀者が分からない以上、できる事はわっぱを守ってやる事くらいだろう」

「いっそ舞踏会中止にすりゃいいじゃねえか……」

「馬鹿の自覚がないなら――」

「はいはい分かってるよ！　中止するなんざ無理だよ、無理ですよ！　分かってるからいちいち杖で脅すのをやめろ殺人神父！」

金と時間と人員を使って準備した、政治的にも意味のある舞踏会だ。今更中止になんぞできるわけがない。

だが、相手がどこの誰かも、どこから狙ってくるのかも、本当に暗殺計画があるのかも分からない。そんな状況で〝守る〟と言ったら、結局〝アルバスに張りつく〟以外にない。

察して、俺は鼻の頭に皺を寄せた。

ゼロも察して、にっこりと俺を見る。

そして神父は立ち上がり、部屋の戸を開けて俺を促した。

「衣装合わせが必要でしょう。まさかその格好で、国の権力者の護衛につくわけにもいかないでしょうからね」

【幕間　自由へ】

狭苦しい檻に、一匹の化物が押し込められていた。
鎖で縛られ、轡をはめられ、身動きも取れない。
光の届かない部屋には血と糞尿の悪臭が立ち込め、周囲では同じ境遇の者どもが呻き、もがき、身悶えする音が絶え間なく聞こえてくる。
なぜ自分がここにいるのか、なぜこんなにも苦しいのか、化物には理解ができなかった。
過去には人の言葉を話し、誰かに恋をした事だってあるのだと、思い出しもしなかった。
恋焦がれた相手に拒絶され、恐れられ、罵られ、傷つけられ、絶望し——何もかもを呪った過去さえ、もう夢に見る事もない。
ただ苦痛だけが——どうしようもない飢えと渇望だけが腹の奥で渦巻き、煮え立ち、息もできないほどだった。
人が。

ただ、人が欲しくて仕方がなかった。
あの滑らかな皮膚が、柔らかな肉が、暖かな血が、欲しくて欲しくてたまらない。
助けてと、悲鳴を上げる声が聞きたくてたまらなかった。
懇願――ああ、懇願が。
人間としてなど少しも認めてくれなかったくせに、最後の時になって「助けて、あなたも人間でしょう」と叫ぶ声が、唯一、人としての自我を失った獣の意識に安らぎを与えてくれる。
そして人の血をすすり、肉を食らう事だけが、人の暖かさを与えてくれる。
体を揺らすと、ギシギシと鎖が軋んだ。
この鎖さえなければ――檻さえなければ、檻さえなければ。

チャリリ、と。

音がしたのはそのときだった。
光が細く差し込んで、床に落ちた〝それ〟をキラキラと輝かせている。
それは鍵だった。
鎖の、檻の、檻の――殺戮の自由への鍵だった。

三章　魔女と獣の舞踏会

1

舞踏会っつーのは、つまりは貴族の社交の場だ。

それは政治の場であり、恋愛の場であり、美食の場であるわけだが、俺のような庶民より程度の低い存在の目から見れば、はっきり言って〝贅沢〟の場でしかない。

会場は城の一室——巨大な長方形の広間だった。

部屋の中心は踊れるように広く空間が取られており、壁に沿うようにして円形の食卓が並べられている。

食卓に載っている料理はどれも料理人が趣向を凝らした一品で、果物で飛び立つ鳥の姿を作り上げていたり、菓子で城の形が作られていたりと様々だ。

天井から吊り下げられ巨大な花形の装飾灯は、無数の蠟燭でギラギラと輝いているし、その光に照らされた招待客の衣装も負けず劣らず眩しいばかりだ。

そして俺はと言えば、そんな大広間の入口の前で、ゼロとアルバスとリーリとともに、なんとも言えない表情で突っ立っている。

「本当にここに入ってくのか……？　俺が……？　正直言って坊主の護衛なんざ、魔女一人いれば十分じゃねえか？」

思わず愚痴っぽく呟くと、アルバスが「まだ言うの？」と俺を睨む。
「そんな事言って、ゼロが食べ物に気を取られてる隙に僕が暗殺されちゃったらどうするんだよ！　そしたらよーへいのせいだからね」
そんな馬鹿な事があるわけないだろう――と、微妙に言い切れないのが辛いところだ。
だがもしそうなったとしても、それは俺じゃなくてゼロのせいだと思うんだが……。
「っつーか、そもそも犬面の仕事じゃねえのか、これ」
「ホルデムは外の警備で忙しいの！　僕だけじゃなくて、招待客全員の安全を確保しなきゃいけないんだから。どっちにしろ、傭兵には広間にいてもらわなきゃダメなんだから、今更ぐだぐだ言わないでよ」
「そりゃいつもの格好でいいなら、護衛くらいいくらでもするけどよ……」
この窮屈極まりない格好じゃ、護衛どころか歩くのだって億劫だ。
アルバスはいつもの魔術師ローブがちょっと高級になったって感じだが、俺はこんな体を締めつけるような無数のボタンやら、邪魔な紐飾りやら、鬱陶しく長い裾に慣れてない。
今すぐにでも脱ぎ捨てたいし、許されるなら破きたい。――が、この服の金額を考えるとそれもできない小心者だ。だからこそ余計に早く解放されたい。
「諦めろ、傭兵。それが一種の拘束具で、ここが危険な戦場だと思えば、いくらか肝も据わるのではないか？」

くすくすとゼロが笑うが、その姿をまともに視界に入れる事はできなかった。
美しさも過ぎれば毒だと常々思っているが、最近は随分慣れてきた——と、思っていたところにこのドレスだ。
繊細な銀の刺繍が施された漆黒の布地は、ゼロの胸から腰にかけてをぴったりと覆ってその体の線を無駄に浮き立たせていた。
腰から下は少し膨らみがあって体の線は分からないが、裾は引きずるほど長いくせに、動きにくさを嫌うゼロのために、スカートの前部は膝の下までしかない。
顔は黒いベールでその半分を隠しているが、真っ赤に紅を引いた唇が逆に目立って、ますます目のやり場に困る。
その姿は、一言で言って〝魔女〟だった。
ゼロから目を逸らして足元を見ると、薄緋色のドレスを着て小刻みに震えているリーリの姿が目に入る。
結局無理やりドレスを着せられたが、自分では脱ぐ事もできず、ドレスを汚すのが恐ろしくて物置に逃げ込む事もできなくなり、仕方なく俺達についてきたという状況だった。
先程から身の置き場に困り果て、「あう、あうう」とわけの分からない声を発しながら俺の足にしがみついたり、離れたりを繰り返している。
こいつ、ほっといたら緊張で死ぬんじゃねえのか……。

「傭兵」
「あん？」
「ん」
ゼロが俺に両腕を突き出した。抱き上げろ、という事だが――まあ、そっちの方が俺としても都合がいいか。抱き上げると、逆に近すぎてその姿が視界に入らなくなるからな。
ご命令通りにゼロを肩に抱え上げると、リーリがはっと顔を上げ、「リーリも」と必死に俺に訴えた。
「お前を抱えると両腕が塞がるんだが……」
いつもは首の後ろ辺りにひっつけておけるが、今のリーリはドレスが邪魔だ。
「邪魔んなったら落としていいから！　リーリも……！　お願いお兄ちゃん……！」
ゼロとアルバスの視線がじっと俺に突き刺さる。
なんだよ、これを断ったら俺が完全にクズ野郎じゃねえか。
仕方なくリーリも抱え上げると、リーリはようやく安堵したように息を吐く。
「これじゃ護衛っつーか、荷運びって感じだな……ってか、護衛って意味で考えたら坊主を抱えるのが一番じゃねえか？」
はっとアルバスが目を見開き、チッとゼロが舌打ちする。
「そうだよゼロ！　ねぇそこ代わってよ！」

「我輩もそうしてやりたいのは山々だが、主席魔法使いともあろう御方が、よもや獣堕ちの肩に抱えられて登場するわけにはいかぬだろう？　その足で堂々と会場に入る事こそ、最も威厳のある登場の仕方だとは思わないか」

「アホやってないでとっとと入れよ。招待客がお待ちかねだ」

両腕が塞がっているので、尻尾でアルバスの尻を叩く。

するとアルバスは痛くもないのに「痛いなあ」と文句を言い、一つ、大きく深呼吸した。

「――行くよ」

そして、大広間への扉が開かれる。

その瞬間、眩しいほどの光が一気に襲いかかってきた。――そして、注がれる視線、視線、また視線。

広間の入口は会場より一段高くなっていて、入場した人間の姿が広間の連中からよく見える。

こんなに注目されたのは、いつか港町イデアベルナで公開処刑にされたとき以来だ。

好奇心、へつらい、悪意、恐怖――あらゆる感情が混ざり合い、波のように襲いかかってくる。その感情の重圧に思わず下がりそうになったが、まっすぐに前を見て、一歩も退かないアルバスを見て踏みとどまる。

どうやら、これが今のアルバスの世界らしい。

「こいつぁ……すげぇな……」

「うむ、なかなか壮観だ」
「でしょ？　僕も初めて演説したときは足が震えたし、正直今も結構我慢してる」
リーリはすでに半泣きで、俺の腕に顔を埋めてなるべく見られないようにしている。
アルバスが一歩前に出て、静かに片手を上げると、広間のざわめきが収まった。
完全な静寂を待ってしばし――アルバスが口を開く。

「今生を終えられ、清き魂の姿となられた我が王に変わり、主席魔法使いである私がご挨拶申し上げる。国内外の区別を問わず、みなさまようこそおいでくださいました。魔法使いと人々の共存を祝い、そして願い、また今後の争いを厭うこの集いへの招待に、多くの方々に応じていただけた事は恐悦至極にございます。我が国は王を失い、混乱の只中にあると言えるでしょう。しかし間もなく混乱は去り、さらなる平穏と繁栄が訪れる事を疑ってはおりません。本日はみなさま、どうぞ心ゆくまでお楽しみください」

長い裾をはためかせ、大きく振り上げた腕を胸に当てる。と同時に片足を後ろに滑らせて腰を折り、アルバスは完璧な礼をとってみせた。
なかなかどうして、堂々としたもんだ。
広間の招待客達はお互いに顔を見合わせ、どう反応すべきかをうかがっている。

沈黙はしばし——誰かが拍手をしたのをきっかけに、拍手と称賛の声が広間を満たす。

本当なら、この時点で引っ込んじまえば暗殺される心配もないんだが——まあ、遠方からお偉方を呼び出しておいて、早々に引っ込んじまうわけにもいくまい。

広間に降りる段階になって、いよいよリーリの恐怖と緊張が頂点に達し、俺の腕の間に頭を突っ込むようにしてピクリとも動かなくなった。

「そうしていると、まるで君が可愛らしいぬいぐるみを抱えているようだな」

クスクスとゼロが笑い、俺はやれやれと天井を仰ぐ。仰いだところで、やたら豪勢な装飾灯が目に入るだけで俺の気はまったく晴れない。

「なんか、そうなっちゃうの見てると、無理やり参加させて可哀想だったかなって気になってくるね……ねえ、美味しいお菓子とかあるよ？　食べない？　取ってあげようか？」

アルバスがリーリの機嫌を取ろうと、果物のたっぷり入った焼き菓子をちらつかせる。するとリーリは一瞬だけ顔を上げ、目にも留まらぬ速さで焼き菓子を奪って口に放り込み、またすぐに俺の腕の間に頭を突っ込んだ。

「今のすげーネズミっぽかったぞ……」

「ネズミだもん」

俺が低く呟くと、低くくぐもった声が返ってくる。

「ね、ね、今のもう一回やって！　ほらほら、お菓子だよー」

「構いすぎるな、二人とも。ネズミのは臆病であるからこそ、危機や異変にいち早く気がつける。そうして傭兵に抱えられているだけでも、ネズミのは護衛として十分に役立っている」

言いながら、ゼロはアルバスの手から焼き菓子をひょいと取り上げ、自分の口に押し込んだ。

「そっかぁ……じゃあ、危なくなったら教えてね、リーリちゃん」

アルバスの言葉に、リーリは「キィ」と不満げに鳴いて答える。

ゼロは積み上げられた菓子の塔に何気なく手を伸ばし、そのてっぺんに乗っかっていた焼き菓子を二つ取ると、一つを自分の口に押し込み、もう一つを俺の口に押し込んだ。

しかし広間に降りてしばらく待っても、誰も彼もが遠巻きに眺めるだけで、誰も近づいてこようとしなかった。

俺が護衛についてるせいか、それとも俺が抱えてるゼロの禍々しい美貌に恐れをなしているのか――。

アルバスはちょっと顔を顰めて、

「これはこれでちょっと困ったな」

と唇を尖らせた。

いくら暗殺を警戒しているとはいえ、せっかく国内外の権力者との結束を深めようと思っているのに、怯えて近づいてきてもらえないのは差し障りがある。

そこに、一人の猛者が現れた。

ずかずかと、図々しいほどに尊大な足音が、人の波の向こうから一直線にこちらに歩み寄ってくる。がっしりとした体格をした白髪の男で、頭一つ抜けた長身がよく目立つ。

「どうも失礼。主席魔法使い殿に御用がないなら、通して頂けるかな？　ああどうも、いやはや、図体ばかり大きくて申しわけない。おっと失礼、小男君。小さすぎて見えなかった」

などと言いながら他の客を押しのけて歩く姿は、人の波を縫うというより、波をかき分けてという表現の方が正しいだろう。

男は葡萄酒のグラスを片手に俺達の前に躍り出ると、アルバスを見るなり顔全体で大げさに好意的な笑みを見せた。

「ようやくお目にかかれましたな！　ウェニアス王国の主席魔法使い――詠月の魔女アルバス殿！　噂通り、お若いながらに堂々としておられる」

手にしたグラスを給仕に優雅に押しつけ、男はしっかとアルバスの両手を掴むと、その手に唇を押しつけた。

「あと十年したら、ぜひ立場を忘れて個人的なお付き合いを請いたいところですが――私のようなジジイでは、かように若く美しい魔女殿とは釣り合いが取れませんかな」

ついでに完璧な仕草で片目を瞑るのも忘れない、絵に描いたような女たらしだ。そして俺は、どういうわけかこの女たらしに見覚えがあった。

見間違いだろうと思ったが、ここまできたらもう間違いない。

「い……イデアベルナのエロ領主!?」
「〝様〟をつけてくれても構わないのだぞ、モフモフ君」
俺が素っ頓狂な声を上げると、長身のジジイはそう言って闊達に笑った。
クレイオン共和国一の港町――イデアベルナの領主トーレス・ナダ・ガディオ。
「なんでてめぇがここにいるんだよ！」
「何をとんちんかんな事を言っとるんだ、君は。頭の中まで毛玉になったのか？　招待されたから決まっているだろう」
私は権力者だからな、と胸を張るその傲岸不遜さは、相変わらず清々しいほど嫌味がない。
すると、ゼロが何かに気づいたようにぽんと手の平を拳で打った。
「犬のがクレイオンから要人を警護してきたと話していたか――なるほど、君だったか」
「いかにも、いかにも。こう言ってはなんですが、おそらくこの会場でもっとも地位のある男は私で間違いないでしょう。ゆえに、主席魔法使い殿も特別に護衛を出してくださった。何せ私は――クレイオンの次期元首ですからな」
最後の方は、声を潜めてヒソヒソと囁いた。
決まったのか？　と目だけで聞くと、根回しは完璧だ、とばかりに満面の笑みが返ってくる。
「しかし遠目で見たときはまさかと思ったが……こんなところで旧友に再会できるとは、にわかには信じ難い僥倖だ。いや、その肩にて我らを睥睨する、悪魔の如き絶世の美女をこうし

て目の当たりにしてしまえば、もはやこの奇跡を疑いようもない。ああ――ゼロ殿。あなたは相変わらず、凪いだ海に揺らぐ月のように美しい」

「久しいな、領主よ。君も相変わらずのようだ」

ゼロが静かに片手を伸ばすと、領主はその手をとってうやうやしく口づけする。

「ちょ……ちょっと待ってよ三人とも！　な、なになに？　なんなの？　なんでイデアベルナの領主様と、よーへい達が知り合いなわけ？　そんなの報告に書いてなかったじゃんか！」

「そりゃまあ……書かなかったからな」

「なんで書かないんだよそんな大事な事をさぁ！」

がしがしと髪を掻きむしって怒るアルバスの姿には、一瞬前までの国家魔法使いとしての威厳はどこにもない。

領主はそんなアルバスを興味深そうに見つめ、「思っていたよりかわいい子じゃないか」と独り言を呟いた。

それから、怒っているアルバスの肩をちょんとつついて、にっこりと笑みを浮かべる。

「いや失礼。お二人からアルバス殿の話はうかがっておりましたので、こちらからご連絡申し上げるべきでしたが――何分、教会の目が恐ろしいので少々手間取りましてな」

最後の方は声を落として、ぼそぼそとアルバスの耳に囁く。わざとらしく周囲を気にする様子を見せてはいるが、どうせこの男の事だ、この場にいても教会に睨まれない大義名分くらい

はきっちり用意してあるだろう。

そして、案の定――。

「私も本来ならご招待に応じるのは難しい立場なのですが――少々根回しを頑張りましてな。教会からの要請を取りつけて、敵情視察という大義名分のもとようやくこうしてお会いできた。そもそも運送業で食っている我が国にとって、陸路の要でもあるウェニアス王国との繋がりは失いがたいですからな」

やっぱりな。

何も考えてないようでいて、まったく抜け目のねぇ男だ。

「申しわけないけど、敵情として視察できるようなものは何もないよ。ウェニアスの内情は、どうせ国内に残ってる教会信者を通してつつ抜けだろうし……せめて、魔女の秘密の一つでも差し出せれば、少しはお役に立てるんだろうけどさ」

アルバスが苦笑いを浮かべると、領主は胸を反らしてははは と笑う。

「さすがは魔女殿。お若いのに、まるで年経た宰相のような事をおっしゃる。なに、私もこう見えてなかなかにやり手です。情報の横流しなどしていただかなくても、口八丁で乗り切ってみせましょうとも」

「――それはどうでしょうね」

ひやりとした硬い声がごく至近距離から聞こえ、領主は「うを」と声を上げて飛び上がった。

何かと思えば給仕の男で――誰かと思えば殺人神父だ。
姿が見えないと思ってたが、こいつ給仕に化けてたのか。
「お久しぶりです、領主殿。――ご覧の通り、私が教会の目としてこの場にいますので、あまり適当なご報告をなさいますと、逆に立場を悪くする事になるかと思いますが」
珍しく、神父の態度が〝普通の人間〟相手にしては冷ややかだ。
それで俺は、前に領主が神父を中傷し、食堂から追い出した事件を思い出す。
領主もしっかりと覚えていたらしく、神父の言葉を挑戦的な笑みで迎え撃った。
「これはこれは……いつぞやの〝盲目の神父〟殿ではありませんか。たまさかご一緒させていただいた食事の席で、少々口が過ぎた事への仕返しですかな？　よもや神の使徒ともあろうお方が、そこまで狭量ではありますまい！」
「仕返しなど、何も。私はただ、私の任務を遂行しているに過ぎません」
「ならば私も私の仕事をいたしましょう。私と私の民の利益を追求するという仕事をですがな。さて私の言葉と、神父殿の言葉と――教会上層部がより重要だと感じるのはどちらか、一つ勝負といきますか」
「よすのだ、領主」
ぱん、とゼロの手が領主の頭を軽く叩いた。
俺に抱えられているおかげで、ゼロでも大柄な領主の頭を簡単に叩ける。

領主は不意に叩かれた頭を押さえ、目をぱちくりさせてゼロを見た。
「〝利害の一致〟という複雑怪奇な事情があって、その神父は今、我輩達の仲間だ。仮にその神父の立場が悪くなれば、我輩達も少々困る」
なんと、と領主は目を見開いた。
「魔女と神父が手を組むとは……面白い！　見直しましたぞ、神父殿！　あなたがそれほど柔軟性のある性格をお持ちとは！」
笑って、領主はばんばんと神父の背中を叩く。
神父は迷惑そうにその手を振り払い、
「とにかく、神の名に恥じる行為はお控え願います」
とだけ言い残して再び人の波に紛れていった。
基本的に、あの神父は翠髪、眼帯、杖と目立つ要素の集合体のはずなんだが、地味な給仕のお仕着せがしっくりと似合っていて、周囲にまるで存在を意識させない。
はあ、とアルバスが、どことなく感心したように息を吐く。
「なんかあの神父様、ちょっと魔術師っぽいよね。性格的にって言うか、才能あると思うよ。たぶん、守護の章以外だけど……」
「本人の前では言うなよ、坊主。大鎌で首を切り落とされるぞ……」
そういや、もう一人存在を意識させない奴がいるなと思い、俺は腕の中のリーリに視線を落

とした。
随分前から、リーリは一言も喋ってないし、ピクリとも動いていない。
まさか眠ったんじゃねえだろうな？　と軽く揺すってみると、リーリは大きな耳をピンと立てて、不安げな顔で俺を見た。
瞬間、「おお」と領主が声を上げる。
「その白いのは生き物だったのか！　でかい図体で、妙に可愛らしいふわふわを抱えていると思ったが……私にもよく見せてくれ」
「あ、おい！」
腕の低い位置に抱えていたのが災いして、待てと言う間もなく領主がリーリの両脇を摑んで持ち上げた。
ゼロを抱えているせいもあって咄嗟に制止ができず、みすみすリーリをエロ領主の手に渡してしまう。
「ほほー！　なんと、小さい！　こんなにも小さな獣人を見たのは初めてだ！　ちっとも恐ろしくないぞ。むしろ愛らしいとすら感じる。私は船乗りだからネズミは嫌いだが、もし私に幼い娘がいたら、その遊び相手に連れて帰りたいくらいだ」
リーリは驚きのあまり一瞬ぬいぐるみのようにすべての動きを止め、直後にキィキィと鳴きながら、小さな手足をジタバタと振り回して暴れ出した。

「おいおっさん！　玩具じゃねぇんだぞ、下ろしてやれ。って言うかそいつ、弱そうに見えるが怒らせると結構やべぇんだぞ。ネズミにたかり殺されたくなかったらやめとけ」

「リーリ、そんな事しないもん！」

なぜかリーリが、俺に対して声を荒げる。

その声に、領主はまた歓声を上げた。

「喋った！　喋る事もできるのか！　ああいや、失敬。獣堕ちの中には、喋れない者もいるのでな。キィキィと鳴いていたから、その手の獣堕ちなのかと……そうか喋れるのか！　ますます気に入ったぞ。娘にと言わず、私の遊び相手でもいい。どうだねお嬢ちゃん。私の城で贅沢に暮らしたくはないかね？」

「やめろおっさん！　こんなチビに、一体何の遊び相手させる気だてめぇ！　存在自体が猥褻なんだよ！」

一旦ゼロを床に下ろして、領主からリーリの体をひったくる。

リーリはガクガクと小刻みに震えていた。俺の腕にしがみついて、ひどく落ち着かない様子でキョロキョロと周囲を見回している。

「見ろ、こんなに怯えてるじゃねえか」

「私の純粋な遊び心を、君の下衆な心が猥褻な方に曲解した事が原因ではないのかね。私がこんな小さな少女に無体を働くように見えるのか？」

「ち、ちがくて……！」
領主がいかにも心外そう片眉を吊り上げると、リーリが慌てたように声を上げた。
何が違うのかと思ってその顔を見れば、その怯えはますますひどくなっていく。
「……おいチビ。どうした？」
俺の問いに不安げに表情を曇らせ、「分かんないけど」と呟くリーリの手を、ゼロがそっと摑んでその顔を覗き込む。
「説明しなくていい、ネズミの。つまるところ――我輩達はどうすればいい？」
リーリはゼロの顔を見て、それからもう一度俺を見る。
そして、
「――聞こえる？」
と言った。
「お兄ちゃん、これ……聞こえる？」
〝これ〟って……？」
俺はピンと耳を立て、何か聞こえはしないかと意識を集中する。
音楽がうるさかった。
それに大勢の足音、話し声、笑い声、食器の音――どこかで犬が吠えている。
それらに混じって聞こえる、ズルズルと、何かを引きずるような――。

「――〝これ〟……は……ッ」

その音を知覚した瞬間、ぞわぞわと、背筋を這い上がってくるこの悪寒は一体何だ？

殺意とも悪意とも少し違う――まるで〝食欲〟がジリジリと近づいてくるようだった。

一瞬前まで気づかなかったというのに、気づいてしまえば、もうとても無視できない。

「傭兵？　何か聞こえたのか？」

「分からねぇ……だが、何か来る。――庭の方から」

男の叫び声が聞こえてきたのは、まさにそのときだった。

と同時に窓が外からぶち破られ、何かが広間に放り込まれる。

全身の骨を砕かれた獣堕ち――つまりは警備兵の死体だった。

2

「随分堂々とした〝暗殺計画〟があったもんだな、おい」

暗殺どころか、こいつは襲撃と言っていい。

甲高い悲鳴が広間を満たし、恐慌状態に陥るなかで、俺は割れた窓を見た。その向こうに立つ襲撃者の姿を。

大柄な敵を予想していた。警備の獣堕ちを殺した上に、広間に投げ込めるほどの怪力を持つ相手なら、体もそれなりにでかいだろうと。

だが、これは。

「こいつは……一体何の冗談だ……？」

〝化物〟だと、自分の事を棚に上げてそんな感想が頭に浮かんだ。

蛇だ。

見上げるほど巨大な蛇が、ゆらゆらと上半身を揺らして俺達を見下ろしていた。胴回りは俺と同じくらい幅があり、長さは〝尻尾の先が見えない〟ほどだ。

鎌首をもたげた平べったい蛇の頭は、今にも装飾灯にぶつかりそうなほど高い位置にある。何よりも異様なのは、その蛇の頭が乗っている〝人間の肩と腕〟だ。

どう見ても蛇なのに、なんでこいつには腕があるんだ？

蛇の頭に、蛇の首、人間の体に、蛇の下半身といった感じだった。

黒竜島にはラウルが――上半身が人間で、下半身が馬の獣堕ちがいたが、こいつの異様はその比じゃない。

そいつが体を揺すって前進すると、ズル、ズルルと体を引きずる音がした。

ゼロは顔を覆っていたベールを持ち上げてその姿を凝視し、感動とも取れる声を上げる。

「驚いた……なんと巨大で――なんと禍々しい。美しいとすら感じる」

「おぞましいの間違いだろうが……！　なんだあいつ！　どこから出てきやがった！」

俺が叫ぶと、アルバスが「なんであいつが」と呟いた。

ぎょっとして見下ろすと、アルバスは眉根を寄せて舌打ちする。

「城の地下に閉じ込めてあったんだ。もう人間の意識がなくなってて……商人が売りにきたんだけど、引き取らなかったら森に捨ててったんだ。そしたら村が襲われて――」

捕らえて、地下に閉じ込めておいたのだと言う。

なんですぐに殺さなかったんだ、と怒鳴りつけたいところだったが、今はそんな事を言い合っている場合じゃない。

気づけば領主が声を張り上げ、招待客を広間の外へと誘導し始めていた。

駆けつけた警備兵もそれを手伝い、広間からは見る間に人が減っていく。

当然、襲撃者である大蛇はそれを許さず、追い散らされた蟻を追う残酷な子供のように、招待客に腕を伸ばした。

だがその手は誰にも届く事なく、空中でぎしりと止まる。次の瞬間、見えない糸に全身をぎりぎりと締め上げられて、蛇は苦しげな声を上げてどうと倒れ、身悶えした。

それが神父の糸によるものだと察した瞬間、俺もリーリをアルバスに押しつけて剣を引き抜いた。

「坊主！　お前も招待客と一緒に逃げてろ！」

「ぼ、僕も一緒に戦えるよ！」
「いえ、逃げてもらわねば困りますな」
突然、領主がアルバスの腕を掴んだ。招待客の誘導を兵士に任せたあと、俺達がもたもたしている事に気づいたんだろう。
アルバスは領主を睨んで、その手を振り払った。
「逃げられるわけないだろ！　僕がみんなを守らなきゃ！」
「正義感溢れるのは素晴らしい事ですが、状況がお分かりでないようだ。――ここの対応で、各国におけるあなたへの評価が決まる。そしてあなたは、すでに賊の襲撃を許してしまった。かくなる上は招待客を率いて別室へと下がり、茶でも振舞って〝ちょっとした余興です〟くらいの余裕を見せつけなければ、それこそ権力者としての体面を保てませんぞ」
「そういうこった。それに、こっちにゃお前より数段頼りになる泥闇の魔女がいるからな。チビを頼んだぞ――行け！」
その背中を押し出すと、アルバスは大人しく領主に手を引かれて歩き出す。――あくまで急がず、もったいぶった速度でだ。
「政治ってのはめんどくせぇなあ」
「まったくだな。やはり我輩、自分の国など欲しくはない――しかし結局、武闘会という感じになってしまったな」

「のんびり構えている暇があったら手伝いなさい！　この馬鹿力――私一人で抑えるには限界が……！」

ありますよ、と最後まで言い終わる前に、神父の体が蛇の馬鹿力に振り回されて宙を舞った。だが壁に叩きつけられる寸前で蛇に絡めていた糸を解き、見事に俺の前に着地する。

「鱗が金属並みに硬い。糸では無理です。あなたの馬鹿力であの首を落としては？」

「蛇の料理法っつったら、切り込みを入れた首から皮をべりっと剝がして姿焼きってのが王道だが……ありゃナイフが通りそうな隙間すらねぇな」

「傭兵、我輩さすがにあれは食べたくないぞ……」

「当たり前だ！　食うって言い出したら縁切る――ぞっとぉお！」

巨体からは想像できない速度で蛇がこちらに突っ込んできて、俺は慌ててゼロを抱えて部屋の隅に飛び退いた。

神父は自力で避けられるだろうから放っておく――仮に避けられずに死んだとしても、まあ不慮の事故だと諦めてもらおう。

――と思ったんだが。

「おい馬鹿！　お前――なんでマジで捕まってんだよ！」

神父の体に蛇の図太い胴体が絡みつき、今にも全身の骨を砕こうとしていた。

神父はもがくが身動きがとれず、締め上げられて苦しげな息を吐く。それでも歯を食いしば

り、どうにか俺に怒鳴り返した。
「胴体が長すぎるんですよこいつ！　最初から私を狙って――がぁあぁ！」
バキリと鈍い音がして、神父のどこかの骨が砕けた。砕けた骨が胃に刺さったのか、神父が血を吐いてむせ返る。
「うわもう見てるだけで痛てぇ……！　堪えろ神父！　死にさえしなきゃ、傷は魔法でどうにかなる！」
「無茶な事を……！　と言うかこいつ……私を人質に……ッ」
喋る余裕があるのかと感心したが、どうやら杖をつっかえ棒にして、肺と心臓が潰されるのを阻止しているらしい。
だが、身動きが取れない状態で首をねじ切られればおしまいだ。それをしないって事は、神父の言葉通りなんだろう。
ひと思いには殺さずに、弱らせて捕らえたままに――か。自我を失っても知恵はある。だから狂った獣堕ちってのは厄介なんだ。
「蛇を魔法で吹きとばせなくなったな。神父ごと殺しては、いろいろと今後に差し障りがありそうだ。眠らせるという手もあるが――いっそ戻してしまうか」
「戻すって？」
「――傭兵、どうにかして奴の上半身に取りつけ」

ゼロは質問に答える代わりに、俺にごく単純な――それでいてなかなか難しい指示を出した。
「やれってんなら、やるけどよ……どうする気だ？」
「追って指示する。任せたぞ」
背中を叩かれ、抵抗する暇も余裕もないので、大人しく言われるままに走り出す。
神父を捕らえるために体の〝尺〟を使ってるせいで、頭の位置はさっきよりも少し低い。
蛇の胴体を踏み台にして駆け上がり、神父にグルグルと巻きついている胴体に爪を引っ掛け、一気に上半身に取りついた。
蛇が大口を開けて俺の肩に噛みつこうとするのをどうにか避けて、ゼロに次の指示を仰ぐ。
「それで!?　こっからどうすりゃいい！」
「思ったより早く取りついてしまったな……しばし待て。まだ準備中だ」
「はぁあぁ!?　おいふざけんな本気で死ぬぞ俺！　俺が死ななくても神父が死ぬぞ！」
「そう喚くな、我輩だって一生懸命やっているのだ。君に死なれたくはないし、神父の事も我輩、これで結構嫌いでは――」
「いいから何かする気ならとっととやれ！」
「よし、いいぞ！」
一体何がいいのかはよく分からないが、ゼロが〝いいぞ〟と言った瞬間、突如俺の剣にびっしりと黒い文様が浮かび上がった。

あまりの気色悪さに剣を取り落としそうになったが、どうにか堪えて握り直す。
「それで蛇の心臓を貫け、傭兵！　――その剣は絶対に貫通する！」
「お、俺の剣に怪しげな術かけやがって……！　こういう事なら先に説明しとけよな！」
怒鳴って、俺は蛇の心臓に剣を突き刺した。と言っても、不自然な体勢のせいで力はろくに入っていない。おまけに相手は柔軟な体で、いくらでも衝撃を殺せる〝蛇〟だ。
本来だったら剣は鱗に弾かれて当然なんだが――。
ゼロの言葉通り、剣は難なく蛇の心臓を貫いていた。――貫くというより、〝ぽっかりと開いた穴を突き通している〟という感じだ。
刺した手応えはまるでなかった。
そして蛇の体を貫通した剣の切っ先には、不気味この上ない事に、どくどくと脈打つ心臓がぶら下がっている。
――瞬間。
「ギ――ギ……アアァア！　アギャアアァ！　アァアァ――アァアァアァ！」
蛇が耳をつんざくような悲鳴を上げた。
激しく頭を振ってのたうち回り、俺と神父は振り落とされる形で床に落ちる。
「なんだなんだ！　心臓がないのになんで動いてんだあいつは……！」
「それは〝獣〟の心臓だ。――それを失った事で、奴は人に戻る」

「もど――なんだって!?」

断末魔と呼ぶにふさわしい絶叫を聞きながら、ゼロはあくまで穏やかに言った。

赤黒い心臓を俺の剣から引き抜いて、ぐしゃりと無慈悲に握り潰す。

そこからの変化は劇的だった。

巨大な蛇の体が急に白く色を失い、燃え尽きた薪のようにボロボロと崩れていく。

割れた窓から吹き込む風がその灰を吹き散らすと――一人の人間が姿を現した。

まだ生きている。

「……〝獣堕ちとしての自分を殺して、人間としての自分が生まれる〟……か」

宿屋で会った元獣堕ちの男の言葉が、今になって頭をよぎる。

あいつも心臓を貫かれたんだとしたら、そりゃあ「騙したな」とも言いたくなるだろう。

ガクガクと震え、蛆虫のように床でのたうっている、〝元蛇だった人間〟に近づいて、俺は目を見開いた。

「あれで……女だったのかよ……」

灰の山で蠢いていたのは、ほっそりとした、二十歳そこそこの女だった。

その顔には恐怖と混乱が張りつき、見開いた目の奥の瞳孔は開いている。歩き方が分からないのか、立ち上がろうとしては失敗して、人間のものとは思えない呻き声を上げ続けていた。

パチパチと、場違いな拍手が響いたのはそのときだった。

顔を上げると、避難したはずの招待客の連中が扉の隙間から俺達を見ている。
まばらだった拍手が大きくなって、喝采が広間を満たした。

「素晴らしい！　あの恐ろしい化物をこれほど容易く屠るとは――！」
「さすがアルバス様の護衛！　なんと頼もしい事か！」
「あの化物を、一瞬で人の姿に……どうなる事かと不安でしたが、素晴らしい余興でしたわ」

口々に言う声は、恐怖に引きつっているようであり、戦闘の余韻に興奮しているようでもあり、心底から感心しているようでもあった。
領主が上手い事言いくるめでもしたんだろう。――暗殺騒ぎではなく、〝そういう事〟になったらしい。
「だから殺さなかったのか？」
俺が聞くと、ゼロはひょいと肩を竦めて答えた。
「見物客がいたのでは、わっぱの名誉のためにもあまり残酷な事はできまい」
っつっても、広間の真ん中で裸の女がもがいてる状況ってのも、ある種死体より悪趣味だ。
それに拍手喝采が贈られてるんだから、尚更不気味に感じられる。
ゼロも同じ事を思ったのか、灰の中で丸まっている女に歩み寄り、そっと手を触れて眠らせ

た。俺はひっくり返った食卓から敷布を引っぺがし、女の体にかけてやる。
それから広間をぐるりと見回すと、柱に背中を預け、苦しげに胸を押さえている神父の姿が見えた。
「生き延びたか……しぶてぇな」
「頭から落ちて首の骨を折る寸前だったが、ネズミのが助けた。大量のネズミが神父の体を受け止めた事で、落下の傷はない」
「チビが？　そんな義理もねぇのに、よくもまあ」
リーリの姿を探して招待客の群れに目を向けると、硬い表情のアルバスと目が合った。
そのすぐ背後に領主が立っていて、アルバスに何かこそこそと耳打ちしている。
アルバスはぐっと唇を引き結ぶと、
「――ご苦労」
と、俺達に尊大にねぎらいの言葉をかけた。
まあ、立場上ああするしかないだろう。
不満はあるが、一応会釈くらいは返してやる。
しかしゼロは冷たい目でアルバスを見るとふいと視線を逸らして、割れた窓から外に向かって歩き出した。
「お、おい……？」

「確認する事がある。――だが、君は来ない方がいいかもしれない」
そう言われては、ついて行かないわけにもいかない。

片づけのために集まってきた連中に神父を任せ、俺はゼロについて外に出た。
蛇が這いずってきた痕跡をたどり、目指したのは地下だ。
「さっきの蛇を押し込めといた地下牢か？」
「そうだ――どうやら、過去に十三番の居室になっていた場所を地下牢に作り替えたようだな。我輩が魔法で吹き飛ばしたせいで、他に使い道もなかったのだろう」
一年前、十三番は城の地下に住んでいた。城壁の内部から地下に入れる構造で、そもそも地下牢を改造した部屋だったらしいので、それを正規の使い方に戻したとも言えるだろう。
城の裏に回ると、城壁の一部が壊れ、木戸だったんだろうものがバラバラになって散乱しているのが見えた。
「狭い入口からあんなでかいのが這い出してきたら、まあこうなるよな……」
「むしろ、よくぞ〝押し込めた〟とさえ思うな。……最初から殺してしまうか、人に戻してしまえばもっと楽に済んだだろうに」
「ああ、それな。あいつ、なんで獣堕ちのまま閉じ込めといたんだろうな」
俺が脳天気に呟くと、ゼロはふと足を止める。

「……きっと君は傷つく」
「――あん？」
「また以前のように魔女を恐れ、嫌うようになるかもしれない。だからあまり、君にはこの先にあるものを見て欲しくない」
ゼロは珍しく悲しげに俺を見上げた。
さすがの俺も、ここまで言われれば「引き返せ」と言われているのが分かる。
だがそれは命令ではなく、どちらかと言うと懇願だった。
俺が何も言わずにいると、ゼロはこれまた珍しい自嘲気味な笑みを浮かべ、「いや、忘れてくれ」と自分の言葉を否定する。
「妙な事を言ったな。見て欲しくないなどと……まるで自分を取り繕うようではないか。隠したところで、事実は変わらずそこにあるというのに――浅はかな」
「……いや、っつ！か俺は今も昔も魔女は嫌いなままだぞ」
以前のようにも何も、どっちかっつーと依然として嫌いなままだ。
魔女なんて生き物は不気味で恐ろしいし、奴らが獣堕ちの首やら血やらを悪魔との取引の材料にしているのは間違いない。
俺の言葉にゼロはいかにも意外そうに目を丸くし、まじまじと俺を凝視した。
「し……しかし……君は以前よりも我輩に優しくなったではないか。それともこれは我輩の妄

想か？　魔女など嫌いだと我輩を突っぱねていた頃に比べれは、今では甘やかな好意さえも感じられるようになったと思っていたのだが……」

「甘やかな好意うんぬんは知らねぇが、そりゃ単にお前がとくべ――」

言いかけて、はたと俺は口を閉ざした。

今何か、とてつもなく恥ずかしい事を口走りかけた気がする。

「……特別……無害な魔女……だから……です」

なぜか言葉尻が敬語になったが、とりあえず口走りかけた言葉に軌道修正をかけておく。

しかしあまり意味がなかったようで、ゼロは俺の言葉の「特別」という部分だけ抜き出して、赤い唇でそっと繰り返した。

「特別……そうか、特別か。我輩は君にとって、特別な魔女なのだな」

「いや、だから、特別無害な魔女ってだけでだな……！」

俺が今更言いわけを重ねても、ゼロはまるで聞こえちゃいない様子で、「特別、特別か」と繰り返した。

「――ならば、いい。我輩は君の嫌悪を恐れずにいられる。この先にあるものを見て、君が魔女をますます嫌い、恐れても、君は我輩を恐れはしない。そういう事だろう？　我輩は君にとって、〝特別無害な魔女〟なのだから」

「いや、まあ……そういう事……なんだが……」

なんだこの、落ち着かない感じは。
暗殺騒動の直後に、壊れた城壁の前でするような会話か？　しかもこれから向かう場所には、俺が恐れる何かがあるらしいって状況で。
俺は努めて厳しい表情をつくって、ちらと地下室の方に視線を投げた。
「何があるんだ？　この先に」
「〝家畜小屋〟だ」
「家畜……？」
聞き返しかけて、宿屋でのやり取りを思い出した。
俺達を捕らえに来た獣堕ちの連中が、確か――。
――それに、順番を待つ間は家畜小屋行きだ。
――人間に戻される前に、下手すりゃそこで死んじまう。
「……まさか」
「そう……まさかだ。わっぱがあの蛇を殺さず、人に戻さず閉じ込めておいた理由を考えれば、どうしてもその結論に行き着く」

ゼロは壊れた木戸を通って、階段を一段降りた。
俺は少し躊躇して、そのあとについていく。
血と獣の臭いがした。
爪が石畳を叩く音と、鎖を揺らす音、さまざまな呻き声――。
階段を最後まで降りる。部屋はひどく暗かったが、ゼロが指先に火を灯して周囲を照らした。
「……クソ……あの馬鹿ガキが……ッ」
思わず、アルバスを罵る声が出た。
犬面の部下達は、失態をおかして〝家畜小屋〟に入れられる事を恐れていた。
そして城にきたとき、リーリは「ここが怖い」と言っていた。
それは〝これ〟だったんだと今なら分かる。リーリは地下をうろつくネズミの言葉で、この惨状を知ったんだろう。
鎖に繋がれた無数の獣堕ちが、牢獄とも言えない檻に押し込められていた。
金属でできた四角い檻に閉じ込められ、ろくに立ち上がる事もできず、床にうずくまってガリガリと床をかいている。
――それだけなら、まだいい。
目をえぐられた奴がいる。
爪を抜かれた奴がいる。

舌を切られた奴がいる。
この地下牢に押し込められている獣堕ちのどれもこれもが――体のどこかが足りなかった。
まさにここは家畜小屋だった。
魔女が魔法の贄を得るために、獣堕ちを生きたまま解体していくための牢獄だった。
「やはり、か。――わっぱを取り巻く悪評は、根も葉もない噂だけではないようだな」

3

地上に戻ると、犬面が沈痛な面持ちで俺達を待ち構えていた。
蛇が逃げ出した地下牢の状態を確認しに来たのか、俺達を追って来たのかは知らないが、俺達が地下に降りた事はすでに知っていたようだ。
「なあ、お嬢さんを叱らないでやってくれ。これにはちゃんと理由が――」
最後まで言わせず、俺は犬面の顔面を殴りつけた。犬面はそれを避けもせずに正面から受け、地面に膝を突いて「だよなぁ」と苦笑する。
「止めたんだぜ、俺は……けどよ、ダメなんだ。お嬢さんは俺の言う事は聞かねぇんだよ……俺はお嬢さんの下僕じゃなくて、ソーレナの下僕だから……文句があるなら出て行けって、そう言われちまうだけなんだ……」

「だから好きにやらせといたってか？　役に立たねぇ犬だな。ガキが馬鹿やらかしたら、殴ってでもやめさせるのがてめぇの仕事だろう！」

俺は狼だ、と、今回ばかりは犬面は言い返さなかった。

項垂れた犬面を俺が更に怒鳴ろうとすると、ゼロが片手を上げて俺を黙らせる。

「わっぱは？」

「招待客を見送って、部屋に戻った。神父様の怪我を治しながら、あんたらを待ってるよ。二人が家畜小屋に行くのは見てたからな」

「ならば話が早い。その〝ちゃんとした理由〟とやらを聞かせてもらおう――どのような理由があったとしても、我輩がこれに賛同できるとは思えないがな」

犬面に案内されて、アルバスの部屋に向かった。

戸を開くとアルバスが立ち上がり、不自然な笑顔で俺達を迎える。

奥には神父とリーリの姿もあった。だがそれらのすべてを無視して、ゼロはつかつかと大股でアルバスに歩み寄る。

「二人とも、怪我はない？　神父様の怪我はちゃんと治しておいたから。それで――」

パン、と鋭い音が弾けて、アルバスの言葉が途中で途切れた。

ゼロがほとんど出会い頭に、アルバスの頬をひっぱたいたのだ。俺が一発殴るつもりだった

んだが、こうなるとゼロに任せる以外にない。
アルバスは叩かれた頬を押さえてポカンとし、直後にきつくゼロを睨みつけた。
「な……何するんだよいきなり！　せっかく神父様の怪我を治して待ってたのに！　一言のお礼もなしに叩くなんて！」
「その神父の怪我も、そもそも君が原因だろう」
「な――」
「獣の戦士とは、すなわち魔女の作り出した戦士であり、自我を持つ兵器だ。過去に君臨した高名な魔女でさえ、使役した獣の戦士はたかだか三体――理由が分かるか？　とても御しきれぬからだ。それを、あれほどの数を――しかも暴走した獣の戦士を、なぜ始末せずに生かして飼った！　鎖と檻で自由を奪えば害はないと思ったか？　見張りもつけず、結界も張らず、それで封じられると思ったか！　それほど短慮でよくも魔女が名乗れたものだ！」
顔色を失って二の句がつげずにいるアルバスに、ゼロは一気にまくし立てた。
部屋に入ってくるなり突然怒り出したゼロの剣幕に、リーリが震え上がってベッドの下に潜り込む。
神父は俺と顔を見合わせ、うるさそうに肩を竦める。そりゃ神父からしてみりゃ、魔女の内輪揉めにしか見えないだろうしな。
アルバスはしばしパクパクと口を閉じ開きしていたが、泣きそうになるのをどうにか堪えて

震える声を絞り出した。

「しょうがないじゃないか……！　僕達には力が必要なんだ！　それに、狂った獣堕ちは魂が壊れてて……自殺しちゃうんだよ、人間に戻すとみんな！　どうせ死んじゃうなら獣堕ちのまま生かして、魔法使いの役に立てた方がずっといいじゃないか！　そりゃ、可哀想だとは思うよ……！　十三番さえどうにかなれば、僕だってこんな事――！」

「十三番は関係あるまい。これは君の裁量で、君の選択で、君の決断で行われた。つまり敵が十三番であろうとなかろうと――敵がいる限り君は必ず〝これ〟を選んだという事だ」

「それは……！」

「御しきれたのならば不快なだけだが、事実君は御しきれず、事は最悪の形で露見した。もし我輩達がいなかったらどうなっていた？　君は暗殺の可能性に気づけたか？　もし領主が居合わせなかったらどうなっていた。君の力で解決した事が、今夜の一件で一つでもあったか！」

「それだって十三番のせいじゃんか！　僕の暗殺計画なんて、十三番が仕組んだに決まってるだろ？　あの獣堕ちが暴れたのだって、十三番がやったんだ！　あいつさえいなかったら、獣堕ちが地下牢から逃げるなんて事起こらなかった！」

「あれこもれも〝十三番のせい〟――か。楽な言いわけを覚えたものだな。そう言っておけば原因を探る必要もなく、自らを律する必要もない」

ゼロの言葉に、アルバスは今度こそ言葉を失った。

何か言い返そうとどうにか口を開くが、その口からはかすれた呼吸が漏れるだけでろくに言葉は出てこない。

ようやく、

「……なんだよ」

と呟いた。

拳を握り締めて、手近にあった書き物机を力いっぱい殴りつける。

「なんだよ、なんだよ、なんだよ……！　なんにも知らないくせに……僕の事を置いてったくせに……返事もろくにくれなかったくせに……〝会いたい〟っ……〝戻ってきて〟って書いても無視したくせに！　――なんでそんな風に言うんだよ！」

金色の目を吊り上げて、アルバスは怒鳴った。

その目から涙が溢れ、頬を流れ落ちて絨毯を濡らす。

俺は何を言われているのか分からなかった。アルバスの手紙に「会いたい」だとか「戻ってきて」だとか書かれていた事なんか一度もない。

「お嬢さん。それは兄貴が読む前にお嬢さんが消しちまったから――」

慌ててアルバスをなだめようとした犬面を、アルバスは乱暴に振り払った。

「僕は精一杯頑張ってるよ！　城のみんなは僕になんでもやらせようとするし、できないと子供だからって馬鹿にする！　だから寝る間も惜しんで働いて、働いて！　何を読んでも答えな

んて書いてないのに、それでも僕は答えを出さなきゃいけない！」

「その答えを出させるために、十三番を生かしたはずだ。なぜあの男を頼らなかった」

十三番の名を出した瞬間、アルバスの表情が硬く強張り、その目に悪意が滲み出る。

「十三番を頼るって……ねぇちょっと、ちゃんと僕の話聞いてた？　十三番はこの国を壊そうとしてるんだって、何度も説明したじゃないか！　最初からそうだった……あいつが魔法を持ち込んだせいでおばあちゃんは死んだ。あいつがいなければウェニアスは平和だった！　そんな奴に、一体何を頼れって？　そもそも十三番が国を動かすなら、あのまま十三番が国を乗っ取ればよかったじゃないか！」

アルバスの声はもう、怒鳴ると言うより叫ぶようだった。

ずっと、誰にも言えずに溜め込んできた不安や不満、怒りといった感情が吹き出して、制御できずに癇癪を起こしている。

一通り怒鳴り散らして、アルバスはふっと力を抜いた。

あぁ、と気の抜けたような息を吐き、いびつな笑みでゼロを見る。

「そっか。分かった……分かったよ。ゼロはそうするべきだったって思ってるんだ……僕なんかじゃ力不足だって思ってるんだ。十三番が国を動かすべきだったって思ってるんだ。今からでも十三番に国を譲るべきだって——そんな風に思ってるんだ！　ゼロはもう僕の味方じゃないんでしょ？　十三番に言われて僕の事を——」

「いい加減にしないか!!」
ビクリと肩をはねさせて、アルバスが口を閉ざした。
「疑惑と憶測をもって確信を語り、異を唱えれば敵扱いか？――まるで道理の分からぬ子供ではないか。それでも君は詠月の魔女か？　偉大なるソーレナの直系か！　あまりにも見苦しい」
ソーレナの名を出した瞬間、明らかにアルバスの表情が変わった。
不安げに揺れる瞳を床に伏せ、
「……おばあちゃんは……僕の味方だもん……」
と言う。
「僕が失敗しないように、ちゃんと見守ってくれてる……いつも僕に優しくて……ゼロと違って、僕の事捨ててどっか行っちゃったりしない！」
「なるほど……君の抱くソーレナの幻想は、大層君に甘いらしい」
「幻想なんかじゃ――！」
「もういい。話したところで、得るものはなさそうだ。我輩は十三番を探す。国の世継を奪ったという話だが――少なくとも、もう少しマシな言いわけが聞けるだろう」
パキン、とゼロが優雅に指を弾いた。すると今まで着ていたドレスが消え去り、代わりにいつもの長い外套姿になる。
ふと気づくと、俺もいつもの装備になっていた。便利な魔法――いや魔術か？　この女、と

きどきこうやって呼吸するように魔女っぽい事をやるよな。

「我輩が戻ってくるまでに、せいぜい頭を冷やしておけ。忘れるな、わっぱ。我輩は誰の味方でもなく、ただ我輩の望みのために動く。そして我輩は、このウェニアス王国が安寧である事を望んでいる」

ゼロは「行くぞ」と言いはしなかった。

だが俺は自然にゼロについて歩き出し、だらりとした動作で神父が続き、リーリが心配そうにアルバスを見つつベッドの下から這い出し、少し遅れて俺達を追いかけてくる。

部屋の戸を閉じた向こうから、アルバスが泣き崩れる声が聞こえた。

なんだよ、なんだよと繰り返しながら、僕は悪くないのにと泣き喚いている。

アルバスの泣き声に追い出される形で飛び出してきた犬面が、俺達の後ろ姿に深く、静かに頭を下げた。

どうか、と囁きのような声量で吐かれた言葉も、俺の耳にはしっかり届く。

「お嬢さんを――俺の主を助けてくれ」

犬面らしからぬ、心底真面目で切羽詰まった、懇願のような言葉だった。

俺はそんな犬面の態度にふさわしいように、振り向かずに軽く手を上げるだけでその答えとしておいた。

4

俺達は荷造りもそこそこに、夜のうちに城をあとにした。
夜明けを待ってもよかったんだが、アルバスがあの調子じゃあ、城に長居するのが得策とも思えねぇしな。
「意外としっかりやってるように見えてたんだがな……そもそも、自分の身内を殺した十三番を頼れって方が間違いだったか」
城の正門から、町の中央広場へと続く長い階段をだらだらと降りながら、俺は空に向かってそびえる城へと肩ごしに振り返った。
町の方は家々の明かりも消えて真っ暗だが、城の窓には今も光がともっていて、ああだこうだとざわめく連中の声まで聞こえてくる。
地下牢の蛇を逃がした奴を見つけるために、右往左往してるんだろう。
「――わっぱはそれほど愚かではなかったはずだ」
ゼロの呟きに、俺は正面に顔を戻した。
「幼いながらも、論理を優先する分別のある魔女だった。多少道を誤ろうと、十三番がいれば容易く修正されるはずだった。どこかで何かをかけ違えたとしか思えぬが――事実十三番が

裏切ったのであれ、わっぱがあれでは話も聞けぬ」
「完全に、癇癪を起こしてましたからね」
俺の数歩後ろを歩いていた神父が、呆れたように同意する。
「早めに城を出て正解でしょう。だだをこねる子供は放置するのが一番ですし――あの調子では、翌朝反逆者として我々の処刑命令を出してもおかしくはない勢いでしたからね」
「さすがにそこまではねぇと思うが……」
まあ、翌朝ケロっと仲よしこよしってわけにゃいかねえだろう。
「それで？　魔女さんよ。十三番を探すっつっても――どうやって探すんだ？」
「一つ、あてがある」
「さすが実妹、通じ合ってるじゃねえか」
からかうと、ゼロは少し片眉を吊り上げて俺を見た。
「君にもあるはずなのだがな。十三番と接触するのに、最も適切な場所のあてが」
俺は目を瞬いた。
申しわけなくなるくらい、まったくあてなど存在しない。
俺が「何言ってんだお前」と表情だけで語っていると、ゼロが眉尻を下げる。
「君は時々恐ろしく鈍いな、傭兵よ。君が初めて十三番に会ったときの話だ」
と言うと、俺が人生初の強制召喚の洗礼を受け、ささやかに生死の境をさまよったときか。

あのときは確か、アルバスの案内で〈学舎〉――つまりゼロの魔術師団の隠れ家に向かっているときだった。隠れ家のある町に着いたら、町人は全員殺されてて……隠れ家の入口がある教会に入って――。

「……あ」

「思い出したか？　そう――魔女に滅ぼされし町、ラテット。あそこには十三番の監視の目があった。そして何より、強制召喚を行うための魔法陣がある」

「じゃラテットの教会に行きゃあ……」

「今までの経験から考えて、十三番が我輩達を召喚する可能性は極めて高いと思わないか？」

「あの――さっきからあなた方が何を言っているのか少しも分からないのですが……」

俺とゼロが階段の半ばで足を止めて盛り上がっていると、神父が引きつった声を上げた。

「ああ、いやラテットって小さい町があるんだが――」

「いえ、話の流れから大体の予測はつきます」

説明しようとすると、神父がそっと手を上げてそれを遮る。

「ただその強制召喚というのは……つまり私達が〈弓月の森〉からウェニアス王国に連れてこられた、あの――？」

「そう、あれだ」

ゼロは頷く。

「あれを利用すれば、我輩達は労せずして十三番のもとに――」
「私は遠慮します」
神父が力強ささえ感じる口調で、きっぱりと言った。
俺は一瞬「なんでだよ」と聞き返しかけ、神父が強制召喚の影響で生死の境をさまよい、無様に吐いたという話を思い出す。
思い出すと、ついつい口元がにやにやと緩んだ。
「まあそう言うなって、神父様よ。俺も最初はきつかったが、意外と慣れるもんだって」
「何を醜い顔でニヤニヤしているんですか見苦しい……！　あなたみたいな化物と一緒にしないで下さい！　慣れる前に次こそ死にます！」
「リーリも平気だったよ」
今まで黙っていたリーリが、よしゃあいいのに励ますような口調で神父に言った。
そして案の定、神父の機嫌はますます悪くなる。
「何を〝自分は化物じゃない〟みたいな顔をして語ってるんです……？　私から見ればあなたも立派な化物の一員ですよ……！」
神父が吐き捨てると、リーリは明らかに傷ついた顔をしてしょんぼりと項垂れた。
その様子に神父ははたと動きを止め、気まずそうに眉間の皺をそっと押さえる。
「……〝その化物に命を救われたくせに〟くらいの事を言えないんですか、あなたは」

「……ふえ？」
「へー。お前チビに助けられた自覚あったんだな」
「ネズミの集団に受け止められたんですよ、私は。それが神の奇跡だと信じるほど私もおめでたくはありません」
だからと言って、リーリに対して礼を言う気はさらさらないらしい。
「で、なんでお前はこの状況で照れてんだ……？」
不思議と気恥ずかしそうに耳を伏せているリーリを見下ろし、俺が鼻の頭に皺を寄せると、リーリは「だって」ともごもご言う。
「怒られるって思ってたから……余計な事するなって……ネズミなんかに助けられるなら、死んだ方がよかったって……」
「――卑屈すぎて気持ちが悪い」
このいじらしいリーリに対して、神父の発言はあくまで辛辣だ。
と、思いきや。
「胸を張りなさい。救ってやったのだという顔をして、尊大に対価でも求めればいいでしょう」
急に人間のできた聖職者のような事を言う。
俺も何度か神父の命を救ってると思うんだが、対価を求めろなんて言われた事ねぇぞ。
リーリも突然の申し出に困惑し、落ち着かなげにぎゅっと服の裾を掴む。

「た……たいか？　って……けど、そんな大した事してないし……」
「私の命を救った事が、大した事ではない――と？」
不機嫌そうに聞き返されて、リーリは「ち、ちがくて」と必死に言い繕った。
「いつも憎まれ口ばかりの神父が、珍しく礼をしてくれると言うのだ。素直に受け取ってはどうだ？」
「けどリーリ……別に……何も欲しくないし……お礼欲しくて助けたんじゃ……」
「では何も要求しなければいいでしょう。――数日は待ちますが、それを過ぎたらこの話はなかった事にしますからね」

【幕間　ソーレナの人形】

ゼロ達が城を出たその翌朝――アルバスはいつものように、ソーレナの隠れ家に引き込もっていた。

理由は一つだ。

もう、何もかもが嫌だった。

朝目が覚めると、ホルデムが暗殺騒ぎの犯人について報告を上げてきた。

地下牢の鍵を盗み出し、蛇の檻に投げ込んだのは、アルバスが魔法の使用許可を与えなかった見習い数人――理由は「アルバスが死ねば、結界が消えて魔法が使えるようになると思ったから」だと言う。

そして「たとえアルバスが死ななくても、舞踏会で失態を犯せばもう偉ぶったりできないだろうから」とも言ったという。

なんと馬鹿馬鹿しい――そして分かりやすい八つ当たりと嫉妬心か。

そして、〝主席魔法使い〟が聞いて呆れる人望のなさか。

――楽な言いわけを見つけたものだな。

ゼロの冷徹な瞳と、吐き捨てるような言葉が脳裏をよぎり、アルバスは唇を噛んだ。

――本当に、嫌な事ばかりだ。

こんなに頑張っているのに。必死に頑張っているのに。

傭兵も、ゼロも、ホルデムも――誰も優しくしてくれない。

噛み締めた唇はぷつりと裂けて、つうと滑り落ちた血がぽたぽたとテーブルに滴る。

「血が出ているよ、可愛い子。そんなに自分を痛めつけるもんじゃない」

テーブルの上にちょこんと座った人形が、優しげな声で言った。

アルバスははっとして顔を上げ、勢いよく人形を引き寄せる。

「おばあちゃん！　よかった……全然反応なかったから、消えちゃったのかと思った」

ホルデムからの報告を受けてすぐ、アルバスはいてもたってもいられず隠れ家に駆け込んで、人形に向かって泣き言をぶちまけた。

しかし人形はピクリとも動かず、返事もない。

人形はいつも動いてくれるわけではなかった。

死霊などというのはそもそもひどく不安定で、いつ消えてしまうかも分からない。こうして人形に取りついて会話ができるだけでも奇跡なのだ。

この森に縁があって、死してなおこれほど強く意思を保てる死霊など、本来ならばいるはずがない。

だからアルバスは、この死霊はソーレナだと確信していた。

生前の記憶を失ってはいたが、誰よりもアルバスを理解してくれるし、優しく、聡明で、困った事があればいつだって相談に乗ってくれる。

「お前が私を呼ぶ声は聞こえていたよ。――けれど、どうも質の悪い死霊がうろついていてね、私の邪魔をするのさ」

「質の悪い死霊……？」

きょとんとして、アルバスは周囲の気配を探る。

森はいつものように清涼としていて、優しげで、何か嫌なものがいるようには感じられない。

「僕、全然分かんないや。死霊術って苦手だし、お化けってなんか怖いし……あ、おばあちゃんは別だよ！　だって僕のおばあちゃんだし、優しいし」

おやおやと、人形は小さな手を伸ばしてアルバスの頭を撫でた。

「ねえ、よくお聞き。世の中は愚か者だらけだ。綺麗事ばかりを並べて、現実を見ない。そういう連中が、これからもお前を苦しめる。だけどお前はこの国を守るために、そういう連中と

戦う力をつけなければならない」

「うん……」

「泥闇がお前を責めたって、気にする事なんてないんだよ。天才魔女には分からないさ。力のない者の悩みなど、考えたって分かりっこない。お前は、お前が正しいと思う事をすればいい」

「……けど僕、何が正しいのか……」

分からないよ、と囁いて、アルバスはテーブルに突っ伏した。

「――ねえ、おばあちゃん。もしおばあちゃんなら……」

もし、偉大なるソーレナならば。

アルバスが頭を悩ませるさまざまな問題に、きっと簡単に答えを出せるのだろう。ソーレナは死ぬまでずっと、そうやって生きてきた。

人間の悩みを聞いて、苦痛を聞いて、それを取り払うための最良の手段を与えてきた。

もしソーレナが生きていたら、一体どうやっただろう。どうやってこの国を動かしただろう。ホルデムに聞いたところで、「俺にソーレナの考えが分かった事なんか一度もない」と困ったように言うばかりだ。

どうせホルデムだって、心の底では「ソーレナさえ生きていれば」と思っているくせに――。

「そうだねぇ……いろいろ方法はあるけれど……」

「ほんと!?」

アルバスは勢いよく体を起こした。
「ああ、けれど……私はお前ほど優しくないから、きっと参考にはならないよ。どれもいくらか血が流れる」
「……血？」
「一の犠牲で百を救う――私はそういう魔女だからねぇ」
そう、そういう魔女だった。
ソーレナは自分一人の犠牲で、大勢の人を救って死んだ。
そういうソーレナを、アルバスは誇りに思う。その強さが欲しいと思う。
「……僕もだよ、おばあちゃん」
アルバスは体を起こし、まっすぐな目で人形を見た。
「お前は悪者になれるかい？　きっとみんながお前を責めるし、恐ろしい魔女だと言うよ」
「平気だよ。この国を守るためなら……魔女と人間が平和に暮らせるなら……」
そのためなら。
――多少、犠牲を払っても。

四章　七番

1

十三番を見つけるべく、俺達は一年前に滅んだ田舎町――ラテットに向けて歩き出した。
ラテットはウェニアス王国の中心である、フォーミカムから半日ほどの場所にある。城がある王都プラスタからフォーミカムまでは馬車で半日。歩いてなら一日半だ。
夜から歩き始めた事を考えりゃ、翌晩にはフォーミカムに到着できる計算になる。
が、フォーミカムの門は日暮れには閉まるので、夜に着いてもどうせ町には入れない。
なので野宿で一晩明かして、翌朝、フォーミカムへは寄らずに直接ラテットを目指す事に決めた。
リーリは道中、神父の命を救った対価に何を求めるかうんうんと悩んでいたが、気がつくと悩んでいた事も忘れ、いつものように木の実を採ったり、花を摘んだりし始める。
神父はそんなリーリの姿に、呆れとも諦めともつかない溜息を吐き、「大人しく礼を言った方が楽ですね」と呟いた。
別に誰も神父からの礼なんぞ、期待も予想もしてなかったってのに、自分から言い出すんだから律儀な男だ。
――そして、記録的な順調さで俺達はラテットに到着した。

日は中天に差し掛かる直前で、馬鹿馬鹿しいほど晴れている。実にほがらかな旅日和だが、到着した町が〝死んでいる〟となると、残念ながら心は弾まなかった。

「……ボロボロ」

ぼつりと呟かれたリーリの感想通り、ラテットは家も道も荒れ放題でひどい有様だった。さすがに死体はすべて片づけられていたが、誰かが再度この町に住もうとした気配はない。

「人が住まなくなった町はすぐ荒れる。野盗や動物が荒らすからな」

「しかし、仮にも過去に魔女の隠れ家があった町でしょう？　多少は手が入っていてもおかしくはないと思うのですが……」

「ここはいろいろと複雑なんだ」

ざらりとした艶かしい女の声に、俺達は全員が同時に――そして愕然として顔を上げた。廃屋の陰から、まるで俺達を待ち構えていたかのように、一人の女が歩み出てくる。

真っ赤な髪を腰まで伸ばした妖艶な魔女――十三番の手下。

「ここでは〈ゼロの魔術師団〉が生まれ、そのせいで民が死に、さらに〈ゼロの魔術師団〉も十三番によって駆逐された。魔女と人間両方にとって忌むべき町で、こうなっていた方が双方にとって都合がいい」

「またこいつかよ……ッ！　全然気配に気づけなかった……」

馬車でこいつに襲撃されたときもそうだった。向こうに声をかけられて、初めてその存在

に気がつけた。

危機察知能力の高い獣堕ちが聞いて呆れる体たらくだ。

俺が思わず引きつると、魔女は人懐っこささえ感じさせる笑みを浮かべて俺を見た。

「そんなに怖い顔をしないでほしいな。せっかくの男前が台無しだ。熟練した魔術師は、気配を消すのが上手いんだよ。ゼロだって、見た目に反して存在感が希薄だろう？」

思い出すのは、ゼロと出会ったばかりの頃だ。

確かに俺はその気配に気づけずに、背後から声をかけられるたびにぎょっとしていた。

「我輩からしてみれば、君などは熟練した魔術師とは呼べぬがな。なるほど十三番には目をかけられているようだが、熟練した魔術師が気配を消せば、視界に入っても知覚されずに歌と踊りが披露できる。ここから先は自慢だが――我輩、幼少期に十三番に〝かくれんぼ〟を仕掛け、七日見つからずについに懇願させた事がある」

ゼロは本当にどうでもいい自慢で胸を張り、赤毛の女はなぜかそれに衝撃を受けている。

「ちょっと待ってくれ……あの十三番が〝かくれんぼ〟なんて子供っぽい遊びを？」

「そうだな……我輩の記憶によると、あのとき十三番は半泣きだった」

「私の弟子にデタラメを吹き込むな！」

至近距離からの怒声とともに、背後から後頭部を殴りつけられ、俺は軽くつんのめって頭を押さえた。

「痛ってぇ！　なんだいきな――」

振り返って、俺はあんぐりと顎を落とした。

触れれば手が届く至近距離に、全身黒ずくめの男が立っている。男が手にしている巨大な杖には見覚えがあり、こいつで俺を殴ったんだろうという事も瞬時に分かる。

「じゅ――十三番!?」

顔を見なくても、声と雰囲気だけでこれが誰だか嫌でも分かった。

問題は、俺が殴られるまで誰ひとり、その存在に気づけなかった事だ。

神父は俺の声に一瞬遅れて飛びすさり、大鎌を構えて今更すぎる警戒をするが、どう考えても十三番がその気になってりゃ殺されていたはずだ。

リーリは突然出現した不気味な男に全身の毛を逆立てて、止める間もなく近くの木の陰に飛び込んでしまう。

ゼロだけが平然と、非常識な現れ方をした実兄を見上げて満足げに微笑んだ。

「そこにいたか、十三番。近くにいるとは思っていたが、思った以上に近くにいたな」

「近すぎだろうが！　お前一体いつからそこに……っつーかなんで今、俺は殴られたんだ!?」

「主人の咎は下僕が背負うのが務めだろう」

「俺はゼロの下僕じゃねえよ！」

俺が吠えると、ゼロが横から入ってきて俺と十三番の間に立ちふさがる。

「そうだ。傭兵は我輩のかけがえのない唯一だ。それは今も変わらない。だと言うのに、まったく貴様という男は――どうせ劇的な演出でも狙って潜伏していたのだろうが、貴様の考える事などお見通しだ。あいにく我輩、貴様の自己満足に付き合っているほど暇ではない」

「息災か」

つらつらと並べ立てられたゼロの言葉を一切無視して、十三番の手がゼロの頬に触れた。

そのままふにふにと頬をつねり、「栄養状態はよさそうだ」と相変わらず抑揚に乏しい声で不機嫌そうに呟く。

ゼロは「やめんか鬱陶しい」とその手を振り払い、仕切り直しの意味を込めてひとつ、わざとらしく咳払いを落とした。

「――神父。見ての通り怪しげな男だが、今のところ危険はない。警戒を解いていいだろう。ネズミのも、隠れていないでこっちにこい」

「そう言われて警戒を解ける相手とは思えませんがね……」

「お、お兄ちゃんの事ぶった……その人怖い」

「気持ちは分かるが、警戒しても無駄だぞ。十三番が俺達を攻撃する気なら、町に入った瞬間にゼロ以外全員殺されてる」

そういう男だ、十三番って野郎は。

徹底した妹至上主義で、ゼロさえよければあとは世界が滅んでも構わないとさえ思ってるふ

しがある。
神父が躊躇しつつも鎌を下ろすと、「うふふ」と艶かしい女の笑い声がした。
「随分間抜けな登場になってしまったね、十三番。私が隠れ家まで案内する予定だったのに、こんな風に出て来てしまうなんて」
「貴様が余計な話をするからだろう、ナナ」
「だって十三番の昔話なんて、こんな機会でもないと聞けないじゃないか。偏屈で物分かりの悪い師匠の弱みは、少しでも多く握っておくに越した事ない」
ナナと呼ばれた魔女は楽しげに笑いながらしなを作って歩き、無遠慮にゼロの両手を握る。
「ねぇ、ゼロ。十三番の話、いろいろ聞かせてくれるだろう？　この男ときたら、自分について何一つ話してくれないんだ」
「それで〈不完全なる数字〉の情報が入るのならば――安いものだ」
ゼロが静かに答えると、ピリリと周囲の空気が引き締まる。
「我輩は何も、昔話に花を咲かせるためにわざわざ足を運んだのではない。〝どういう事だ、十三番〟と問いただしにきたのだ。なぜわっぱはあれほど追い詰められ、この国はどうなってしまっているのかをな」
「お前が望むならば、ゼロ。私の理解の及ぶすべての事に、遺漏なく答えよう。本来、そのためにお前達をこの地に喚んだのだ。詠月の結界が予想外の効果を発揮し、思った場所に呼び寄

せる事ができなかったがな……」

それで焦った十三番を見かねて、ナナが俺達を迎えに現れたってのが先日の顛末らしい。

「やはり、我輩達を召喚したのは貴様だったか。――まったく、どうなっているのだ、十三番。貴様以外に使えるはずのない強制召喚を、当たり前のような顔をして使う者が現れた。銀髪の魔術師が魔法使いを集め、打倒主席魔法使いを掲げているという話も聞いた」

「――銀髪の魔術師……？」

十三番が怪訝そうに聞き返した。

そしてそっと額を押さえ、「そういう話になっているのか」と肩を落とす。

「ほう……心当たりがあるようだな」

「心当たりも何も」

うんざりしたように言いながら、十三番は突然そのフードを脱いだ。

その瞬間、眩しいくらいに輝く銀色の髪が溢れ、風に吹かれてキラキラと輝く。

「それは私の事だろう」

――俺の記憶が正しければ、十三番は黒髪だったはずだ。

少なくとも、こんなふうに腰まで届く銀髪を、絹で結わえて風になびかせてはいなかった。

いや、まあ、髪はまだいい。どっちかって言うとどうでもいい。

伸ばしたのかもしれないし、脱色したのかもしれないし、かつらかもしれねぇし。

問題は、顔だ。

「……だ――誰だてめぇ!?　十三番じゃなかったのかよ！」

知らない。

俺はフードを脱いだ男の顔に、まったく見覚えがなかった。

十三番の顔を忘れたとかいう話じゃないし、まずこんな顔の人間を忘れる奴はいないだろう。

忘れたくても忘れられない、瞼に焼きつくその美貌――。

こんな、流し目一つで世界中の女がひれ伏すような傾国の美男子なんぞ、一度見たらむこう十年悪夢にうなされるほどだ。

だと言うのにゼロはきょとんとして、

「十三番だが？」

と答える。

いやいや。

いやいやいやいや。

「お前、俺が俺が十三番に会った事あるって忘れてねぇか？　さっきまで違和感なく話してたが、こいつは絶対に十三番じゃねえだろう！　俺は認めねぇぞ！」

俺が叫ぶと、おぞましさすら感じさせる美男子が不機嫌そうに眉根を寄せた。

「貴様が認めようと、認めまいと――私が十三番である事実に変わりはない」

「そうだな。同胞である我輩の目から見ても、これは十三番だ」
「そうだね。直弟子である私の知る限り、これは十三番だよ」
嘘だと俺が叫んだところで、妹と直弟子と本人に「こいつは十三番だ」と押し切られては、俺には反論の余地もない。
無駄に助け舟を求めて神父とリーリを見てみたが、神父は「私に分かるわけがないでしょう」と顔を顰め、リーリはゼロと十三番を見比べて、
「そっくり」
と俺にとどめを刺してくれる。
俺がぺたりと耳を伏せて尻尾を垂らし、圧倒的な敗北に肩を落とすと、ゼロが楽しげに笑いながら軽く俺の胸を叩いた。
「しょげるな、傭兵。確かにあれは十三番だが、君の知る十三番の姿ではない。あれは悪魔と取引きをし、美しさを手放す前の十三番――すなわち、本来の十三番だ」

2

いつまでも滅んだ町のど真ん中で立ち話をしていたらさすがに目立つという事で、十三番の隠れ家に移動する事になった。

移動と言っても、歩いたのは道から教会までのわずかな距離だ。ここから隠れ家まで一瞬で移動できる〝魔女の道〟が存在するらしい。

「昔は〈学舎〉に繋がっていた魔女の道を、今は隠れ家に繋いであるんだ。ただ〝入口の一つがここにある〟というだけで、何もラテットを隠れ家にしてるわけじゃない」

というのはナナによる解説だ。

十三番が何一つ解説せずに進めようとするので、その隣でナナが人当たりよくあれこれ解説してくれるのは正直言ってありがたい。

「十三番にゃもったいねぇ弟子だな……いい女だし」

と俺が思わず呟くと、ゼロが嫌そうな顔をして俺を見上げた。

「君はもう少し、本質というものを見る目を養うべきだな、傭兵よ」

「なんだよ。あの女が実はすげぇ性悪だってのか？」

「そっちの本質ではない」

じゃあどっちの本質なんだよ、と聞いてもゼロは答えてくれないし、ナナを見ても意味深な微笑みを返すばかりだ。

「道は十三番以外には開けないようになってるんだ。〝魔女の道〟って面白いものでね、入口がここにあっても、実際の隠れ家はこことは全然違う場所だ。だから入口を見つけても、それを開く事ができないと隠れ家は見つけられない——あえて入口を隠れ家と違う場所に作る事で、

魔女狩りの手を逃れていたんだろうね」

十三番は教会の側廊を形成する柱に歩み寄り、ぷつりと自分の指先を噛み切った。滴る血で柱に複雑な記号を書き込むと、十三番の手が突然ぞぶりと柱に埋まる。そのまま、十三番の体は柱の中に吸い込まれていった。

ぎょっとして目を見開くと、いつの間にか柱にぽっかりと穴が開いていて。その穴の向こうに落ち着いた雰囲気の書斎が見えている。

「ちょ、なんだよこれすげぇ気色悪いぞ……！　まさかこの中に入るんじゃねえよな？」

「そのまさかだ。強制召喚に比べればどうという事はないだろう？」

じりじりと後退しつつあった俺の背中を、ゼロが両腕を突っ張って押し返した。

そのままぐいぐいと押されるが、思わず踏ん張って堪えてしまう。

「待て待てやめろ！　心の準備ってもんがだな……！」

「神父とネズミのは、特に心の準備は必要なさそうだが？」

「はん⁉」

見ると、リーリはナナに手を引かれてやすやすと柱の向こう側に入っていき、神父の方も平然と魔女の道を通り抜ける。

なんでだ。なんでお前らは平気なんだ？

「恐ろしいなら、我輩が君の手を引いてやろう」

背後から優しげな声でそんな風に言われて、俺は逃げ腰だった姿勢をしゃんと正して、柱に開いた穴に向かって歩き出した。

俺にだって男としての意地がある。

ゼロに手を引かれてこの穴を通るなんざ、なんと言うか、こう、嫌だ。

しかし、実際に通るとなるとやはり不気味で勇気がいる。これ、本当に通って大丈夫なんだよな？

なんかも、穴の淵がやもやしてるし……このもやもやに触ると死ぬとかねぇよな。

「傭兵」

「あん？」

「早く入れ」

わりと洒落にならない力で背中を蹴り飛ばされ、体をかがめて穴の様子をうかがっていた俺は大きくよろけて無様にすっ転んだ。

――つまり穴の中に倒れ込んだ形になる。

その後をひょいとゼロが追ってきて、俺は体を起こして鋭く吠えた。

「何しやがる!?」

「物事には勢いが必要だと思ってな。しかも〝道〟が閉じかけていた。半端に入ったところで道が閉じると、我輩は縦に薄切りされた君の死体と対面しなければならない。我輩、それだけ

は避けねばと思ってな。少々焦った」
「そ――そういう事は先に言っておけよなぁ！」
「先に言ったら、ますます入るのを嫌がるだろう。ひょいと入ってしまえば問題ないのだ。しかし恐怖という感情が、存在しなかった危険を現実のものへと変える。皮肉なものだな」
明後日の方を見つめて物憂げに言うゼロは完璧に絵になるが、俺は立ち上がってその頭を殴りつけようとして、やめた。
十三番が明確な殺意をもって、まったくの無表情のまま俺を睨みつけていた。
少しでもゼロを傷つけようものなら一瞬で消し炭に変えられると、俺の本能が言っている。
「なんだ、何を遠慮しているのだ傭兵。いつもの君ならば我輩を殴る場面だろう。我輩は君を蹴り飛ばしたのだから、君も我輩を殴っていい。ほら、いつものようにガツンとやるがいい」
「待て待て待て！　お前それ十三番の前で言ったらどうなると思って――っていうかそんなに殴ってねぇぞ俺は！　時々！　本当に時々なんです信じてくださいお兄さん！」
「私は――貴様の兄になった覚えはない……！」
ダメだ、十三番に殺される。
俺がそう確信すると同時に、ナナが十三番の頭を平手で叩いた。
「ちょっとしたじゃれ合いじゃないか。過保護も大概にしないとゼロに嫌われるよ、十三番。さあ、みんな疲れてるだろう？　ささやかだけど、食事を振舞わせてくれ。それから話を始め

よう。それでいいね？　十三番。私は食事の用意をするから、お客様の相手を頼むよ」

――すげぇ。すげぇ強いぞこの女。

この世の中に、十三番の頭を叩いて許される女がゼロ以外に存在するとは思わなかった。

十三番は不機嫌そうに頭を軽く押さえると、長い外套を脱ぎ捨て、暖炉の脇にあった安楽椅子に乱暴に腰を下ろした。

出された食事は、思っていたより豪勢だった。

七面鳥を炙り焼きにしたものと、パンに、いくつかの果物。

キノコのスープはヤギの乳でとろみがついていて、ゼロが「美味い」と評するほどだ。

するとナナが嬉しげに、

「よかった、口に合ったみたいだね」

と微笑んだ。

「おねえちゃん、これ作ったの？」

すっかりナナに懐いたリーリは、スープにパンを浸しながらわくわくと尻尾を揺らす。

「そうだよ、ネズミのお嬢ちゃん。十三番の料理ときたら、まったく酷い代物なんだ。他の弟子は十三番に言われた通りにしか作らないし、とてもじゃないけど食べられたものじゃないから、自分で作る事にしたんだ」

「いかにも、そうだ。十三番の料理はあまりに酷い。我輩、傭兵の作り出す料理の数々に出会ってようやく、十三番の料理が悲惨だと知ったのだ」

「余計な事に時間を割いている暇などないのでな。食事など食えればいい。そもそもあれは、穴ぐらでみなが食していた伝統的な食事であって、私個人の料理の資質によるものではない」

つまり、穴ぐらの連中は全員料理音痴で、味音痴だったわけか――。

そりゃ長年不味い飯を食い続ければ、味に無頓着にもなるだろう。

食事をしながら、この隠れ家が一体何で、どこにあるのかなど、ナナがぽつりぽつりと説明してくれた。

満腹になったせいか、リーリはその途中で睡魔に負け、床に潰れて眠り込んでいる。

場所は山脈にほど近い森の中――俺達がナナの襲撃を受けた辺りだ――にある、貴族が狩りの時に滞在する狩猟館だ。

なぜ十三番とナナが貴族の狩猟館を隠れ家にしてるのかは疑問だったが、ナナは一言「人脈だよ」と答えて説明を仕舞いにした。

「――それで、十三番よ。貴様のその姿は？　なぜ昔の姿に戻っている」

「私は過去の国家魔術師として――そして国の転覆を目論んだ悪の魔術師として姿が知られているのでな。やむなく昔の姿に戻したのだ。おかげで妙な噂が立ったようだが……」

そう簡単に戻せるものなのかよ。

前にゼロが言ってたが、こいつ、確か美しさを差し出して悪魔と契約したんだよな？
それを破棄したって事は、もう魔術が使えないって事か？　魔法が使えるから、もう魔術は必要ねぇって事なのか？
「――左半身の手足を一本。二つある臓器を一つずつ。それで片をつけた」
俺の疑問を読み取ったように、十三番がローブの裾を少し上げて見せる。
左足が義足だった。
そして思い返してみれば、十三番は右手以外を一度も使っていない。
「そこまでして……っつーかよ、お前死んだ事になってなかったか？　なんでまた、坊主はあんなにおおっぴらにお前を追っかけ回してんだ」
「私が実は生きていて、再びウェニアス王国の転覆を企んでいると公表した方がいいと――そう、何者かにそそのかされたらしい」
「何者かって？」
「〈不完全なる数字〉」
十三番が確信を込めて口にしたその言葉に、俺は身を乗り出した。
「確信はあるのか？」
ゼロが硬い声で聞いた。
十三番は重々しく目を閉じ、

「確証はない」
と答える。
「十一年前――私がウェニアス王国にて〈ゼロの魔術師団〉を立ち上げるのとほぼ時を同じくして、〈不完全なる数字〉は現れた。奴らは〈ゼロの魔術師団〉に深く食い込み、根を張り、息を潜め静かに力を蓄えようとしていた。――その存在に、私は最初から気づいていた。だが取るに足らぬと軽んじ、連中を見逃した。奴らの目的は私と同じ〝魔女の世〟だが、〝共存〟ではなく〝支配〟だ。奴らは今や大陸中に広まり、教会に怒りを抱く魔女達を次々と抱き込んでいるという」
――世界が変わると思わない？
突然、そんなサナレの言葉が耳に蘇り、俺は奥歯を軋り合わせた。
確かにサナレは〈ゼロの魔術師団〉に入り、そこで写本を書いたと言っていた。黒竜島で会った星厳の魔術師アルゲントゥムも、〈ゼロの魔術師団〉にいたという。
すべての始まりは〈ゼロの魔術師団〉――このウェニアス王国。
だったら〈不完全なる数字〉の連中が、アルバスに何か仕掛けていてもおかしくはない。
「王が崩御する少し前から、詠月は私以外の何者かの助言を聞いていた。詠月はその者に絶対

の信頼を置いており、気づくと私の助言には耳を貸さず、むしろ強い猜疑心を持って接するようにまでなっていた。その〝何者か〟が狙っているのは、明らかに魔女と人間の戦争だ」

「なるほどねぇ……〝支配〟が目的なら〝勝利〟が要る。それには戦争が必要ってわけか」

陸路の中心であり、世界中から人が集まり、散っていくウェニアス王国で魔女と人間が仲よく共存できちまったら、世界的に「魔女と人間の共存は可能」という前例が広まっちまう。だがそのウェニアス王国で、一度立ち上がった魔法国家が崩壊すれば、人間と魔女の戦争は本格的なものになるだろう。

そしてその戦争に向けて、〈不完全なる数字〉は着々と力をつけてるってわけだ。

「――では、あなたが王子を連れ去り、監禁しているという話は？」

神父の問いに、ナナは苦笑いした。

「それはアルバスの被害妄想と思い込み。王子は自分の意思で隠れている。暗殺の可能性を危惧してね」

「坊主はそれを、〝十三番が王子を返さないための口実〟だと思ってたみたいだがな」

「まったく――本当に馬鹿な子だよ、あの子は」

ナナは乱暴にため息を吐く。だがその口調に悪意は感じられず、むしろ出来の悪い妹への呆れめいた親しみが滲み出ていた。

「陛下が崩御した今、王子まで暗殺されたら、ウェニアス王国における魔女と人間の平和的共

存の可能性は潰えてしまう。なのにアルバスは、〝誰だか分からない奴〟の言葉を真に受けて十三番を殺そうとしてるんだ。これで、どうしてのこのこ城に帰れると？」

そうですね、と同意を示したのは神父だ。

「自らが危険である事に気づかずに、むしろ善意をもって悪をなす者は少なくありません。アリが喜々として巣穴に毒の餌を持ち込むように、味方は裏切らぬまま敵になりえる。私が見た限り、主席魔法使いには敵が多く、そして彼女にはそれが見分けられていない。確かに、彼女に情報を漏らすのは危険でしょう」

不本意ながら、俺も同意見だった。

アルバスも敵の存在には気づいているが、それがどこにいるのか分かっていない。疑心暗鬼に陥って、すべての責任を十三番に押しつけている。――そう考えるのが妥当な状況だった。

そんなアルバスに王子の居場所を教えるのは危険だし、実際に会って話をつけるなんて言わずもがなだ。

アルバスが味方だと信じている何者かに、みすみす王子を殺される危険がある。

そもそもアルバスは、十三番に反感を持ってたんだ。第三者が何か吹き込めば、アルバスが十三番を今度こそ始末しようと考えるのは不思議じゃない。

――と、考えるのは確かに妥当だ。

「……で、証拠は？」

俺の言葉に、ナナと十三番が怪訝そうに俺を見た。

「お前らの言い分は分かったが、結局のところ証拠がない。坊主が十三番を殺す事に決めた直接の原因は〝王子を城に返さない事〟だろう？　それが王子本人の意思だってんなら、せめてそのご本人に会わせてもらわねぇとな」

ナナはまじまじと俺の顔を見た。

赤く彩った唇に爪を伸ばした指をあて、

「……意外と馬鹿じゃないんだな。そのまま信じると思ったのに」

と少々素直すぎる感想を口にする。

「歯に衣を着せない評価をどうも。傭兵のさがで疑り深いんでな。そもそも俺達は、その〈不完全なる数字〉と十三番の関係を疑ってんだ。坊主がお前を追いかけまわしてる事さえ、お前が仕組んだ可能性だってある」

第一俺には、一度十三番に言いくるめられ、ゼロを捨てたという苦い思い出がある。

もしアルバスの言葉が正しくて、十三番が国の転覆を企み、悪意を持って王子を監禁してるなら、全力でぶん殴って王子を奪還するのが俺達の仕事だ。

「証拠ならちゃんとあるよ」

「へぇ？　証拠って――」

俺が質問を口にし終える前に、何を思ったか、ナナが突然服を脱ぎ始めた。
「お前――ちょ、何やって……！」
慌てて止めようと立ち上がったが、遅かった。
ナナは全身を覆っていたローブを床に投げ出し、その下に着ていた肌着までも脱ぎ捨てる。
その裸体を、俺は見るべきじゃなかったんだろう。
だが、見えちまったもんはしょうがないし――見ちまった今となっては、もうマジマジと凝視するしかない。
広い肩幅だった。
そして、ほどよく発達した胸筋と、ささやかに割れた腹筋だった。
そっと床に視線を落とすと、女の胸を模した詰め物が、脱ぎ捨てた服の近くに転がっている。
服を脱ぎ捨てたナナは、見間違いようもなく完璧に男の体をしていた。
「改めて、自己紹介させてもらおう。私がウェニアス王国第一位王位継承者にして、十三番の直弟子――ナナこと、七番だ」
「……は？」
「本質を見ろと言っただろう、傭兵。ナナは男だ」
「は……はぁあぁあ!?」
呆れた口調でゼロが言い、俺は間抜けな悲鳴を上げる。

「魔術師は真の名を人に知られてはならない。つまり私が魔術師となり、魔法使いとなるには、別の姿と名が必要だった。潜伏の必要に迫られたとき、十三番が私に〝番号〟を与えてくれた。ならばいっそ、性別ごと変えてしまえと思ってね。――本当は、口調も女に寄せようと思ったのよ？　けど、十三番が〝気持ち悪いからやめろ〟って。酷いと思わなぁい？」

腹が立つくらい女らしくしなを作って、ナナは俺に向かって片目をつむってみせる。

「いや……いや待て騙されねぇぞ！　国王が六十過ぎのジジイだったなら、王子だっておっさんになるはずだ！」

「そうだな。本来の王位継承者である王子は私の父だ。しかし私が幼い頃に流行病で亡くなり、今は孫の私が王位継承権を持っている」

「そ、そんな都合のいい話が――」

「イデアベルナ領主のトーレスとも懇意にしていてね。君も彼とは面識があるだろう？　彼は父親のいない私に、いろいろと珍しい話を聞かせてくれる。君達の話も聞いているよ――アクディオスの聖女事件。ロータス砦のカルと協力し、ヤギの刻印の秘密を暴いたそうじゃないか。実に心躍る冒険話だった」

「……よくご存知で……」

「この屋敷も、彼がこの国に滞在するための別荘だ。私が格別の許可を出し、保護森の中に建てさせた。言っただろう？　〝人脈〟だって」

俺は鼻の頭に皺を寄せ、そっとゼロの方を見た。
「筋は通っているな」
とゼロは言い、
「嘘の気配もありませんね」
と神父も納得した風だ。
ならば俺も折れるしかない。
「それで、番号……というのは、一体なんなんです？」
神父の素朴な疑問に、ゼロがどこか懐かしそうに答える。
「泥闇の系統の伝統のようなものだ。泥闇の系統には、常に二、三、五、七、十一、十三の数字を振られた魔女がいた。これらの数字は素数であり、己のみが己を理解できる――すわなち〝師〟となり得る存在だ。それぞれの数字には意味があり、たとえば十三番は〝終わり〟を意味する。すべての議論に結論を下す決断の数字であり、魔術的に極めて強力な数字でもある」
「では、〝ゼロ〟は？」
「特例だ」
十三番が低く答える。
「ゼロという数字は〝存在しない〟。そもそも無を現す概念だ。我々の師は、当時十歳にも満たなかった我が同胞の力に畏怖と畏敬の意味を込め、ゼロの数字を与えた」

「つまり我輩は天才なのだ」

どうだ、凄いだろうと自慢げにしているゼロはまったく凄そうに見えないが、そう見えなくてもこいつが凄い事はよく知っている。

「本来なら、私のような駆け出しの魔術師が番号を与えられるはずもないんだが――泥闇の系統は今、十三番以外がすべて欠番しているらしいのでね」

ごほん、と十三番がわざとらしく咳払いをした。和やかに話しているが、泥闇の系統に欠番が出てるのは、十三番がそいつらを殺したからだ。

「って言うか、ちょっと待てよ。つまり十三番と同格の魔女が、穴ぐらには少なくとも五人はいたって事だよな？　そいつら全員を、十三番一人で殺ったのか？」

「そうだ――だが、お前が想像しているような戦いはありはしなかった。誰一人として、抵抗らしい抵抗を見せず、まるで分かりきっていた現実を受け入れるような目をして死んでいった。――殺されていった。私は決して、あの穴ぐらの中で最も優れた魔術師だったわけではない。ただ十三という、終わりを決める数字を与えられていただけだ」

まったくわけが分からない。

魔女や魔術師って連中の考え方にはだいぶ慣れてきたつもりでいたが、時々こうして決定的にずれた感じを突きつけられる。

「私から話せる事はこれがすべてだ。詠月の目を覚まさせ、裏で手を引く者を始末するのが最

良だが、私にはその手立てがない。仮にできたとしても、詠月はさらに私を頑なに拒むようになるだろう」

「つまり、俺達があの馬鹿をひっぱたいて、〈不完全なる数字〉と手を切らせればいいのか？」

「そうだ。しかるのち、私が全力をもって〈不完全なる数字〉の殲滅にあたる。ゼロより託されたウェニアス王国で、この私が命を預けると誓った詠月をたぶからした罪――この世に生を受けた事を悔いるほど、たっぷりと償わせてくれる」

ゼロと十三番の怒り方はよく似てる。どちらも静かだが、その全身から滲み出す空気の不穏さは尋常じゃない。

その気迫に俺が密かにビビっていると、十三番はゆっくりと立ち上がった。

「今夜はここで体を休め、明日の朝出発するといいだろう。――ゼロ」

「うん？」

「――少し、話をしないか」

ゼロは一瞬、面食らったように目を瞬いた。

それから唇に笑みを乗せ、どこか挑むような目で十三番を見る。

「ほう……昔、穴ぐらでしたように、か？」

「そうだ。お前は私の知らぬ世界を見てきただろう。ならば新たな見解が生まれるはずだ。過去にたどり着かなかった議論の結論――出せるのならば出してみたいとは思わないか」

「いかにも、そうだ。久しく貴様と議論を交わしておらなんだが、過去に導き出した結論ですら、今の我輩は覆えせるだろう」

床にだらしなく座り込んでいたゼロは、そう言うなり立ち上がって十三番の隣に立った。

人外の美貌を持つゼロと十三番が並んで立つと、見るだけで魂を吸い取られそうな気がしてくる。

俺が引きつって顔を逸らすと、ナナも同じく二人から目を逸らしながら「まるで視覚の凶器ね」とわざとらしい女口調で言った。

それから、床で眠りこけているリーリを抱え上げる。

「さあ、寝室に案内するからついてきて。――あ、そうそう傭兵さん。随分熱心に私のおっぱいを見ていたけど……間違っても夜這いなんてかけてくれるなよ？」

「誰がかけるか夜這いなんぞ！　っつーか見てねぇよ！　見てたとしても不可抗力であって、そんな熱心には見てねぇよ！」

「ならいいんだ。あいにく私は女性にしか興味がないからね。ゼロからの夜這いだったら、もちろん大歓迎するのだけれど」

「あいにく、我輩は傭兵にしか興味がないのでな」

さらりと答えたゼロの言葉に、ナナは少しだけ意外そうに俺を見る。

「なるほど、そういう関係か。――ならばちょっかいを出すのはやめておこう。夜這いの代わ

りに、寝首をかかれてはかなわないからね」
すべてを察したような笑顔を向けられ、今度こそ俺は怒鳴る気も起きずに脱力した。

3

ゼロが十三番と夜通し――つってもまだ夕方だが――の議論に興じているので、久々に一人部屋だった。
一通り装備の手入れを済ませてベッドに寝転がり、ぼんやりと天井を眺めていると、恐ろしいほどの静けさがひしひしと体に染み込んでくる。
昔なら何より安心できたこの静寂が、今は妙に落ち着かなかった。眠っちまえばいいだろうと目を閉じたが、今一つ眠れない。
大体、寝るっつっても時間が半端だ。日はまだ完全に落ちきってないし、疲れてはいるが睡眠は足りている。
まあ、俺は基本的にぐーたらだから、時間が許すなら一日中でも寝てられるんだが……。
「……どうもこう……何か足りねぇ感じが……」
具体的に言うと、抱き枕的なものが足りない。
ゼロと旅を始めてからこっち、俺がどこでどんな風に寝てようと、気がつくとゼロが俺の寝

床に潜り込んできていた。
最初は邪魔だと思ってたんだが……。
まあ、なんだ。ゼロにとって俺が「いつもの寝床」であるように、知らず知らずのうちに、俺にとってもゼロが「いつもの抱き枕」って感じになっちまったらしい。
それを自覚するとどうにもますます落ち着かなくて、俺は起き上がってがしがしと首の後ろをかいた。
「……抱き枕って……なぁ……」
一応、男と女なんだがな。
いや、だからどうって事でもねぇんだが。
「夜這いとか言うけどよ……大体どうすんだよ、この体で」
俺は自分の手を見下ろした。
普通の人間の倍はある巨大な手だ。一応指は五本あるし、それなりに自由に動くから、形としては人間に近い。
だがこの鋭い爪で女の柔肌に触れるなんざ、とてもじゃないが恐ろしくてできっこない。
「キスだってな……まあ、無理だよな……マジな方のは……」
触れるだけのキスなら問題ないが、いわゆる男女がガッチリその気になってやる方は無理だろう。絵面を想像しただけで「恐怖！　真夜中の惨劇！」って感じだ。

俺が第三者でその場面に遭遇したら、躊躇なく相手の獣堕ちをぶちのめすだろう。
いやまあ……できるんだろうという事は分かる。
実際女をさらう獣堕ちだっているわけだし、その手の事件は掃いて捨てるほどある。
だが、それはあくまで無理やりやったときの話だ。合意の上でとなると、俺は未だかつて前例を聞いた事がない。
まあだから、そうなるとやっぱり人間に戻らないとだな……ダメなんじゃねえのかな。
にしては、当のゼロは俺が獣堕ちだからってのをまったく気にしてないようだが……。
「――って……俺はさっきから何を考えてるんだ……？」
はっとして顔を上げ、俺はぶんぶんと頭を振って、余計な考えを振り払った。
考えてどうする、こんな事！　馬鹿か俺は！
「やめやめやめ！　やめだやめ！」
とにかくどうも、寝られない。
俺はベッドから抜け出して、夜風に当たるために部屋を出た。
――瞬間。
「……もう入っていい？」
足元にリーリがいて、不安そうに俺を見上げていた。
……いや。

なんだ。
その……。
「今の……聞いていらっしゃいました？」
「あの……ちょっとだけ……」
「ちょっとって……？」
「夜這い……とか……キス……とか……？」
「全部じゃねえかてめぇ何を盗み聞きしてくれてんだ！　神父といいお前といい、なんで俺の部屋に聞き耳を立ててるんだ！」
そして、なんで変に気を遣って、部屋に入るのを遠慮するんだ。
いっそ最初の段階で入られた方が俺の心の傷ははるかに浅く済んだはずなのに！
「だって、リーリ分かるもん……」
「……ん？」
「お兄ちゃんが悩んでるの……分かるもん……」
……そうか。
こいつはこう見えて十七歳——立派に大人で、つまりは女だ。
男の俺よりよっぽどいろいろ悩むだろうし、よっぽどいろいろ辛いだろう。
それを思うとなんだか自分が情けなくなり、俺は肩を落としてリーリの体を摘み上げた。

そのまま、首の後ろに乗っけて捕まらせる。
「散歩付き合え。何か話があるんだろ」
「……うん」
頷いて、リーリはぎゅっと俺の頭にしがみついた。

屋敷の周囲は、獣避けのためか背の高い外壁で囲まれていた。
森を歩こうかと思ったんだが、門が固く閉じていたので、諦めて裏庭に回ってみる事にする。
イデアベルナ領主――トーレス所有の狩猟館だという話だったが、なるほど確かに、館の随所に船を模した紋章があった。
敷地内には厩舎や鶏小屋もあるが、主が不在のためか動物の気配はない。
屋敷を管理する使用人がいるのが普通だが、十二番達を匿うために暇を出したんだろう。
「……それで？　お前はなんで俺の部屋で立ち聞きをしてたわけだ？」
裏庭の隅っこに落ち着けそうな長椅子を見つけ、俺はそこにリーリを下ろして、俺も隣に腰を下ろした。
赤い夕日が木々の間から差し込んで、リーリの白い毛皮が朱色に染まっている。
「……神父様にね、お願いしたの。リーリのお願い、聞いてくれるって言ってたから」
「へぇ？　決めたんだな。何を要求したんだ？」

「顔、見せてって……あの、前に一度見たんだけど、そのときは血だらけで、ちゃんと見てなかったし……だから」

そう言えば、リーリが神父の顔をまともに見たのは、もう一人の裁定官――〝背徳〟とかいう女に捕まり、椅子に縛りつけられて拷問を受けてたときが最初で最後だ。

「もったいねぇな……もっとすげぇ事頼めよ。顔と言わず全裸見せてくれとかよ」

「り、リーリそんなの見たくないもん！　バカバカ！」

「あーはいはい、純情可憐ですこと」

リーリが拳を握り締めてぽかぽかと俺を殴るが、申しわけなくなるくらい痛くない。ぽーっとしてたら殴られている事に気づかないほどだろう。

「お……お兄ちゃんだって言えないくせに……！」

「なんで俺が神父の全裸を見たがるんだよ……」

「ちがくて、お姉ちゃんの」

「な……なんで俺がゼロの全裸を見たがるんだよ！」

見たくないの？　と真面目に聞き返され、見たくねぇよと真面目に答える。

「っつーか、見た事は何度かあるしな」

「え!?」

「いや見ただけだがよ……なんだその目は。なんで俺をケダモノを見るような目で見るんだお

前は。そしてなんで微妙に距離を取るんだ」
じりじりと俺から離れようとするリーリの額を、俺は爪の先でパチンと弾く。
リーリはいかにもネズミっぽい声で鳴いて額を押さえ、恨みがましそうに俺を睨んだ。
「で？　あいつの面見たからなんだって？」
「見せてくんなかった……」
「なんだそりゃ」
「そんなの対価にならないって……顔、見たいだけなら普通に頼めって……」
「そりゃごもっともな話だな」
神父としては親切心のつもりなんだろうが、リーリは不満そうだ。
「大体、なんで神父の顔なんざ見たがったんだよ」
「神父様と同じ事聞いてる」
「これに関しては誰でも同じ質問すると思うがな」
「……神父様、男の人なのにきれいでしょ？」
「まあ、面はいいよな」
それを言ったら十三番もナナもそうだが、十三番は人外の美貌だし、リーリは寝てたから、ナナが男だと気づいてないはずだ。
「リーリ、きれいなの好きなの。キラキラしてるのとか見てると幸せで、ずっと見てたいの」

そういや舞踏会のときも、衣装を見ていつになくはしゃいでたな。

こいつが育った悲惨な環境を考えれば、そういった綺麗どころに憧れる気持ちってのは分からないでもない。貧乏な獣堕ちなんて〝悲惨の代名詞〟にとっちゃ、普通の人間が思うよりずっと、綺麗なものってのは手が届かないくらい遠い存在に思えるもんだ。

「だからね、神父様はいいなぁって、言ったの。リーリも神父様みたいになりたいなって。そしたら、鏡を見てたらずっと幸せでしょ？　けどね、そしたら、だったら人間になればいいのにって……お城で、蛇の人を人間にしたみたいに、リーリも人間になれるって」

俺は目を瞬き、じっとリーリを見下ろした。

「……あ、そうか。お前知らなかったのか。そりゃそうだよな。知らねぇよな」

俺もゼロと出会う前は、獣堕ちってのは〝前世の悪事がその身に悪魔を宿した結果〟だと思ってた。

当然人間に戻れるとも思ってなかったし、そもそも〝戻る〟なんていう意識もなかった。

俺の夢は〝獣堕ちのままで、どっかで酒場を開いて平和に暮らす事〟で、ついでに〝獣堕ちでも愛してくれる女がいりゃいいな〟などという実に楽観的なものだった。

「……戻りたいのか？　人間に」

俺の問いに、リーリは不安げに俺を見る。

すぐに頷くかと思ったが、リーリは不安げに俯いた。

「リーリが人間だったら……神父様、リーリの事好きになってくれるかな……」
「……は？」
今、好きとか嫌いとか、そういう話だったか？
しかも神父がなんだって？
「え、なに、お前それ、そういう……？　あの神父が？」
思わず聞き返すと、リーリは小さな両手で顔を覆い、耳を伏せて尻尾の先にまで力を入れる。
それはつまり、質問に対する肯定だ。
「顔だけじゃねえか！」
「ち、違うもん……！　神父様優しいもん……！」
「どこがだよ！　お前さんざん酷い扱い受けてたじゃねえか！」
「神父様、ぶってもあんまり痛くないもん。怪我しないし。話かけると返事してくれるし……助けたからって、お礼もしてくれるって」
求める基準があまりに低い。
低いと思ったが――こいつはネズミの獣堕ちだ。こいつが受けてきた迫害は、俺みたいな恐怖の対象になり得る獣堕ちとはまったく種類が異なるだろう。
「でも……でもね……リーリ、普通の人になっても、きれいじゃないかもしれない。もしきれいでも、それって……それって本当にリーリなのかなって、思って……それに人間になったら

……リーリ、お友達いなくなっちゃう」

お友達ってのは、つまり大量のネズミだろう。

こいつは生まれた頃からずっと、ネズミと会話しながら生きてきたはずだ。

ネズミなんてのはどこにでもいるから、何をするにもそいつらと一緒だっただろうし、ネズミの声が存在しない生き方なんぞ想像もできないだろう。

それらをすべて捨ててまで、どんな姿になるかも分からない博打を打って、今まで慣れ親しんだ体を捨てて——そこまでして人間の姿が欲しいか。

「……まあ、常識的に考えりゃ……普通の人間同士だって、色恋なんてのは上手くいかないわけだろ？　つまり俺らが人間に戻ったところで、いきなり上手くいくわけじゃねえよな」

「……だよね」

「神父がダメでも、他の男が寄ってくる可能性はあるぞ？」

「けど……神父様がいい」

「そりゃ難題だなあ」

「うー……」

はっきり言って俺にはお手上げだ。

テオがいりゃあまだ何かマシな事も言えただろうが、あいにく俺に死霊の声を聞く力はない。

だが、俺にも分かる事が一つあった。——神父は獣堕ちを毛嫌いしている以上、リーリが

獣堕ちでいる間は想いが通じる可能性は万に一つもないって事だ。
「……一瞬だけなれないかな」
「あん？」
「一瞬だけ普通の人になってみて、神父様にダメって言われたら、もとに戻るの」
「お前、広間でのアレ見てただろ？　心臓貫くんだぞ」
「……痛そうだった」
広間で蛇が上げた断末魔を思い出したのか、リーリは恐怖に青ざめた。
前に十三番が〝魔法薬〟を作って、それを被れば人間に戻れるとか言ってたが、普及してないところを見ると、そう簡単に作れるものでもないんだろう。
それか、十三番が作り方を隠しているか、教える前にアルバスと決別したか。
「そもそも、あれじゃねえか？　神父ってのは結婚できねぇんだぞ、確か。しかも〈女神の浄火（アデイクニス）〉の裁定官は、基本的に死刑囚だって話だ。そんな奴が結婚できるとも思えねぇしな」
「べ、別に……結婚とか……ちがくて……」
ぎゅっと、リーリは小さな宝石の首飾りを握った。
リーリが育った大陸の南では、伴侶となる相手と首飾りを贈り合う風習がある。
「どっちにしろ、神父は諦めた方がいいだろうなあ……俺は色恋についちゃ分かんねぇけどよ。それとは別に、人間に戻って家に帰りゃ、両親は喜ぶんじゃねえか？」

この提案に、リーリは毅然として首を左右に振った。
「リーリがね……リーリがネズミだから、家はネズミにかじられないの。だから服も、食べ物も、ちょっと長持ち。それにリーリ、ネズミだからあんまり食べなくても大丈夫だし。けど普通の人になったら、ね？　ダメでしょ？」
それにね、とリーリは言葉を繋ぐ。
「あの……領主様がね。お屋敷に来ないかって、言ってくれたでしょ？　リーリ、お父さんとお母さんも一緒がいいって言ったの。そしたらいいよって。お母さん、お料理すごく上手なんだって言ったら、船で迎えに行ってくれるって。それって、リーリが獣堕ちだからでしょ？」
「あのおっさんは変わり者だからな……」
「うん……けど嬉しかった……リーリが獣堕ちだからって、喜んでくれたの……今のリーリの事好きになってくれたの、お姉ちゃんと領主様だけだから……」
俺は数に入ってねぇんだな。まあ、同じ獣堕ちだしな……。
言いたかった事をすべて言い終えたのか、リーリは深く息を吐いた。
それからチラと俺を見て、
「お兄ちゃんは？」
と聞く。
「俺がなんだって？」

「普通の人にならないの？」
俺は鼻の頭に皺を寄せた。
――それは俺がさんざん自問自答して、結局答えが出てない問だ。
俺が答えずにいると、リーリは何か思いついたように、ピンと耳を立てる。
「そっか。お兄ちゃんは、いいんだ」
「いいって、何が……」
「だって、お姉ちゃんがいるもんね。――だから、今のままでいられるね」
にへらと笑って、リーリはいかにも羨ましそうに俺を見た。
俺が――獣堕ちが人間に憧れる理由なんぞ、「そうすれば迫害されないから」だ。
そうすれば「人並みの人生」ってのを歩む機会が得られるからだ。
だがもし獣堕ちのままでもその機会が得られるなら――別に人間の姿に固執する必要はない。
ような、気がする。
昔は皮を剝ぐほど忌み嫌ったこの体だが、今ではそれなりに便利だと思っている。
ゼロに寝床扱いされるのも、毛並みを褒められるのも――まあ、意外と嫌じゃない。
俺はガシガシと首の後ろをかいた。
ったく――さっきからゼロ、ゼロって……考え方がいつの間にはあいつ中心になっちまってるじゃねえか、らしくもねぇ。

俺が立ち上がると、リーリも続いて立ち上がった。
そのときだ。
リーリが急に動きを止め、耳を澄ました。
リーリは俺より耳がいい。俺にも何か聞こえないかと、地面に耳を着けてみると、屋敷に近づいてくる馬の蹄の音が聞こえた。
「なんだ？　なんでここに馬が……」
俺はリーリを抱えて、正門の方へと走った。
するとゼロ、十三番、ナナの三人が正門に揃って立っている。
「おい、一体何が――」
「火急の伝令だ。〝魔女の道〟の一つが開いた」
俺の質問に被せるようにして、十三番が答えた。
俺とリーリが慌てるまでもなく、十三番はとっくに何者かの接近に気づいていたらしい。
ナナが正門を細く開いてしばらく待つと、夕日を背に一頭の馬が屋敷に駆け込んでくる。
マントには船の紋章――つまり港町イデアベルナ領主トーレスの紋章だ。
「トーレス様より伝令です！　この手紙を――」
馬から降りるなり、伝令は手紙を差し出した。
十三番は無言でそれを受け取り、ざっと中身を改める。

その瞬間、十三番の顔色が変わった。

ほとんど表情を動かさない十三番が、これほど表情を見せるのも珍しい。一体何が書いてあったのかと俺が警戒していると、それは俺が想像したよりよっぽど刺激的な内容だった。

「なんという、馬鹿げた事を……！　詠月め――教会関係者を国から追放し、抵抗する者は火炙りにすると布告を出した！　手始めに、坑道を襲撃した賊どもを処刑すると！」

俺はあんぐりと顎を落とし、「嘘だろ」と心の中だけで呟く。

――それは、つまり。

「教会への宣戦布告……ですか。こうなっては、教会騎士団が黙っていない」

まるで見計らったように、神父が物陰から姿を現した。

そして、

「戦争になりますよ。ウェニアス王国と教会の――いえ、周囲の国家を巻き込んだ、魔女と教会の大規模な戦争に」

と言う。

ゼロは外套を翻し、屋敷へと引き返した。

「十三番！　我輩達をラテットに送り戻せ。急ぎ城へと戻り、再度あの痴れ者をひっぱたく！」

五章　懐かしい顔

1

十三番が開いた魔女の道を通って、俺達は再びラテットへと戻ってきた。
周囲はまだ明るいが夕日も落ちて、空は藍色に染まりつつある。
ここから城に戻るまで、順調に行って丸二日――か。
「ほとんど休む間もなかったなぁ……」
「うむ。そして、ここから休む間もなさそうだ」
俺がうんざりとして尻尾を垂らすと、ゼロも少しだけ疲れを見せて呟いた。
十三番とナナは、俺達とは別口から戦争の阻止を図ると言う。
俺達が今すべき事は、とにかくできるだけ早くアルバスをぶん殴り、出した布告を撤回させる事だ。
布告だけなら、まだどうにかなる。
だが実際に行動に起こしちまったら、教会は全力でウェニアス王国を潰しに来るだろう。
そして大陸の中心で起こった戦争は、そのまま魔女を受け入れる革新派と、魔女を認めない保守派との戦争に発展する。
そのためには――。

「神父。お前、馬に乗れるか？」
俺の質問ですべてを察したように、神父は重く頷いた。
「夜、光のない街道なら可能です」
「おあつらえ向きだな。今から全力で走りゃ、フォーミカムの閉門に間に合うだろう。魔女と神父はフォーミカムで馬を買って、一足先に城を目指せ。徒歩や馬車で行くよりはるかに早い」
「君はどうするのだ？」
「チビを連れて後から追いかける。とにかく今は馬を手に入れるのが先決だ」
俺はリーリとゼロを抱え上げた。
だが教会を飛び出した瞬間、全身を絡め取った違和感に足が竦む。
踏み出すな、下がれと命じる本能に従って、俺は大きく飛び退った。一瞬遅れて、その足元に一本の投げ槍が突き刺さる。
「なんだ!?　待ち伏せ――」
「あっははは！　はっずれぇ！　残念だったわねぇ、ラウル。当たらなかったわねぇ。当てればご褒美あげたのに、あなたって本当にダメな下僕ねぇ」
町中に響き渡るような甲高い哄笑に、俺は全身の毛を逆立てた。
ゼロの体も固く強張り、神父が忌々しげに舌打ちする。
リーリが「あれ」と建物の屋根を指差したその先に、二つの影があった。

見なくてもその声で、その口調で、その台詞でどこのどいつか嫌でも分かる。
「お前……ら……なんでここに――！」
甲冑を身に着けた馬の獣堕ちと、その背に跨る亜麻色の髪をした片眼鏡の女。ラウルと、黒竜島の王女アムニル――ひいては、王女の体を乗っ取った死にぞこない魔女サナレ。
「お久しぶりねぇ、ゼロ、傭兵さん、神父様に――あら？　何かしらその小さいの。そんなの前にいた？」
「あ、あの……」
「答えなくていい！　あいつは敵だ」
馬鹿正直に答えようとするリーリを黙らせ、俺はリーリとゼロを降ろして後ろに下がらせた。
「クソ……急いでるって時によりによって……！」
奴をぶち殺したくて仕方がない俺としては、サナレとの対面は願ってもない事だ。
だが今は何よりアルバスのところに急ぎたい。逃げるってのが最善策だが――向こうにはラウルがいる。逃げ出そうにも、あいつに追われたら振り切れない。
「戦闘必至……ですか」
「そのようだな。しかもお姫さんの〝体〟を殺すわけにゃいかねぇとくる。まあ、手足の一本や二本なくなったところで、魔法があればどうとでもできるんだろうが……」
「救護用員がいるというのは重要ですね。多少の無茶は押し通せる」

「二人とも……何度も言っているが、魔法は万能ではないぞ。人間の体は極めてもろい。致命傷を与えれば、傷を塞いだところで助からない事もある」

俺が剣を抜き、神父が大鎌を構えると、サナレがラウルの背中から屋根の上に降り立った。

「やあねえ、殺気ギラギラさせちゃって。血気盛んねえ、恐ろしいわねぇ。あたしはちょっとおしゃべりに来ただけなのに」

ゼロは吐き捨てた。

「〝足止めに〟――の間違いだろう？　十三番を陥れ、この国を教会との戦争に導くために、貴様がわっぱをたぶらかした。気づかぬと思ったか？　あの日、舞踏会でわっぱが口にした〝どうせ死ぬなら、獣堕ちのまま生かして魔法使いの役に立てた方がいい〟という言葉――いかにも貴様らしい考え方だ」

「ご明察！　そうよ、足止めよ。だってせっかく上手く計画が進んでるのに、邪魔されたくないじゃない？　けどそれが分かってても、あなた達は足止めされるしかないの。そう――テルゼムの港町ルートラで、〝背徳〟の裁定官ちゃんが暴れたときみたいにねぇ」

その言葉に、リーリがピンと耳を立ててサナレを見た。

ルートラで〝背徳〟の裁定官が起こした一件には、リーリも深く関わってる。両親を連れ去られ、父親は拷問を受けたんだ。

「なんだと思ってた？　あの事件。なんのためだと思ってた？　あの一件で戦争にまで持って

いけるなんて、誰も思っていないわよ！　ただの時間稼ぎよ、足止めよ。アルバスちゃんがあたしに心を許すまで、もうちょっと時間が欲しかっただけ。おかげさまで、今ではあの子はすっかりあたしの虜。なんでもあたしの言う通りに動いてくれる。――笑っちゃうわよねえ、あたしのこと〝おばあちゃん〟ですって！」

楽しくてたまらないというように、サナレは胸を反らしてゲラゲラと下品に笑った。

その隣に立つラウルの表情は、甲冑に隠されて分からない。――だが、油断なく俺達を警戒しているのは確かだった。

「驚くほど簡単だったわ。寂しくて、孤独で、誰かに認めて欲しくて、慰めて欲しくて、優しくして欲しくてたまらない――そんな子供を操るのって、なんて簡単なのかしら。いつから狙ってたと思う？　いつから計画してたと思う？　そうね、いつだったかしら？　ああ、そうそう――黒竜島でおもしろい手紙を拾ったときだわ。【魔女の手紙】だなんて、興奮してついつい遊んじゃった」

黒竜島――【魔女の手紙】？

何の話だ？

確かに一度、俺は黒竜島で【魔女の手紙】をなくした。

船が壊れて、海に投げ出され――王女の手で投獄された際に、装備まるごと奪われたのだ。

紙切れだと間違われた【魔女の手紙】はゴミとして捨てられ、それは後々無事に戻ってきた。

それを――拾った？

「あら、分からない？　ああ、そうよねえ。だってちゃんと〝返してあげた〟もの。ちらっと見たらあんまり長々どーでもいいこと書いてるから、〝要件のみの返信を求む〟って返信してあげたあとにねぇ！　あたしって写本の才能で〈ゼロの魔術師団〉に入ったの。人の字を真似するのとっても上手だから、きっと傭兵さんからの返信だと思ったでしょうねえ」

途端に、アルバスの言葉が耳に蘇ってくる。

――それはよーへいのせいじゃんか！

なぜ手紙の内容が簡素になったのかと聞いたとき、アルバスはそう言った。

アルバスが最後に長い手紙を書いたのは、黒竜島の直後だった。

それには何が書いてあった？

俺を騙ったサナレに迷惑だと切り捨てられて、あいつはいつものように文句や言いわけを書き連ねた。そして俺はいつものように、そっけない返信を返し続けた。

そうして、アルバスからの手紙は少しずつ短くなっていた。違和感には気づいてた。だが、追及しなかったのは明らかに俺の怠惰が原因だ。

正直言って、面倒だった。

報告なんて本当に必要なのかと、疑問にさえ思っていた。

アルバスからの無駄な近況報告がなくなって、楽になったとさえ思っていた。

「最初から最後まで、励まして欲しいって気持ちがいっぱい詰まった手紙だったわ。それを邪険にされて、あの子どう思ったかしら？　きっと悲しかったわよねえ。そこをあたしが甘やかしてあげたら、どうなるかしらと思ったの。その辺の人形に取りついてみたら、なんとそれが〝おばあちゃんとの思い出の人形〟だって言うんだから、利用しない手はないじゃない？」

「……なあ、チビ。嫌な奴だろ？」

俺はそっと、リーリに声をかけた。

リーリの小さな体から、ピリピリとした怒りが伝わってくる。

「うん……リーリ、あいつ大っ嫌い……！」

ふと気がつくと、町のあちこちにネズミの姿が目立つようになってきた。

四方八方からネズミが集まってきて、一軒の民家に次々と吸い込まれていく。

「あいつのせいで……みんな、悲しい……あいつのせいで……」

ラウルが違和感に気づいたように、周囲を気にし始めた。

気づかれたら逃げられる。仕掛けるなら今しかない。

「――やれ！　チビ！」

指示を飛ばして、俺と神父は同時に飛び出した。

俺の合図で、リーリが無数のネズミをラウルとサナレにけしかける。

「なんだ、このネズミ……！　姫様！」

無数のネズミに足をかじられ、ラウルが膝を崩して屋根に崩れ落ちた。
サナレも同じくネズミにたかられ、悲鳴を上げてうずくまる。
その間に、俺と神父は壁を駆け上がって屋根の上に躍り上がる。
力のある俺がラウルを押さえ、神父が糸でサナレを縛り上げた。
「悪いなラウル。寝ててもらうぞ……！」
押さえつけたラウルの首を締め上げて意識を奪うと、動きを封じられたサナレがネズミの大群に埋もれながら喚き散らした。
「ちょっとやだ！　何よこれ――！　女を縛るなんてどういう趣味なわけ？　もう、ラウルの役立たず！　なんでもいいから、このネズミどうにかしてよ！」
「どうにかして欲しいなら、お姫さんの体から出てくんだな。てめぇは最終的に必ず殺すが、今はただ目障りだ。失せろ！」
サナレの顔が怒りに歪んだ。――次の瞬間。
にたりと、勝ち誇ったように口角を持ち上げた。
「残念だったわねぇ。お二人さん。〝仕留められない〟時点で、あなた達に勝ち目はないわ」
「何――！」
パキン、とサナレが縛られた状態で指を弾いた。
途端に俺の視界が真っ暗になり、すべての五感が消失する。

「なんだ……？　一体どうなって――」

クスクスと、暗闇の向こうからサナレの笑い声が聞こえた。

その声がだんだん遠ざかり、暗闇に溶けるように消えていく。

すべての感覚を失う直前、

「死の章・第二頁――〈死憧夢〉。新作魔法の〝無詠唱発動〟って奴よ。王女様の体だと、ほんと、魔法が使いやすくて楽しいわぁ。せいぜい、いい夢を見てちょうだいねぇ」

そんな声が聞こえた。

2

気がつくと、俺は一人で見知らぬ村に突っ立っていた。

建物は全部木造で、教会はなく、周囲をぐるりと森に囲まれている――そんな、本当に人間が暮らしていけるのか疑問なほどのど田舎村だ。

「こいつぁ……また強制召喚か？　俺だけどっかに飛ばされたって……？」

少なくとも、俺がさっきまでいたラテットじゃない事は間違いない。

――だとしたら、どうする？

いや、待てよ。

確か強制召喚ってのは、魔法陣がなきゃ使えないはずだ。もし屋根の上に魔法陣があったんなら、神父もあのクソ魔女も一緒に飛ばされてるはず。

まずは神父を見つけるのが先決だろう。

離れた場所にいたゼロとリーリはラテットにいるはずだから、アルバスをひっぱたく仕事はあいつらに任せりゃいい。

「おい、神――」

「いやぁあぁ！」

女の叫び声が聞こえて、咄嗟に声の方に駆け出した。

この状況で聞こえた悲鳴が俺達に無関係なはずないし、無関係だったとしても、悲鳴の上がった場所に向かえば神父と合流できるだろう。

声のした方に向かって走ると、すぐに村の中心――井戸のある広場に出た。

そこに広がっている光景に、俺は完全に動きを止めた。

「……こ、いつは……一体――」

全身の血が凍る。

なんで俺は、ここを〝見知らぬ村〟だなんて思ったんだ？

〝見知らぬ〟どころか、ここは――この村は。
広場には、三つの死体が並べられていた。
それぞれの死体に村人が縋りつき、なんで、どうしてと泣き喚きながら繰り返している。
そんな死体と、死体に縋りつく連中を離れたところから凝視しているガキがいた。
そいつは白い体毛に、灰色の縞模様が入った獣堕ちだった。
ガキと言っても、体の大きさは周りの大人とさして変わらない。腕力も十分あるし、爪は鋭く、その気になればいくらでも戦える事を、俺はよく知っていた。
なのにあのガキは長い尻尾を足に巻きつけ、恐怖と緊張で全身をガチガチに硬直させている。
「みんなが逃げる時間を稼いでくれたんだ……」
死体を囲む連中のうち、誰かがぽつりとそう言った。
「盗賊が……獣堕ちの首を狙って……」
その言葉で、獣堕ちのガキの肩がびくりと跳ねる。
――あれは俺だ。
十三歳――村を出る直前の。
これは幻覚だ。
その証拠に、どんなに近づいても、ここの連中は俺の存在に気づかない。
「やめろ……こんなもん見せてどうする気だ！　時間稼ぎのつもりか、サナレ！　ただの幻覚

じゃねえか！　クソ、早く目を覚ませ俺の馬鹿野郎！」
拳を握り締めて、俺は自分の顔面を殴りつけた。
痛みはあったが、目は覚めない。
畜生、と罵って頭を振ると、突然周囲の景色が変わった。
誰かの家の中だ。
窓の外は暗く、とっくに夜中だろう。
それなのに、村中の大人達が集まっていた。
それで、俺は思い出す。
盗賊の襲撃のあった夜――両親は俺を家に置いて出かけていった。
「心配しなくていい。お前は何も悪くないんだ」
そう言った親父の後ろ姿が、なぜかひどく恐ろしかった。
「さあ、もう寝なさい。ちょっと出かけてくるだけだから」
そう笑ったお袋の、無理やり作った笑顔が苦しかった。
だから俺は、出かけた両親の後をこっそりと追いかけて――。
俺は部屋を見回した。どこかに――そう、確か裏口だ。家の外に飛び出してみると、家の壁に張りついてうずくまる、ガキの頃の俺がいた。
「あの子を狙って来たんだよ」

「だから獣堕ちなんて、とっとと村から追い出せって……」
「なんだとてめぇ……うちの坊主が悪いってのかよ！」
「だってそうじゃねえか！　お前んとこのガキのせいで三人も死んだんだぞ！」
「よしなよ！　あの子が殺したんじゃないし、あの子が産まれたとき、殺さず村で育てるってみんなで決めたんじゃないか！」
「けどよ、盗賊はまた……来るだろ？　あいつは悪くねぇけど、その首を狙ってさ……そしたら、また……今度はうちの子かもしれねぇ……！」
「落ち着くんだみんな！」
「けど、村長！　あんたの息子だって――」
「あいつは村のみんなを守って死んだんだ！　そして、あの子もこの村の子だろう。あの子は獣堕ちだが優しい子だ。誰に殴られたって、一度も殴り返した事はない。でかい図体で料理にばっかり熱心で……そんな子を盗賊に差し出すのか？」
しんと、大人達は黙り込んだ。
――ああ、そうだった。
俺のせいで死んだ三人――そのうち一人は、村長の一人息子だった。

結婚して、娘が産まれたばかりで、俺は赤ん坊を抱かせてもらった事が嬉しくて、毎日のように赤ん坊を見に行った。
俺も大きくなったらこんな家族が欲しいと、そう思った。

その家族を、俺が壊した。

俺にはそれが耐えられなかった。
なんのための、力だ。
この爪は、この牙は――。
盗賊が襲ってきたとき、どうして俺は逃げ出した？
どうして踏みとどまって、村のみんなを守らなかった。
俺は村を飛び出した。森を駆けて、血の臭いを追いかけて、盗賊の連中が野営する洞窟を見つけた。
次の襲撃に備えて剣を研ぐ連中の姿に、全身が熱くなったのを覚えている。
殺さなければと思った。
ここで俺がこいつらを殺さなければ、また村のみんなが襲われる。俺が村を出たところで変わらない。こいつらを殺さなければ――殺さなければ。

剣は持ってなかったが、俺には爪と牙があった。
爪を出して腕を一なぎすれば、面白いくらい簡単に人の頭が潰れ、肉がこそげ、血が噴き出した。
盗賊の数はざっと数えて二十数人――夢中で殺して、殺して、逃げる奴も追いかけて、命乞いも聞かずに引き裂いた。
がさがさとした血の臭いがまとわりつく。鉄臭くて、生臭い。
俺は自分の手を見た。
爪に肉片が引っかかっている。周囲を見回すと血の海だ。
気がつくと、ガキの頃の俺の姿は消えていた。
ただ血だまりの中に、俺が一人で立っている。
「後悔なんかしてねぇぞ……村を守るためだった……」

「――おれの事は守ってくんなかったくせに」

すぐ背後から甲高い少年の声が聞こえて、俺は愕然として振り向いた。
「……テ……オ……？」
日に焼けて茶色く抜けた髪に、そばかすの散った顔。

だがいつも笑っていたその顔は、冷たく凍りついたまま動かない。
「おれのためには、戦ってくれないくせに」
その腹からじわりと血が滲み出して、テオが膝から崩れ落ちた。
「テオ！」
慌てて抱き起こすと、小さな体からじわじわと血が滲み出し、温かかったテオの体がみるみる冷たくなっていく。
「仇を討ってよ、おじさん……あいつを殺して……あの……魔女を」
青ざめた唇で囁くように言い残し、テオは動かなくなった。その体が俺の腕の中でどろりと溶けて、血だまりの中に消えていく。
心臓が早鐘を打っていた。
息が上手く吸えなくて、俺は胸を押さえてうずくまる。
「幻覚だ……幻覚だ……幻覚――ッ」
このぬめる血の感触も、錆臭い臭いも、テオの言葉も何もかも。
全部あいつが――あの憎々しい魔女が見せた幻覚だ。
そのとき、俺を呼ぶ声が気がした。
振り向くと、不気味な影がぼんやりと立っている。
墨で塗りつぶされたように顔が見えず、声も不明瞭で何を言っているのか分からない。

――あいつを殺して。

テオの声が聞こえた。

――あの魔女を。

立ち上がり、俺は影を見下ろした。

殺せばいいのか、あれを。

あの魔女を殺せば終わるのか。

この幻覚が消えるのか。

ああそうか――あいつは。あの魔女は。

「てめぇを……殺せば……」

俺は拳を握り締めた。

「――サナレぇえええ！」

剣を振り上げ、黒い影に襲いかかる。

影は逃げようとしなかった。ただ、身動ぎを一瞬。

途端に凄まじい爆音が弾けて、俺の体は吹き飛ばされた。眩しい光にすべてが吹き散らされて、息が詰まるような衝撃が背中から腹へと抜けていく。

何かに背中から突っ込んだらしいと理解するのとほぼ同時に、無数の瓦礫が降ってきて、俺の頭やら腹やらをガンガンと痛めつけた。

「い……てぇ……！　クソ、今のは……！」

「よりによって他の女の名を叫び、我輩に襲いかかるとは――女を襲う礼儀も知らぬようだな、君は。見間違えるな、我輩だ！」

月明かりを背にして、今まで見た中で一番不機嫌そうな顔でゼロが俺を見下ろしていた。

そう――ゼロだ。そう認識した瞬間、冷たく新鮮な空気が肺を満たし、濁って霞んでいた視界が開ける。

俺はようやく我に返り、瓦礫を押しのけて跳ね起きた。

「な……なんだ……!?　何がどうなって――なんでお前が……ッ」

「落ち着かぬか、この痴れ者！」

「あぐっ！」

拳で鼻面を殴られて、俺は痛みに叫んで背中を丸めた。

「テメェ、何し――ッ」

何しやがる、と言いかけが俺の鼻に、今度はゼロが人差し指を突きつける。
そうして、
「君が！　サナレごときの！　幻覚に！　血迷って！　この我輩を殺そうとしたからだ！」
そのまま爪が食い込む勢いで何度も強く鼻をつつかれ、俺はいてぇいてぇと悲鳴をあげた。
「分かった！　悪かった！　ちょ、待てやめろ血が出る！」
「我輩は怒っているのだ、傭兵！　珍しく腸が煮えくり返っている！　サナレだけではなく、君にもだ！　我輩は期待したのだ……君が我輩との愛と絆の力で、サナレめの幻覚を打ち破り、自らの力で目を覚ましはしないかと。だが君はまんまと我輩を殺そうとした！」
「愛と絆の力って……んな無茶な……！」
「サナレめは馬のの背に乗り、逃げ去った。もう用はないとばかりにな。さあ、立て傭兵。グズグズしている暇はないぞ」
ゼロは俺の体を突き放すようにして、乱暴に立ち上がった。
あとに続いて俺も立ち上がり、憤懣やるかたなしといった感じのゼロを見下ろす。
――俺は。
殺そうと、したのか。こいつを。
殺そうとしたな、確かに。
「……よかった」

「何がいいものか。少しもよくはない」
「いや……お前を殺さずにすんでよ。よかったって……思ってな」
心底からの言葉だった。
もしあのままゼロを殺していたらと、想像するだけで自分の首を掻っ切りたくなる。
ゼロは俺の言葉に面食らったように黙りこくり、複雑そうに顔を顰めた。
「どうして君はこう……間の悪い……！　素直になるのなら、もう少しマシな状況でなるべきだろう……」
「間が悪いって？」
俺は周囲を見渡した。
――そういや、神父も俺と同じ魔法をかけられてたよな。
あいつはどうなったんだ？　ゼロがどうにかしたのか？
と思ったが、神父の姿が見当たらない。――それに、リーリの姿も。
さあと、俺は青ざめた。
俺はサナレの魔法で悪夢を見せられ、ゼロを敵だと思い込んで攻撃を仕掛けた。
それが神父にも起こっているのだとしたら――。
ようやく、ゼロの焦りに俺の理解が追いついてくる。
「チビと神父は……どこ行ったんだ……？」

ガクガクと全身を震わせながら、リーリは高い木に登り、その幹にぎゅっとしがみついていた。

†††

息を殺してじっと耳を澄ますと、神父が草を踏む音が聞こえてくる。

すぐそこまで迫っていた。ゆっくりと獲物を追い詰めるように、じりじりと、散歩のような足取りで近づいてくる。

――なんで、なんで、なんで。

心の中で繰り返し自問しても、その答えは出てこない。

なぜ、自分は神父に殺されそうになっているのだ。サナレに何か魔法をかけられ、苦しんでいる神父に駆け寄っただけだ。

いや――理由なんて一つだ。

暗い夜の闇のなか、神父は眼帯を外してリーリを見た。

その途端に吐き捨てられた「汚らわしい獣堕ちめ」という言葉が、すべてを物語っている。

神父は最初から獣堕ちを嫌っていた。そしてきっと、最初から殺してしまいたいほどにリーリをおぞましく思っていたに違いない。

それが、サナレの魔法で表面化したのだ。
馬鹿みたいだ、とリーリは思った。
あんなに嫌われて、憎まれていたのに、〝人間になったら好きになってもらえるか〟など――。
たとえ人間の姿になったって、リーリが元は獣堕ちだった事実は変わらない。
それを、あの神父が許してくれるわけがない。――そんな事が、命の危機が迫っているこんな状況でも悲しかった。
――どうしよう、これから。
いつまでも木の上に隠れているわけにもいかない。
逃げなければ殺されてしまう。
だが、どこまで逃げればいい？
このまま逃げ続けて――逃げ切って。
それで、どうなる？
疑問に思った瞬間、ザン、と鋭い音がしてすぐ近くの枝が落ちた。
しまったと思ったときにはもう遅く、リーリがしがみついていた枝もあっという間に切り落とされる。
無様に地面に落下して、リーリは悲鳴を上げて逃げ出した。だが、見えない糸に絡め取られ、引き寄せられ、身動きも取れずに地面に転がる。

「――見つけましたよ、堕落の象徴。仕留めたと思っていたのに、生きていたとはしぶとい人だ。今度こそ、あなたの息の根を止める」

神父の冷酷な目がリーリを見下ろした。肩に担いだ大鎌の刃が、月明かりにギラギラと光ってみえる。

「や……やだ……やだやだ神父様！　リーリ何もしてない！　してない、してない！」

「あなたは私のすべてを奪った。――私のすべてだったあなたが！」

神父が何を言っているのか分からなかった。

ただその赤錆色の鋭い目が、リーリではなくどこか遠い誰かを見ている。

滲み、溢れ、滴るような、ありったけの憎悪を込めて。

「せめて、ひと思いに――！」

神父が鎌を振り上げた。

――ああ、死ぬんだ。

こんなところで。こんな風に。――こんな、まるで、誰かの身代わりのように。

「やだ……」

リーリは小さな手で土を掴んだ。

「やだぁあぁぁ！」

瞬間。

「お――らぁあぁぁあ！」
「何――ッ!?」
巨大な熱量の塊が、猛烈な勢いで神父に突進し、その細い体を跳ね飛ばした。
神父の糸に絡め取られていたリーリは、その勢いに引っ張られて空中に放り出される。
地面に落ちる事を覚悟して目を閉じると、がっしりとした両腕に抱きとめられて、リーリはきょとんとして目を瞬いた。
「あーっぶねぇー。間一髪だったな」
と、聴き慣れた声がする。
顔を上げると、大型肉食獣の恐ろしげな顔が、凶悪な牙を見せてリーリに笑いかける。
「危なく、神父がチビに殺されるとこだった」

4

実際、無数のネズミが神父に襲いかかる寸前だった。
ネズミと言わず、リスと言わず、とにかくありとあらゆるげっ歯類が、今まさに殺されようとするリーリを救うべく、凶悪な牙を剝いて神父へと殺到していた。
その恐るべき死の恐怖から神父を救うため、全力を出して体当たりをしたわけだが――。

「傭兵よ……肋骨がすべて破壊され、内蔵が破裂しているぞ。これではネズミにたかられていた方がはるかにマシだったと我輩は思う」

と、地面に倒れたまま動かなくなった神父を検分していたゼロが言う。

「んなアホな！　そいつは〈女神の浄火〉の裁定官だぞ！　衝撃殺して致命傷を避けるくらいわけないだろ！」

「神父は幻覚に囚われて暴走していたのだ。おそらく、君の接近にまったく気づいていなかったのだろう」

確かに、俺も幻覚を見ていたときは、周りがまったく見えていなかった。

ぼんやりとした謎の影を、ゼロとは気づかず殺そうとしたほどだ。

俺とゼロの会話を聞くなり、リーリは俺の腕から抜け出し、大急ぎで神父に駆け寄った。

「し、神父様、死んじゃうの？」

「幸いな事に、我輩は魔女なのでな。この程度の怪我ならば魔法で癒せる。幸い、傷を受けてまだ間もない。失血による衰弱も少ないだろう」

「そいつ、たぶん俺より魔女の恩恵にあずかってるぞ……治療的な意味で」

まあ、普通の人間は獣堕ちよりも脆いわけだから、当然と言えば当然なんだが……。

「サナレの魔法も打ち消した。目が覚めればもとに戻っているだろう」

「……もとに戻るの？」

不安げにリーリが聞いた。
ゼロはその頭をくしゃくしゃと撫でて、「無論だ」と答える。
「もう君を殺そうとはしないだろう。傭兵も見ての通り、我輩を殺そうとはしていない」
痛いところを突かれて、俺はぐっと言葉を詰まらせる。
リーリはゼロの言葉にあんぐりと顎を落とし、「お兄ちゃんが!?」と叫んだ。
「そ……そういう幻覚を見せられたんだよ！」
「……じゃあ……神父様、リーリが嫌いだから……じゃ、ないの……？」
「神父が君を狙った理由か？　ただ、君が近くにいたからだろう。傭兵の話を聞く限り、これは悪夢で見た憎悪の対象を、近くにいる人間に当てはめてしまう魔法らしい」
「ああ、俺はこいつがサナレに見えた。だから神父も、チビが別の誰かに見えてたんだろ」
「……やっぱり？」
「気づいてたのか？」
うん、とリーリはうなずく。
「なんか、ゆってる事……変だったし……」
そういやぁ、「すべてを奪った」とかなんとか言ってたな。
「う……ぐっ……」
「――目が覚めたか、神父よ」

ゼロが声をかけると、神父が薄く目を開き、勢いよく起き上がった。
それから辺りを見回して、「夢？」と呟く。
「昔の……夢を……見ていたような……」
「ああ、ひどい悪夢を見ていたようだな。サナレの魔法によるものだが、もう心配ない」
サナレの、とゼロの言葉をなぞる神父は、まだはっきりと状況を理解できてはいないようだ。
だが、傍に落ちている杖が大鎌に変形している事に気づいて目を見開いた。自分が何をやらかしていたのか気づいたらしい。
「……どちらです？　私が……追っていた獣堕ちは……」
「そりゃ――」
「あっち」
俺が答えるより早く、リーリが俺を指さした。
――確かに神父からすりゃ、俺を殺そうとしてたって言われた方が気分的にはマシだろう。
だが俺は思わずぎょっとした表情を浮かべちまったし、眼帯を外している神父は俺のその表情を見ちまった。
これで、神父にバレないわけがない。
神父はなんとも言えない表情で、黙って俯いているリーリを見た。
「私をかばうんですか……？」

「……違うもん」
「私に殺されかけたというのに――」
「リーリ、隠れてただけだもん」
ぷう、とリーリは頬を膨らませる。殺されかけたんだから責めて怒りゃいいのに、そのつもりはないらしい。
神父はそっと額を押さえると、
「――まあ、私はどちらでもかまいませんが」
とこの話題を打ち切った。
まあ、追及したところでどうでもいい話だ。リーリに神父を責める気がない以上、どっちだろうとどうでもいい。
「しっかし……随分街道から離れちまったな」
ラテットの周りはもともと牧草地だが、そこをはるかに超えて森の中だ。
「あぅ……リーリ、いっぱい逃げたから……」
「まったくだぜ。逃げるならフォーミカム方面に逃げろよな」
冗談のつもりで言ったんだが、神父の容赦ない一撃に後頭部を強打され、俺はその場にうずくまった。
ゼロも「今のは君が悪い」と味方してくれず、一番怒って然るべきのリーリだけが俺を心配

してくれる。

「どちらにせよ、フォーミカムの閉門にゃもう間に合わねぇ。多少脅すなり金を握らせるなりすりゃ無理やり入る事はできるだろうが、馬を調達して町を出るのはまず無理だ」

「とすると、君が走ってプラスタに向かうのが最速という事になるのか？」

「いや……休まず走り通しても、着くのはせいぜい明日の夜ってとこだろう。フォーミカムの開門を待って馬を調達するのとさして変わらねぇ。しかも、魔女は抱えて走れるが、チビと神父は置いていく事になる」

まったく、とゼロは忌々しげに息を吐いた。

「まんまと足止めをくらったか。フォーミカムで馬を得れば、夜明け前にはプラスタに着けた事を思うと、この遅れは少々痛い」

「ともかく、一度ラテットに戻りましょう。このまま悪路を進むより、ラテットから街道を目指した方がいくらか早いでしょうし、開門前にフォーミカムに着ければいくらか体を休める時間が取れます。何より、我々は足止めをされてしまった」

神父の言わんとしている事は分かる。

つまり、俺達は後手に回ったという事だ。

この足止めによって作られた時間を使って、サナレが何も仕掛けてこないわけがない。

サナレにとって一番避けたいのは、俺達に処刑を邪魔される事だろう。俺達をプラスタから

遠ざけるために、奴が何を仕掛けてくるか――。

それは、思ったよりも早くやってきた。

場所はラテットの教会前。――言うなれば振り出し地点だ。

そこからプラスタに向かおうとする俺達の前に、再び立ちはだかる影がひとつ。

待っていたのは犬面だった。

なるほどな、とゼロがうんざりした様子で額を押さえる。

「わっぱに我輩達が十三番と接触したと伝えたか。ならば狼のが出てくるのは必然」

「犬面だけならまだいいが――こりゃ盛大なお出迎えだぞ」

俺は空気の臭いを嗅ぐ――幸いこちらは風下だ。さほど遠くない場所から漂ってくる武装した兵隊の臭いが、穏やかじゃない待ち伏せを物語っている。

「――十三番は？」

と、開口一番、挨拶抜きの詰問だった。

「教会を追放するって？」

質問には答えずに問うと、犬面は全身を緊張させた。

「で、追放に応じない教会関係者は公開処刑にするんだってな。手始めに、坑道で襲ってきた馬鹿どもを殺すんだろう？　楽しそうな計画じゃねえか。派手に戦争が始まるぞ」

「お嬢さんの決定だ」
「で、お前は従った。考える頭のねぇ犬っころらしいじゃねえか」
犬面は表情を硬くした。
「協力できねぇなら、無理にとは言わねぇよ。お嬢さんは、干渉しないなら危害を加える気はないってよ。このまま東に進めば、東坑道に続く街道に出られる」
「馬鹿かてめぇは！　魔女と教会の戦争だぞ、これは。この国を出たところで、逃げられるような規模じゃねぇ。てめぇらが始める戦争は、世界中に広まるぞ。そんな事も分からねぇなら――」
「どうせいずれは戦争になるんだ！」
犬面が鋭く吠えた。
「魔法国家なんてのを立ち上げた時点で、教会との衝突はどうしたって避けられねぇ。敵と味方を見分ける必要があるんだ。同盟候補者は、舞踏会のために国内に集ってる。そこで教会関係者の公開処刑をして、これに参加した奴とだけ正式な同盟を結ぶ」
「――では、処刑への参加を拒んだ者は？」
ゼロの静かな問いに、犬面は引きつった笑いを浮かべてみせた。
「分かるだろ……？　戦争に向けての捕虜だ」
なるほど、どうあっても外道国家の道を突き進みたいらしい。

教会関係者を追放し、坑道を襲撃した貴族の子息を公開処刑にかけ、それに賛同しなかった招待客を人質にする――教会騎士団が派遣される大義名分の揃い踏みだ。
「てめぇ、プラスタへの道に陣を敷いてるな。わざわざ風上で野営させて、俺達への威嚇のつもりか？　坊主のとこへは行かせねぇって事か」
「あんたらが、お嬢さんの敵に回るならな」
「力ずくでも、か？」
「力ずくでも、だ」
犬面は剣を抜いた。
ゼロと神父が身構えたが、俺は腕を上げて二人を下がらせる。
「交渉は決裂って事だな……残念だぜ、兄貴」
「やる気なら仲間を呼べよ犬面。俺と魔女と神父を相手に、てめぇ一人でどうにかできると思ってんのか？」
「泥闇がいる時点で、何人集まったところで同じだろうよ。どちらにせよ、あんたらがその気なら俺は死ぬ。それでも、俺はソーレナからお嬢さんを託された。あらゆる事から守れってな。そしてお嬢さんは〝悪役〟になる腹を決めた。だったら俺はそれに従う。兄貴がお嬢さんの敵になるってんなら――」
犬面はまっすぐに俺を睨んだ。

その目は、牙は――なるほど、十分狼らしい。
「俺は命に代えても、ここを退くわけにはいかねぇんだよ！」
犬面が剣を構えたまま、その場に低く腰を落とした。犬面の剣は細身で、俺の大剣よりは頼りなく見えるが、刺突という面で見ると厄介だ。甲冑の隙間を縫って本体を貫けるし、獣堕ちにとって天然の防具である分厚い毛皮や鱗ものともしない。
犬面が部下として従えている連中の態度を見る限り、こいつが偉大なるソーレナの下僕をしていた実力は本物なんだろう。
なるほど、少し気を抜けば、俺は犬面に心臓を貫かれて死ぬ事になるわけだ。
――少なくとも、犬面はそう思っているらしい。
「泥闇がいる時点で……ね。舐められたもんだな犬面狼」
俺は軽く首を鳴らし、腰から提げていた剣を地面に捨てた。そのまま、なんの警戒もなく無造作に歩いて犬面との距離を詰める。
そんな俺の行動に、犬面の表情が引きつった。
「なんのつもりだよ、そりゃ……素手で俺とやり合うって、どんだけ馬鹿にして――」
俺は拳を握り締めた。次の瞬間、一気に犬面との間合いを詰めて、その顔面を殴り飛ばす。
犬面は眉間にもろに拳をくらい、軽くよろけて後退した。
どうにか堪えて剣を構え直し、「てめぇ」と唸って俺を睨む。

「ふざけんのもいい加減にしやがれぇえ！」

剣を握りこんで、犬面が大きく足を踏み出した。その剣の切っ先が狙うのは、この期に及んで俺の腹だ。

「ふざけてんのはどっちだ。手加減が必要な相手も見極められねぇのか？　心臓を狙えよ馬鹿野郎！」

俺は下がらず、逆に踏み込んであえて刃を腹に受けた。そのまま刀身を掴み、刃を握らないように力を込めて引き寄せれば、刺突の勢いもあって犬面は大きく体勢を崩す。

つんのめって前に出たその横面を固めた拳で殴りつければ、鈍い音とともに犬面の歯が数本根元から吹っ飛んだ。

痛みに呻いてよろけた犬面の腕を掴んで、手首と肘を同時にへし折る。

「ぎ――あぁあああぁ！」

剣を落として膝を突いた犬面の頭を鷲掴みにし、無理やり持ち上げて立たせると、歯の折れた口からだらだらと鮮血が滴った。

「で？」

「あ……ぐ……あが――」

「どこまで本気だ、犬面。どのくらい本気で俺らを止める気だ？　押し通って欲しいのか？　止めようとしたって体面だけが必要なだけなら、こんだけやられりゃ十分だろう。命乞いをし

ろ。そうしたら、うちの魔女がその怪我を治してやるし、味方につくなら連れてってやる」
犬面の腕が宙をさまよい、俺の腕を掴んだ。鋭く立てた爪が俺の皮膚を突き破り、肉を裂いて血が滴る。
――これが答えだ。
俺は犬面の体を地面に投げ捨てた。
「……一旦退くぞ、お前ら。どうやら、本気でここを通って欲しくないらしい」
俺が犬面に背を向けてそう言うと、神父が声を荒らげて俺を罵る。
「馬鹿ですか！　一体何のためにその獣堕ちをボコボコに――」
「始まった」
俺が言うと、神父は目を見開く。
「犬面が命懸けで俺達を止めるって事は、もう俺達じゃ坊主を止められないって事だ。坑道を襲った貴族のガキども……もう間に合わねぇんだろ？　処刑」
地面に倒れ、自分の血でむせ返っている犬面が、絞り出すように答えた。
「日の出とともに……火炙りだ……止められない……戦争、は……ッ」
――日の出とともに。
なら、サナレの足止めがなければ間に合っていた事になる。それに気づいた神父は、聖職者にあるまじき罵り声を上げ、ゼロも不機嫌そうに黙り込んだ。

「つまりこいつを殺して先に進んで、陣を敷いてる連中を皆殺しにし、坊主のところまで戻っても戦争は不可避。しかも俺達は国の騎士連中を惨殺した犯罪者として追われる事になるし、坊主は俺達を殺さざるを得なくなる。引くのが最善だ」

「でなければ、わっぱを殺してこの国を乗っ取るか――か。ナナがわっぱの首を手土産に教会に忠誠を誓えば、始まった戦争も終わるだろうが……」

「私はその案を推しますよ」

「そりゃお前はそうだろうよ」

神父の横槍に、俺は舌を出して吐き捨てる。

だが、ナナは十三番に弟子入りしてる魔術師だ。どう考えても、和平の条件にはナナの処刑か永久幽閉が入ってくる。

そしてウェニアス王国は教会が決めた新たな王家によって、教会にとって都合のいい国家に作り替えられるだろう。

そうしたら、魔女は今まで以上に激しく弾圧される。

「おい魔女。そいつの怪我は治すなよ」

「言われずとも、分かっている。交渉は決裂した。狼のはわっぱへの忠誠を示し、我輩達を行かせまいと奮闘――結果、傭兵に深手を負わせる事に成功した。しかし狼のの傷も深く、意識を失った狼のは我輩達の行方を知る事はできない」

さすがゼロ、すべてお見通しというわけだ。
「お安い筋書きですね」
「お、お兄ちゃん……！　お腹、怪我……！」
リーリが俺の腹の傷を見て青ざめるが、この程度の傷は慣れっこだ。ゼロに治してもらわなくても、明日にはふさがり始めてるだろう。

公開処刑の効果は目覚しく、ウェニアス国内からは潮が引くように聖職者が逃げていった。同時に反教会派の人間が流入し、事態を重く見た教会はすぐさま教会騎士団を中心とした魔女討伐部隊を編成――その数は各国領主の私兵を合わせて四万に上り、ウェニアス王国の国内外を繋ぐ東西南北の坑道に包囲網を敷いた。
戦争の始まりだ。
これを受けてアルバスは、坑道内部の居住者に避難勧告を出し、大量の爆薬を設置。教会騎士団が坑道内部に侵入すると同時に爆破、生き埋めにする計画を進めたが、これが突如何者か――つっても十三番なんだが――によってすべて爆破され、教会騎士団が国内に進軍する前にすべての坑道が崩落。
結果、舞踏会のためにウェニアス王国に集い、捕虜となっていた各国の要人を国内に閉じ込めたまま、事実上、ウェニアス王国と教会との正面衝突は先送りの形となった。

言うまでもなく、これは壮大な時間稼ぎだ。

この坑道が再び開通し、教会騎士団がウェニアス王国になだれ込んでくる前に、アルバスをそそのかしているサナレを見つけてぶち殺す。

そのために――。

「まずは王女を捕らえ、サナレから器を奪う。――さあ諸君、反撃を始めるぞ。ああ、心が躍る。あの虫けらの足をじっくりともぎ取って、身動きもとれずに蠢く姿を見てやろう」

――『ゼロから始める魔法の書Ⅶ　―詠月の魔女〈下〉―』に続く。

あとがき

おひさしぶりです、虎走です。

ついに六巻に突入しまして、五巻のあとがきで書いたとおり上下巻になりました。

これも皆さまのおかげです。

例のごとく、ネタバレ回避のために物語とはまったく関係のない事を書こうかなと思います。

私は「取材」と称して海外旅行に行ったりするわけですが、英語力は下の下です。

どれくらい下かと言うと、タクシーで「ここで下ろして（レットミーアウト）」と言うべきところを、テンパって「ここで降りろてめぇ（ゲットアウトヒア）」と言ってしまうレベル。

まあそのタクシー運転手はメーター動かしていなかったし、見事にぼったくってくれたし、そもそも英語分かってないみたいだったので結果オーライなんですが、とにかく私の英語はひどい。

それでも海外でなんとか意思の疎通ができるのは、ひとえに中学高校で受けてきた英語の授業のたまものでしょう。「ディズイズアペン」なんてフレーズ、実際に役に立つわけないじゃない、と思って生きてきた私ですが、せっかくなのでプラハに行った時の面白英会話を皆さんにお伝えしたいと思います。

去年の十一月、魔法の都市として名高いプラハに行った時の話です。

プラハは観光都市であるので、英語が下手くそでも快適に買い物ができる。で、お土産としてかっこいいペンを三本買ったんですよ。金属製で、ライフル銃の弾丸の形してるやつ。勘のいい方は、この時点ですでにオチが読めている事でしょう。

そう、空港のセキュリティチェックです。飛行機に乗る人間が危険物を持ち込んでいないか、荷物を赤外線でチェックするアレ。

フランクフルト空港のセキュリティチェックで、赤外線チェックにかけられた私の手荷物には、燦然と輝く四発のライフル弾のシルエットが……！　にわかに空港に緊張が走り、「これはなんだ？」と詰め寄られた私は、反射的に答えていました。

「あぁああー！　ディ、ディスイズアペン！」

授業で習った英語めっちゃ役に立つなって思った瞬間でした。

空港警察にマシンガンで威嚇されながら、実物確認のためにペンを荷物から引っ張り出すまでの間、冷や汗が出っぱなしでした。

確かにペンだと確認が取れて、空港にはひとしきり笑いが広がり、私は平謝りしながら無事に飛行機に乗る事ができた。ペンは没収されてしまうかと思いましたが、ちゃんと返してもらえました。フランクフルト空港の皆さま、その節はご迷惑をおかけしました。

ちなみにそのいわくつきのペンは、いつもお世話になっているしずまよしのり先生に、お土産として貰われてゆきました。

いつも素晴らしいイラストを描いてくだって、本当にありがとうございます。キャラデザや口絵が上がってくるたび、「本当にしずま先生に担当していただいてよかった」と感動にうち震えるばかりです。

さらに本編コミカライズをしてくださっているいわさきたかし先生。いわさき先生の描くキャラの表情が、いつも可愛くて大好きです。

ちびキャラ番外編のコミカライズをしてくださっている、安岳先生。面白すぎるでしょう。笑ってしまうでしょう。なんなのそのギャグセンスどこから出てくるの。

そしてこの本に携わってくださっている全ての方と、読者の皆さんにも、何度ありがとうございますと言っても足りません。

それから、サインに使っている判子と、著者近影に使っている虎の写真をくれた友人に心からの感謝を。

あとがき

原稿を全て描き終った後 並べて確認したら
せっかく仲間になった神父のカットが無いという事に気がつき

給仕服を着てる神父を描いてみましたが
似合いすぎですね!!

それでは 下巻もよろしくお願いします。

本編コミカライズ

ゼロから始める魔法の書

作画／いわさきたかし

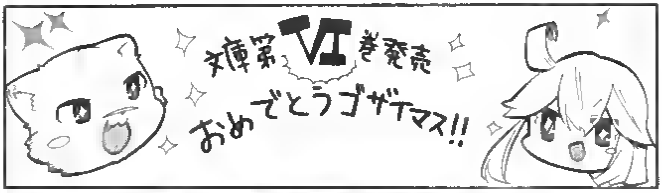
最新Ⅲ巻発売中!

コミック版『ゼロから始める魔法の書』作者特別寄稿!

ミニキャラスピンオフコミック

ゼロから始める魔法の書 なの!

作画／安岳



続きは電撃マオウに!?

どちらも電撃マオウ(毎月27日発売)にて好評連載中!

◉虎走かける著作リスト

「ゼロから始める魔法の書」（電撃文庫）
「ゼロから始める魔法の書Ⅱ　―アクディオスの聖女〈上〉―」（同）
「ゼロから始める魔法の書Ⅲ　―アクディオスの聖女〈下〉―」（同）
「ゼロから始める魔法の書Ⅳ　―黒竜島の魔姫―」（同）
「ゼロから始める魔法の書Ⅴ　―楽園の墓守―」（同）
「ゼロから始める魔法の書Ⅵ　―詠月の魔女〈上〉―」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「虎走かける先生」係
「しずまよしのり先生」係

本書は書き下ろしです。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

電撃文庫

ゼロから始める魔法の書VI
―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける

発　行　2016年4月9日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
03-3238-1854（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷・製本　加藤製版印刷株式会社

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2016 KAKERU KOBASHIR1

1SBN978-4-04 865913-0　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.jp/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

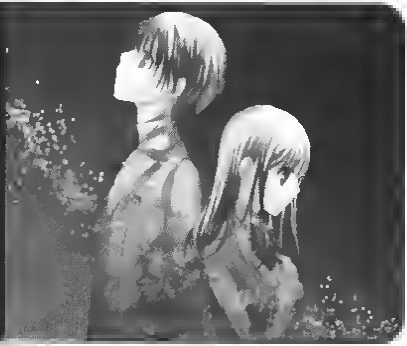
第22回電撃小説大賞受賞作発売中!!!

〈大賞〉

ただ、それだけでよかったんです

著/松村涼哉　イラスト/竹岡美穂

ある中学校で一人の男子生徒が自殺した。『菅原拓は悪魔だ』という遺書を残して――。壊れた教室を変えたい少年の、一人ぼっちの革命の物語が始まる。



〈金賞〉

ヴァルハラの晩ご飯 ～イノシシとドラゴンの串料理（ブロシェット）～

著/三鏡一敬　イラスト/ファルまろ

ボクはセイ。イノシシなんだけど、主神オーディンさまに神の国に招かれたんだ。ボク、ひょっとして選ばれし者なの!?　って、あれ、ここ台所?　え、ボクが食材!?

〈金賞〉

俺を好きなのはお前だけかよ

著/駄駄　イラスト/ブリキ

もし、気になる子からデートに誘われたらどうする?　当然意気揚々と待ち合わせ場所に向かうよね。そこで告げられた『想い』から、とんでもない話が始まったんだ。

〈銀賞〉

血翼王亡命譚Ⅰ（けつよくおうぼうめいたん） ―斬刀のアルナ―

著/新八角　イラスト/時

国を追われた王女と、刀を振るうしか能のない護衛剣士。森と獣に彩られた「赤燕の国」を旅し、彼らが胸に宿した祈りとは――。国史の影に消えた、儚き姫の亡命譚。

〈電撃文庫MAGAZINE賞〉

俺たち!!きゅぴきゅぴ♥Qピッツ!!

著/渠真創太　イラスト/ddal

これは、好きな相手に想いを告げられずに苦悩する学生たちの恋のキューピッドとなり、愛の華を開花させる、お節介な恋愛相談事たちの愛と勇気の物語――。

第22回電撃小説大賞受賞3作品

メディアワークス文庫より好評発売中!!

大賞

『トーキョー下町ゴールドクラッシュ!』

著／角埜杞真　イラスト／阿弥陀しずく

一世一代の大勝負に、大逆転は起こるのか!?

賠償金100億円――伝説の女トレーダー 橘立花は罠に嵌められ、証券会社を解雇された。無職となった立花は、偶然出会った下町商店街の人々の助けを得て、一世一代の大逆転にうって出る! 痛快さが癖になる、下町金融ミステリ!

メディアワークス文庫賞

『チョコレート・コンフュージョン』

著／星妻なつめ　イラスト／カスヤナガト

仕事に疲れたOL千紗が お礼のつもりで渡した義理チョコ。それは大いなる誤解を呼び、気付けば社内で「残し屋」と噂される強面・営生の恋人になっていた!? 凶悪面の純情リーマン×頑張りすぎなOLの、涙と笑いの倍強ラブコメ!

銀賞

『恋するSP(エスピー) 武将系男子の守りかた』

著／結月あさみ　イラスト／くじょう

要人警護を担うSP女子の黒田千奈美。しかしその中身は、上司の氷川に想いを寄せる恋する乙女だった! そんな彼女に下った命令とは、タイムスリップしてきた武将の警護!? 千奈美は俗世の誘惑から武将たちを守り切れるのか!?

第22回電撃小説大賞受賞作 全8作品の特集サイト公開中! http://dengekitaisho.jp/speciai/

ゼロから始める魔法の書

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

"魔術"から"魔法"への大転換期――。禁断の魔法書をめぐって契りを交わす、魔女と獣人のグリモアファンタジー！　第20回電撃小説大賞《大賞》受賞作！

こ-12-1　2686

ゼロから始める魔法の書Ⅱ
―アクディオスの聖女〈上〉―

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

【ゼロの書】が巻き起こす魔法の恐怖は、まだ終わっていなかった……。旅の途中、"神の奇跡"で民を病から救うという美しき聖女の噂を耳にしたゼロたちは――。新章突入の第2巻！

こ-12-2　2757

ゼロから始める魔法の書Ⅲ
―アクディオスの聖女〈下〉―

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

怪しげな"神の奇跡"を操る聖女の謎を追い、聖都アクディオスを訪れたゼロと傭兵。しかし、彼らに聖女暗殺の疑いがかけられてしまい――。聖都の秘密が暴かれる、必読の第三巻が登場！

こ-12-3　2890

ゼロから始める魔法の書Ⅳ
―黒竜島の魔姫―

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

流出した【ゼロの書の写本】回収のため、次の地へ急ぐゼロ達。しかし、2人が乗る貨物船は嵐にのまれ――辿り着いた島には"魔法"が普及した国家があった……。

こ-12-4　2973

ゼロから始める魔法の書Ⅴ
―楽園の墓守―

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

ゼロの名を騙る魔女が現れた海運国家テルゼム。偽者を追うゼロと傭兵の前に、"背徳"の異名を持つ裁定官が立ちふさがり――。魔女と教会の戦いが動き出す！

こ-12-5　3032

ゼロから始める魔法の書Ⅵ
―詠月の魔女〈上〉―

虎走かける
イラスト／しずまよしのり

魔女と教会を戦争へと導く〈不完全なる数字〉を追うゼロ達。〝十三番〟の名を口にした彼らが強制召喚された先は、主席魔法使いアルバスが待つウェニアス王国だった――

こ-12-6　3094

俺を好きなのはお前だけかよ

駱駝
イラスト／ブリキ

もし、気になる子からデートに誘われたらどうする？　当然意気揚々待ちうけるよね。そこで告げられた「想い」から、とんでもない話が始まったんだ。第22回電撃小説大賞〈金賞〉受賞作！！

ら-6-1　3061

俺を好きなのはお前だけかよ②

駱駝
イラスト／ブリキ

パンジーこと三色院菫子こと損暗口悪地味昭和眼鏡少女は、あいかわらず俺のことが好きみたいだ。クッもう殺せ……アイツの「正体」が分かってもそう思うよー

ら-6-2　3089

SE-Xふぁいる

五十嵐雄策
イラスト／しゃあ

ようこそ、斎条東高校「超常現象☆探究部」へ！

高校入学早々、蓮田が出会ったのは宇宙人に扮した謎の女の子で!?　少女の好奇心がエッチを呼ぶとき、少年は鼻血を解き放つ!?　業務のアブダクション・コメディー

い-8-35　3040

SE-Xふぁいる シーズン2

五十嵐雄策
イラスト／しゃあ

斎条東高校「超常現象☆探求部」の秘密

「超常現象☆探求部」で過ごす夏休みは謎がいっぱいエッチもいっぱい！　夏の怪談話を求めて「座敷童が出る旅館」にやってきた彼らが見たモノとは――!?

い-8-36　3092

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミン

宇野朴人　カバーイラスト／竈猫
キャラクター原案・口絵・本文イラスト／さんば挿

戦争嫌いで怠け者で女好き。そんな少年が、のちに名将とまで呼ばれる軍人になろうとは、誰も予想していなかった……。壮大なファンタジー戦記、開幕！

う-4-4　2353

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミンII

宇野朴人　カバーイラスト／竈猫
キャラクター原案・口絵・本文イラスト／さんば挿

実戦経験を積むため、北域へと遠征することになる帝国騎士イクタたち。訓練気分の彼らを待ち受けていたものは――。話題のファンタジー戦記、待望の第2巻！

う-4-5　2439

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミンIII

宇野朴人　カバーイラスト／竈猫
キャラクター原案・口絵・本文イラスト／さんば挿

大アラファトラ山脈でアルデラ神軍の大軍と向かい合う、疲労困憊の帝国軍。戦力的にも精神的にも勝ち目がない状況で、イクタはある決死の作戦を提案する！

う-4-5　2525

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミンIV

宇野朴人　カバーイラスト／竈猫
キャラクター原案・口絵・本文イラスト／さんば挿

北域での地獄のような戦争を生きぬき、中央に生還したイクタたちを待っていたのは、厳正なる軍事裁判だった……。話題のファンタジー戦記、待望の第4巻！

う-4-7　2609

ねじ巻き精霊戦記

天鏡のアルデラミンV

宇野朴人　カバーイラスト／竈猫
キャラクター原案・口絵・本文イラスト／さんば挿

未知なる戦場「海上」で手痛い敗北を喫するイクタたち。驚異的な破壊力をもつ敵艦に対して、有効な策はあるのか……!?人気のファンタジー戦記、第5巻！

う-4-8　2708

ねじ巻き精霊戦記
天鏡のアルデラミンVI
宇野朴人
イラスト／竜徹　キャラクター原案／さんば挿

軍事クーデターによって、カトヴァーナ帝国軍はイグセム派とレミオン派に二分され、戦乱の様相を呈する。激しく揺れる帝国で、イクタたちにできることは？

う-4-9　2824

ねじ巻き精霊戦記
天鏡のアルデラミンVII
宇野朴人
イラスト／竜徹　キャラクター原案／さんば挿

軍事クーデターによって、敵と味方に分かれることになったイクタとヤトリ。仮臣トリスナイの企てに踊らされ、ついに二人は戦場で相まみえることに……。

う-4-10　2903

ねじ巻き精霊戦記
天鏡のアルデラミンVIII
宇野朴人
イラスト／竜徹　キャラクター原案／さんば挿

国を揺るがしたクーデターから約二年。第二十八代皇帝シャミーユが率いるカトヴァーナ帝国とキオカの戦いは、新たな局面を迎えていた。そしてイクタは……。

う-4-11　3001

ねじ巻き精霊戦記
天鏡のアルデラミンIX
宇野朴人
イラスト／竜徹　キャラクター原案／さんば挿

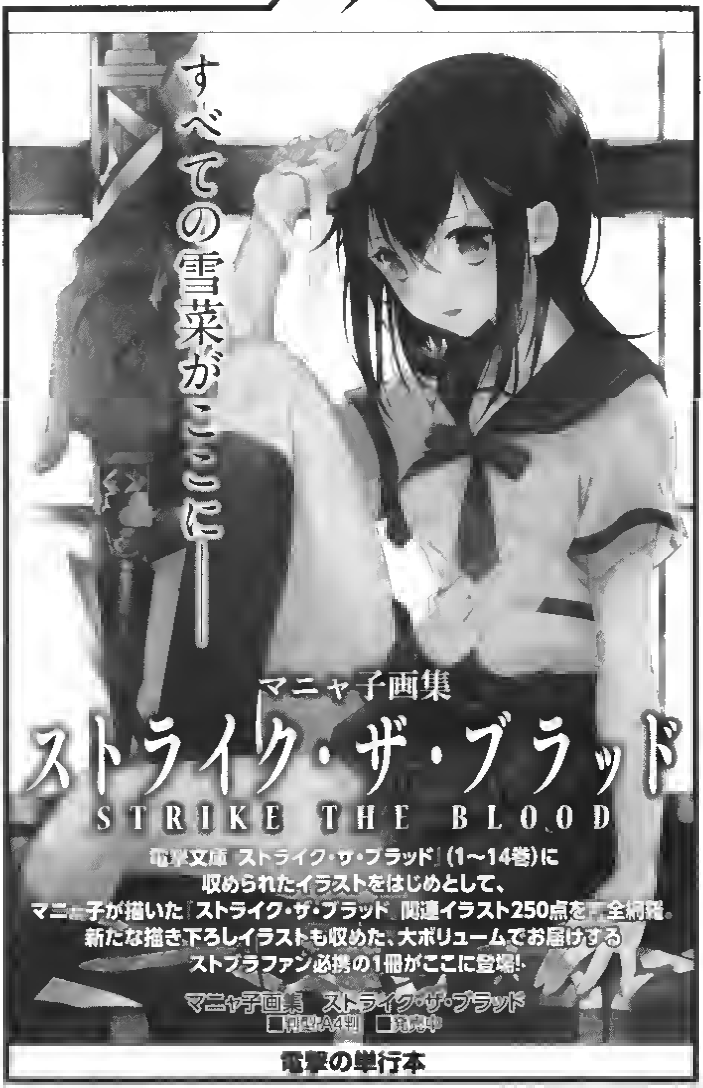
反乱分子の掃討を終え、国内を掌握したかに見えた女帝シャミーユ。しかしアルデラ教徒に不穏な動きが――。そして長い眠りから覚めたバトレンシーナは……。

う-4-12　3095

この大陸で、フィジカは悪い薬師だった
鳩見すた
イラスト／アマガイタロー

僕はその薬師が許せない。害ある「幻獣」を治療して回る重罪を冒しただけでなく、人への治療は拒否をする。エイル教会から異端認定されている彼女を、僕は必ず捕まえてみせる。

は-12-4　3090



マニャ子画集

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

電撃文庫『ストライク・ザ・ブラッド』（1～14巻）に
収められたイラストをはじめとして、
マニャ子が描いた『ストライク・ザ・ブラッド』関連イラスト250点を一挙全網羅。
新たな描き下ろしイラストも収めた、大ボリュームでお届けする
ストブラファン必携の1冊がここに登場!!

マニャ子画集　ストライク・ザ・ブラッド
■判型：A4判　■発売中

電撃の単行本

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。受賞作品は
「電撃文庫」「メディアワークス文庫」「電撃コミック各誌」からデビュー!

上遠野浩平（ブギーポップは笑わない）、高橋弥七郎（灼眼のシャナ）、
成田良悟（デュラララ!!）、支倉凍砂（狼と香辛料）、
有川 浩（図書館戦争）、川原 礫（アクセル・ワールド）、
和ヶ原聡司（はたらく魔王さま！）など、
常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。
新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞・
電撃コミック大賞

賞（共通）

大賞……正賞＋副賞300万円
金賞……正賞＋副賞100万円
銀賞……正賞＋副賞50万円

（小説賞のみ）

メディアワークス文庫賞
正賞＋副賞100万円

電撃文庫MAGAZINE賞
正賞＋副賞30万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門、コミック部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします!

各部門（小説、イラスト、コミック）
郵送でもWEBでも受付中!

最新情報や詳細は電撃大賞公式ホームページをご覧ください。

http://dengekitaisho.jp/

編集者のワンポイントアドバイスや受賞者インタビューも掲載！

主催 株式会社KADOKAWA　アスキー・メディアワークス